



Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.6

Ninomaru of Sendai Castle (NM18 site)

- Excavation reports of Loc.18 of Ninomaru i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle -

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University

仙台城跡二の丸第18地点

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告6 仙台城跡二の丸第18地点



仙台城跡二の丸第18地点 (NM18)
西北から仙台市街地・仙台城大手門跡地を望む

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告6
仙台城跡二の丸第18地点

東北大学埋蔵文化財調査室
2017



1. 仙台城跡二の丸第18地点1B・2B区全景（上が北）



2. 仙台城跡二の丸第18地点1B区土層堆積状況(北から)



3. 仙台城跡二の丸第18地点6A・6B区全景（上が北）



4. 仙台城跡二の丸第18地点6B区遺構確認状況（北から）



5. 仙台城跡二の丸第18地点6A区建物1柱1(ピット2)断面(西から)



6. 仙台城跡二の丸第18地点7A・7B区全景(上が北)

序

本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の6冊目として、川内南キャンパスにおける総合研究棟（国際文科学系）整備事業に伴い実施した、仙台城跡二の丸第18地点の調査成果をまとめたものです。

東北大学埋蔵文化財調査室では、以前は『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。2007年度より年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、東北大学構内における埋蔵文化財調査の発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』というシリーズで刊行しております。本報告書は、その6冊目となります。

今回報告する仙台城跡二の丸第18地点の調査は、東日本大震災により被害を受けた法・経大講義棟を建て替える国際文科系教育研究拠点施設の整備に伴うものです。今回の調査により、川内南地区において近世の層が良好に残っていることが判明し、礎石や溝跡等の多数の近世の遺構を確認することができました。今後の仙台城跡二の丸の実態を考える上で貴重なデータが得られたものと考えています。

調査の実施から報告書の刊行まで、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室

室長 藤澤 敦

例　言

1. 本調査報告は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査室が2013・2014年度行った仙台城跡二の丸第18地点の調査成果をまとめたものである。

2. 報告する遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

　遺跡と略号：仙台城跡二の丸第18地点（NM18）

　調査期間　：2013年3月13日～5月17日、2014年4月1日～6月30日

　調査担当者：藤沢　敦（2014年度まで）・柴田恵子・菅野智則・大久保弥生（2013年度）、

　田中則和（2014年度）

3. 調査・整理作業は、東北大学理蔵文化財調査室が行った。

4. 本報告の編集・執筆は、菅野智則・柴田恵子・石橋宏が担当した。執筆分担は下記のとおりである。

　なお、第VI章に関しては、調査担当者の一人である藤沢敦（現東北大学総合学術博物館教授）から御教示を頂いた。

　第I章 石橋

　第II章2（4）以外、第III章、第IV章、第VI章、第VII章 菅野

　第II章2（4）、第V章 柴田

5. 英文要旨については、柴田恵子が作成した。

6. 遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手描きで作成している。この遺物実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。また、磁器と陶器の文様部分の図面原版は、株式会社CUBICの遺物実測システム「遺物くんcubicAタイプ」を利用した。

7. これまでに、本調査の概要是『年次報告』2013・2014、「平成26年度宮城県遺跡調査成果発表会」（宮城県考古学会主催、2016年12月13日開催）にて公表してきた。それらの内容より、本報告書の内容が優先する。

8. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

　仙台市教育委員会、宮城県教育委員会、東北大学大学院文学研究科考古学研究室、

　仙台市歴史民俗資料館、天野順陽（宮城県教育委員会）、阿子島香・鹿又喜隆・龍橋俊光（東北大学）、

　渡部　紀・斎野裕彦・佐藤　洋・佐藤　淳・鈴木　隆（仙台市教育委員会）、

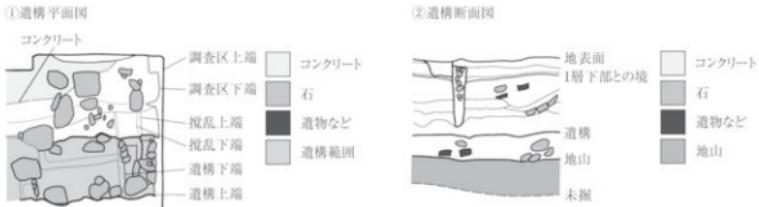
　佐藤雅也・畑井洋樹（仙台市歴史民俗資料館）

9. 出土遺物・調査記録は、東北大学理蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡 例

1. 図1・2の背景の元図は、国土地理院発行の1万分の1地形図（『青葉山』）を使用した。図3-1の空中写真は、整理番号USA、コース番号M1822、写真番号157、1952（昭和27）年11月2日撮影のものである。図3のほかの地形図と図4・5の絵図・地形図の出典は、それぞれに示した。また、図6・7で使用している川内地区的仙台城跡二の丸地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会作成の「仙台城跡地形図」（縮尺500分の1）を使用している。
2. 掃図・写真等の方位は、それぞれに示した。
3. 遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。
4. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。

例 「東北大学埋蔵文化財調査年報」1	… 「年報」1
「東北大学埋蔵文化財調査年次報告」2008	… 「年次報告」2008
「東北大学埋蔵文化財調査報告」1	… 「調査報告」1
5. 元号と西暦の記述は、通常は「西暦（元号）年」（例えば「2015（平成27）年」）と表記する。ただし、近世・近代が主体となる場合は、「元号（西暦）年」（例えば「天明6（1786）年」）と表記する。
6. 掃図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。これら以外については、それぞれに表記している。



目 次

卷頭カラー図版	
序	
例言	
凡例	
目次	
図目次	
表目次	
写真図版目次	
第Ⅰ章 仙台城跡二の丸の立地と歴史	1
1. 仙台城跡二の丸の立地	1
2. 仙台城跡二の丸の歴史	1
3. 仙台城跡二の丸におけるこれまでの調査	5
第Ⅱ章 調査の方法と経過	14
1. 調査地点の位置と調査に至る経緯	14
2. 調査の方法と経過	14
(1) 発掘調査の経過	14
(2) 記録方法	17
(3) 遺構の名称について	17
(4) 遺物の取り上げについて	18
(5) 整理作業	18
第Ⅲ章 基本層序	25
第Ⅳ章 検出遺構	27
1. 1・1B区の層序と遺構	27
(1) 経過と層序	27
(2) 検出した遺構	27
2. 2・2B区の層序と遺構	33
(1) 経過と層序	33
(2) 検出した遺構	33
3. 3区の層序と遺構	39
(1) 経過と層序	39
(2) 検出した遺構	39
4. 4区の層序と遺構	39
(1) 経過と層序	39
(2) 検出した遺構	39
5. 5区の層序と遺構	42
(1) 経過と層序	42
(2) 検出した遺構	42
6. 6A区の層序と遺構	42
(1) 経過と層序	42
(2) 検出した遺構	45
7. 6B区の層序と遺構	48
(1) 経過と層序	48
(2) 検出した遺構	51
8. 7A・7C区の層序と遺構	54
(1) 経過と層序	54
(2) 検出した遺構	58
9. 7B区の層序と遺構	58
(1) 経過と層序	58
(2) 検出した遺構	58
第V章 出土遺物	61
1. 1・1B区の遺物	61
2. 2・2B区の遺物	64
3. 3区の遺物	65
4. 4区の遺物	65
5. 5区の遺物	65
6. 6A区の遺物	66
7. 6B区の遺物	67
8. 7A区の遺物	69
9. 7B区の遺物	70
第VI章 考察	96
1. 各区の層序	96
(1) 1・2・4～6区の層形成の段階	96
(2) 3・7区の変遷	98
2. 絵図との対比	99
第VII章 まとめ	102
引用・参考文献	103
東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧	105
英文要旨	107
写真図版	109
報告書抄録	

図 目 次

図1 仙台城周辺の地形区分図	2
図2 仙台城と二の丸の位置	3
図3 川内地区周辺の地形	6
図4 川内地区周辺の絵図・地図(1)	7
図5 川内地区周辺の絵図・地図(2)	8
図6 川内南地区調査地点	9
図7 仙台城跡二の丸第18地点調査区の位置	15
図8 二の丸第18地点調査区模式図	16
図9 二の丸第18地点における地層の対比	26
図10 二の丸第18地点1・1B区の遺構配置	28
図11 二の丸第18地点1・1B区の土層断面(1)	29
図12 二の丸第18地点1・1B区の土層断面(2)	30
図13 二の丸第18地点1B区の遺構	32
図14 二の丸第18地点2・2B区の遺構配置	34

図15	二の丸第18地点2・2B区の土層断面(1) ····	35
図16	二の丸第18地点2・2B区の土層断面(2) ····	36
図17	二の丸第18地点2・2B区の遺構 ····	38
図18	二の丸第18地点3・4・5区の遺構配置 ····	40
図19	二の丸第18地点3・4・5区の土層断面 ····	41
図20	二の丸第18地点6A区の遺構配置 ····	43
図21	二の丸第18地点6A区の土層断面(1) ····	44
図22	二の丸第18地点6A区の土層断面(2) ····	46
図23	二の丸第18地点6A区の遺構 ····	47
図24	二の丸第18地点6B区の遺構配置 ····	49
図25	二の丸第18地点6B区の土層断面(1) ····	50
図26	二の丸第18地点6B区の土層断面(2) ····	51
図27	二の丸第18地点6B区の遺構 ····	53
図28	二の丸第18地点7A・7C区の遺構配置 ····	55
図29	二の丸第18地点7A区の土層断面(1) ····	56
図30	二の丸第18地点7A区の土層断面(2) ····	57
図31	二の丸第18地点7A区の遺構 ····	57
図32	二の丸第18地点7B区の遺構配置 ····	59
図33	二の丸第18地点7B区の土層断面 ····	60
図34	仙台城跡出土軒丸瓦類・軒桟小瓦の文様 ····	62
図35	仙台城跡出土軒平瓦・軒桟瓦の瓦当文様(1) ····	62
図36	仙台城跡出土軒平瓦・軒桟瓦の瓦当文様(2) ····	63
図37	二の丸第18地点6B区出土土師質土器(皿)の 法量分布図 ····	68
図38	陸軍省境界石(S3)の加工状況 ····	71
図39	二の丸第18地点(1・1B区)出土遺物 ····	72
図40	二の丸第18地点(2・2B区)出土遺物 ····	72
図41	二の丸第18地点(3区)出土遺物 ····	72
図42	二の丸第18地点(6A区)出土遺物 ····	72
図43	二の丸第18地点(6B区)出土遺物(1) ····	73
図44	二の丸第18地点(6B区)出土遺物(2) ····	74
図45	二の丸第18地点(6B区)出土遺物(3) ····	75
図46	二の丸第18地点(6B区)出土遺物(4) ····	76
図47	二の丸第18地点(7B区)出土遺物 ····	76
図48	二の丸第18地点(7B区)出土遺物 ····	77
図49	二の丸第18地点の層序関係 ····	97
図50	仙台城跡二の丸第18地点調査区と 絵図の関係 ····	100
図51	仙台城跡二の丸第18地点周辺の絵図 ····	101

表 目 次

表1	仙台城と仙台城周辺武家屋敷の 調査一覧(1) ····	12
表2	仙台城と仙台城周辺武家屋敷の 調査一覧(2) ····	13
表3	二の丸第18地点遺構名称対照表(1) ····	19
表4	二の丸第18地点遺構名称対照表(2) ····	20
表5	二の丸第18地点遺構属性表(1) ····	21
表6	二の丸第18地点遺構属性表(2) ····	22
表7	二の丸第18地点遺構属性表(3) ····	23
表8	二の丸第18地点遺構属性表(4) ····	24
表9	二の丸第18地点遺構属性表(5) ····	24
表10	二の丸第18地点出土境界石観察表 ····	71
表11	二の丸第18地点出土磁器集計表 (1・1B区 近世) ····	78
表12	二の丸第18地点出土磁器集計表 (1・1B区 近現代) ····	78
表13	二の丸第18地点出土磁器集計表 (2・2B区 近世) ····	78
表14	二の丸第18地点出土磁器集計表 (2・2B区 近現代) ····	79
表15	二の丸第18地点出土磁器集計表 (3区 近世) ····	79
表16	二の丸第18地点出土磁器集計表 (3区 近現代) ····	79
表17	二の丸第18地点出土磁器集計表 (4区 近世) ····	79
表18	二の丸第18地点出土磁器集計表 (4区 近現代) ····	79
表19	二の丸第18地点出土磁器集計表 (5区 近世) ····	80
表20	二の丸第18地点出土磁器集計表 (5区 近現代) ····	80
表21	二の丸第18地点出土磁器集計表 (6A区 近世) ····	80
表22	二の丸第18地点出土磁器集計表 (6A区 近現代) ····	81
表23	二の丸第18地点出土磁器集計表 (6B区 近世) ····	81
表24	二の丸第18地点出土磁器集計表 (6B区 近現代) ····	82
表25	二の丸第18地点出土磁器集計表 (7A区 近世) ····	82
表26	二の丸第18地点出土磁器集計表 (7A区 近現代) ····	82
表27	二の丸第18地点出土磁器集計表 (7B区 近世) ····	82
表28	二の丸第18地点出土磁器集計表 (7B区 近現代) ····	83
表29	二の丸第18地点出土磁器集計表 (立会工事 近世) ····	83
表30	二の丸第18地点出土陶器集計表(1) ····	83
表31	二の丸第18地点出土陶器集計表(2) ····	84

表32	二の丸第18地点出土瓦集計表 (1).....	85
表33	二の丸第18地点出土瓦集計表 (2).....	86
表34	二の丸第18地点出土瓦集計表 (3).....	87
表35	二の丸第18地点出土瓦集計表 (4).....	88
表36	二の丸第18地点出土土器、 その他の遺物集計表 (1).....	89
表37	二の丸第18地点出土土器、 その他の遺物集計表 (2).....	90
表38	二の丸第18地点出土金属製品集計表.....	91
表39	二の丸第18地点出土磁器観察表.....	92
表40	二の丸第18地点出土陶器観察表.....	93
表41	二の丸第18地点出土土師質土器 (焼塙壺) 観察表.....	93
表42	二の丸第18地点出土墨書きある 土師質土器 (皿) 観察表.....	93
表43	二の丸第18地点出土土師質土器 (皿) 観察表.....	94
表44	二の丸第18地点出土古銭観察表.....	94
表45	二の丸第18地点出土その他の遺物観察表.....	94
表46	二の丸第18地点出土軒丸瓦観察表.....	95
表47	二の丸第18地点出土軒平瓦類観察表.....	95
表48	二の丸第18地点出土軒找瓦観察表.....	95
表49	二の丸第18地点出土その他の瓦観察表.....	95

写 真 図 版 目 次

図版1	二の丸第18地点1区全景・土層断面.....	111
図版2	二の丸第18地点1B・2B区全景.....	112
図版3	二の丸第18地点1B区全景・土層断面.....	113
図版4	二の丸第18地点1B区土層断面.....	114
図版5	二の丸第18地点1B区遺構・土層断面.....	115
図版6	二の丸第18地点1B区遺構.....	116
図版7	二の丸第18地点2B区全景.....	117
図版8	二の丸第18地点2B区土層断面 (1).....	118
図版9	二の丸第18地点2B区土層断面 (2).....	119
図版10	二の丸第18地点2B・3区遺構.....	120
図版11	二の丸第18地点3区全景・土層断面.....	121
図版12	二の丸第18地点4区全景・土層断面.....	122
図版13	二の丸第18地点5区全景・土層断面.....	123
図版14	二の丸第18地点6A・6B区全景.....	124
図版15	二の丸第18地点6A区土層断面.....	125
図版16	二の丸第18地点6A区土層断面・遺構.....	126
図版17	二の丸第18地点6A区遺構.....	127
図版18	二の丸第18地点6B区全景.....	128
図版19	二の丸第18地点6B区土層断面.....	129
図版20	二の丸第18地点6B区遺構・土層断面、 7A・7B区全景.....	130
図版21	二の丸第18地点7A・7B区全景.....	131
図版22	二の丸第18地点7A区土層断面 (1).....	132
図版23	二の丸第18地点7A区土層断面 (2).....	133
図版24	二の丸第18地点7A区土層断面、 7B区全景・土層断面.....	134
図版25	二の丸第18地点7B区土層断面.....	135
図版26	二の丸第18地点7B区土層断面、 7C区全景.....	136
図版27	二の丸第18地点 (1・1B区) 出土遺物	137
図版28	二の丸第18地点 (2・2B区) 出土遺物	137
図版29	二の丸第18地点 (3区) 出土遺物	137
図版30	二の丸第18地点 (6A区) 出土遺物 (1)	138
図版31	二の丸第18地点 (6A区) 出土遺物 (2)	139
図版32	二の丸第18地点 (6B区) 出土遺物 (1)	140
図版33	二の丸第18地点 (6B区) 出土遺物 (2)	141
図版34	二の丸第18地点 (6B区) 出土遺物 (3)	142
図版35	二の丸第18地点 (6B区) 出土遺物 (4)	143
図版36	二の丸第18地点 (7A・7B区) 出土遺物	143
図版37	二の丸第18地点 (7B区) 出土遺物	144

第Ⅰ章 仙台城跡二の丸の立地と歴史

1. 仙台城跡二の丸の立地

仙台平野は、宮城県のはば中央部に位置し、西は奥羽脊梁山脈とそこから派生する丘陵地帯に接し、東は仙台湾に開いた平野である。狹義では、北は仙台市域北部の丘陵地帯、南は阿武隈川によって区切られる範囲を指す。仙台平野には、奥羽脊梁山脈に源を発した河川が西から東へ流下している。北から七北田川、広瀬川、名取川である。この中の広瀬川は、丘陵地帯を抜けて仙台平野に入ると、青葉山などの丘陵地の北東麓を流下し、やがて名取川に合流し、太平洋にそいでいる。この広瀬川の両岸には、河岸段丘が発達している。河岸段丘は、高位から台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と分けられており、河岸段丘の間は段丘崖となっている。

仙台城は、宮城県仙台市青葉区川内および荒巻に所在する。現在の仙台市街地中心部から、広瀬川を西に渡った川内・青葉山地区に位置しており、市街地西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺と、その間に広がる河岸段丘上に立地している（図1）。広瀬川が青葉山などの丘陵地の北東麓を流下しているため、広瀬川の南西側にあたる川内地区の河岸段丘はさほど広くない。一方、広瀬川の北東側には、広い河岸段丘面が連なっており、その東縁は活断層である長町一利府線によって画され、沖積平野に接している。仙台城下のほとんどの範囲は、この広瀬川北東側の河岸段丘上に位置している。現在の仙台市街地中心部も、この広瀬川の河岸段丘上に立地する。

仙台城の構成は、大きく本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれる（図2）。本丸は広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた標高115～138mの、青葉山の高位段丘面（青葉山Ⅲ面）に立地している（図1）。本丸の北西側に二の丸が、北東側に三の丸が配置されているが、本丸だけは一段高い高位段丘面に位置している。本丸の東側は、60m以上の断崖となっている。現在の広瀬川は、本丸の立地する丘陵からやや離れたところを流れている。しかし江戸時代には、広瀬川は大きく蛇行して、本丸東側の崖下までせまっていた。本丸の南側は、広瀬川の支流である竜の口渓谷の急崖で画されている。本丸は防御を重視し、このような急峻な地形を利用して造られている。

本丸の北側に広がる川内地区は、広瀬川によって形成された河岸段丘の中の、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面にあたる。二の丸は標高54～71mの上町段丘面に、三の丸は標高40m前後の下町段丘面に立地する。周辺の武家屋敷も、西側の標高の高い部分から広瀬川に向かって順に、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面に立地する。東北大学の川内北地区は、東側の一段低いグラウンド部分が中町段丘面にあたり、それ以外の区域は上町段丘面に相当する。

これらの河岸段丘を開析しつつ、広瀬川の支流が、西から東へ流れている。これらの支流のひとつである千貫沢が、二の丸の北側を流れたり、千貫沢をはさんで南側が二の丸地区、北側が二の丸北方武家屋敷地区となる。千貫沢は、標高差の大きい河岸段丘を横切る形で流下していることから、これらの段丘面を深く切り込んでいる。二の丸裏門から北に延びる道路が、千貫沢を渡るところに造られたのが千貫橋である。この付近では、段丘面の標高が57m程度、千貫沢の沢筋の標高は46m程度である。千貫橋付近の段丘面と千貫沢の標高差は11mあまりになり、深くて急峻な沢筋となっている。大橋付近を流れる広瀬川の河原の標高は22m程度で、千貫橋付近の段丘面との標高差は、およそ35mとなる。また大手門の北側にも沢筋が残っており、仙台城の造営によって改変されていると思われるが、本来は急峻な沢筋であったと考えられる。

2. 仙台城跡二の丸の歴史

仙台城は、1600（慶長15）年から、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって築城が開始された近世城郭である。その後、幾たびかの改変を受けつつ、幕末まで仙台藩の中核として機能していく。この仙台城は、本丸と二の丸の一部を除き、2003（平成15）年に国史跡に部分指定されている。

この伊達政宗による築城以前には、国分氏の千代城が存在したことが知られていたが、その実態は不明なま

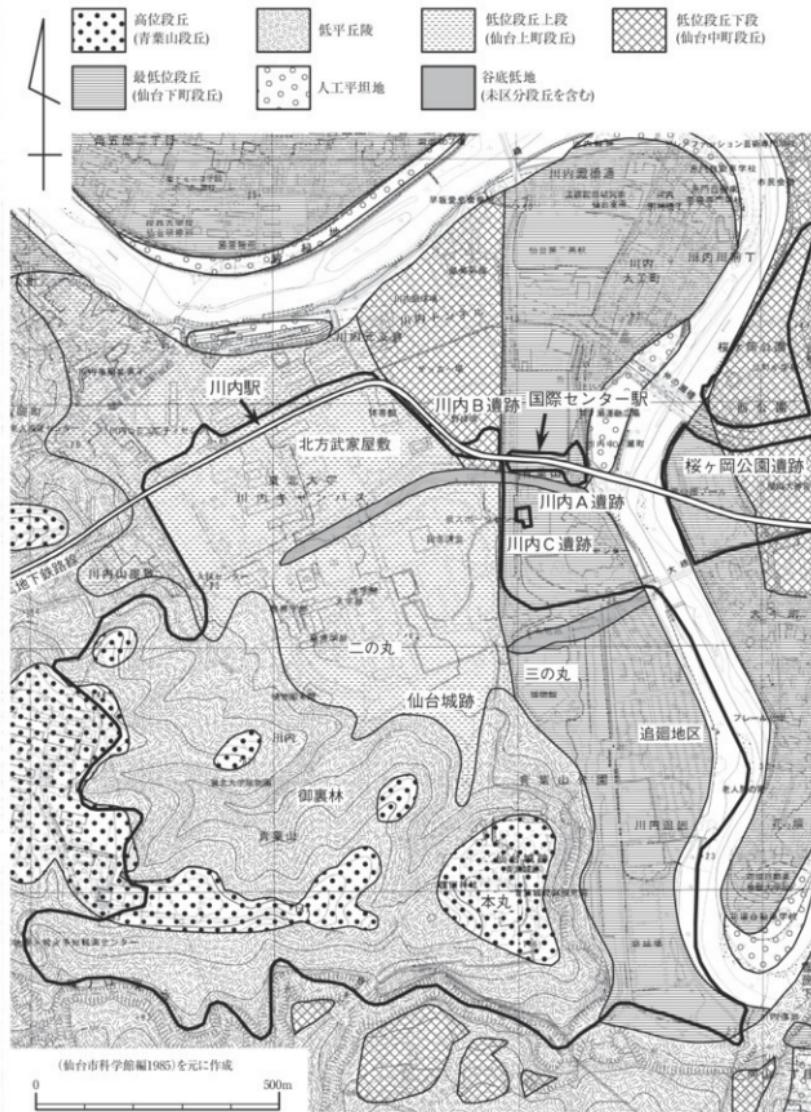


図1 仙台城周辺の地形区分図
Fig.1 Topographical map around Sendai Castle

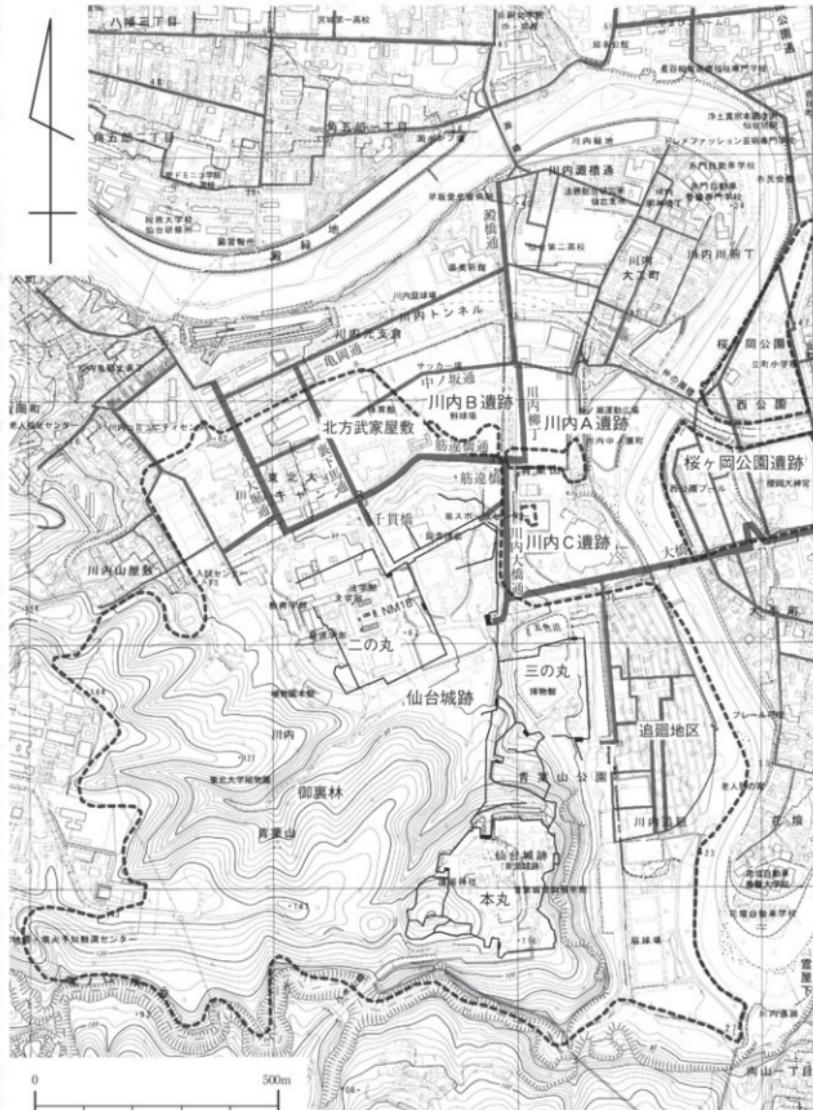


図2 仙台城と二の丸の位置
Fig.2 Distribution of Sendai Castle

であった。1998（平成10）年の仙台市教育委員会による本丸石垣修復工事に伴う調査の際に、虎口・堅堀・平場・通路などの遺構が検出され、初めて国分氏の千代城の遺構の一端が明らかとなった（金森安孝・渡部紀2009）。千代城は、文献記録や発掘調査成果の検討から、築城期は不明であるが、16世紀末の天正年間（1573～92年）頃に廃絶されたと考えられている。

伊達政宗によって造営された仙台城の本丸は、1602（慶長7）年には、土木工事にあたる普請がほぼ完成していたと考えられる。各種の殿舎建築は継続中であったと思われ、本丸の中心建物となる「大広間」は、1610（慶長15）年に完成したとされる。築城時に、本丸北側には石垣が築かれるが、石垣修復に伴う発掘調査によって、3時期に渡る変遷が明らかとなった。築城期のⅠ期石垣は、1616（元和2）年の地震で大きな被害を受け、Ⅱ期石垣が築かれる。Ⅲ期石垣も、1668（寛文8）年の地震で大きく崩壊し、現存するⅢ期石垣が造られたことが明らかとなっている（金森安孝・渡部紀2009）。

仙台城が築城された時点での、本丸以外の施設を含めた仙台城の全体像は、必ずしも明らかではない。

後に三の丸（東丸）とされる区域では、仙台市教育委員会による発掘調査によって、政宗時代の茶室や四阿の可能性のある建物跡などが発見されている。池跡も検出されており、庭園が伴うものと推定されている（佐藤洋ほか1985）。本丸に付随した施設として、整備が進められていたと考えられる。

この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとの伝承がある。しかし、この伝承を検証できる資料はない。本丸の築造が進められた慶長年間（1596～1615年）には、伊達宗泰は元服前の幼少期であり、この時期に伊達宗泰の屋敷が置かれていたと想定することは難しい。伊達宗泰の屋敷が置かれていたとしても、本丸築城期より遅れる可能性もある。また、他の重臣の屋敷が置かれていた可能性を示す史料もある。文献史料に残されていない、これら以外の屋敷が置かれた可能性も検討していく必要がある。いずれにせよ、二の丸第9地点（NM9）などの発掘調査では、江戸時代初頭に遡る遺構が検出されており、本丸築城期から、何らかの施設が置かれていたことは確実である（『年報』8・9）。

1620（元和6）年には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八（いのちは）姫の居館である「西屋敷」が造られる。五郎八姫は、伊達政宗の正室愛姫との間に生まれた長女で、1599（慶長4）年に徳川家康の六男忠輝と婚約し、1606（慶長11）年に奥入れる。しかし、1616（元和2）年に忠輝が、大阪夏の陣の際の参謀・意戦と、家臣による旗本殺害に対する不謝罪を理由に改易され、伊勢国に配流されると、五郎八姫は政宗の江戸屋敷へ帰され、さらに1620（元和6）年には仙台に移ることになった。この五郎八姫の、仙台における居所として造られたのが「西屋敷」である。1645（正保2）年の『奥州仙台城絵図』（正保絵図）に描かれており、東西102間、南北60間であったことが記されている。東側に門が描かれ、東向きの屋敷であったことが判る。二の丸第5地点（NM5）の調査では、西屋敷期の礎石建物跡などが発見されており、その西側に複雑な形態の池が連なる庭園が広がっていたことが判明している（『年報』6・7）。

伊達政宗は、1627（寛永4）年、仙台城下の南東側にあたる現在の仙台市若林区古城において、若林城を造営する。「仙台屋敷構」として幕府の許可を得たものであるが、周囲に堀と土塁をめぐらした城郭である。1628（寛永5）年に若林城が完成すると、政宗は国元では若林城を居城とし、仙台城に滞在するのは、儀式など特別な場合に限られるようになる。対照的に、後の二代藩主伊達忠宗は、国元では仙台城に滞在していた。この若林城の建物が、後の二の丸造営の際に、移築されていることが仙台藩の公式記録である『治家記録』に記されている。若林城跡の第5次調査と第8次調査で調査された1号建物跡が、仙台城二の丸を描いた『御二之丸御指図』に見られる「大台所」と一致することなどが明らかとなり、若林城の建物を仙台城二の丸に移築したという文献記録を裏付けることとなった（佐藤淳ほか2008・2010）。

伊達政宗は1636（寛永13）年に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、1638（寛永15）年に、伝伊達宗泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸で行われるよ

うになり、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以降、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。二の丸の造営とはほぼ同じ頃に、三の丸（東丸）には、米蔵が置かれるようになつたと考えられる。

1638（寛永15）年に二の丸が造営された時点では、五郎八郷の「西屋敷」が、二の丸の北側に存続していた。五郎八郷が1661（寛文元）年に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるようになつた。

17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって、二の丸は大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。仙台城では、藩主と側室の居住の場を「中奥」と呼んでいた。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。二の丸は、1804（文化元）年の火災では全焼する被害を受けつつも、従来通り再建され、幕末まで仙台城の中核として維持されていく。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城も大きく変化する。仙台藩は奥羽越列藩同盟の中心として新政府に対抗するが、相次ぐ軍事的敗北の中で同盟は瓦解する。仙台藩は1868（慶應4・明治元）年9月に新政府に降伏謝罪し、12月には領地・領民をいったん取り上げられた上で、28万石を新たに拝領し存続が許された。1869（明治2）年の版籍奉還により、藩主伊達宗基が仙台藩知藩事となり、二の丸には藩の統治機関たる勤政庁が置かれた。1871（明治4）年の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は、明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本營として引き続き利用された。しかし1882（明治15）年の火災で、二の丸建物のはとんどが焼失してしまう。そして1886（明治19）年には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、1888（明治21）年には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には師団司令部が置かれ、三の丸跡には陸軍倉庫が置かれていた。本丸跡には、1904（明治37）年に仙台招魂社（後の護国神社）が建てられ、戦没者を祀る場所へと変わる。1905（明治38）年には地形図が作成されている（図3-2）。川内北キャンパスは、「歩兵第二十九連隊營」と記載されており、方形に囲むように大規模な建物が建てられていたことがわかる。

1945（昭和20）年7月21日の仙台空襲の際に、仙台城の建物として最後まで残っていた大手門・脇櫓と巽門が焼失する。敗戦後は、二の丸跡をはじめとする川内地区のかつての軍用地が、米軍の駐屯地であるキャンプ・センダイとなる。この頃の空撮写真には、キャンプ・センダイの建物配置が明瞭に記録されている（図3-1）。そして、1957（昭和32）年に米軍からの返還を受け、二の丸地区のはとんどは東北大學が使用し、一部は仙台市の公園となった。大学の当初の建物は、米軍の建物をそのまま利用していたものであり、1969（昭和44）年の地形図にも、米軍期とほぼ同じ状況であることが記録されている（図3-4）。

3. 仙台城跡二の丸におけるこれまでの調査

仙台城の考古学的調査は、本丸・二の丸・三の丸などの各地区において実施されている。二の丸地区については、東北大學の施設整備事業などに先立ち、東北大學によって調査が実施してきた。三の丸地区では、仙台市博物館の建て替えに伴い、仙台市教育委員会による調査が実施されている。本丸地区では、石垣修復工事に伴う仙台市教育委員会による調査が、1997（平成9）年から実施され、多大な成果をあげるとともに、史跡指定への直接的な契機となつた。2001（平成13）年度からは、文化庁の国庫補助を受けた遺構確認調査が仙台市教育委員会によって開始されている。表1-2に、仙台城と周辺武家屋敷地区における調査の一覧を示しておいた。

仙台城跡二の丸の調査は、仙台市教育委員会によって小規模な調査が実施されたことがあるが、組織的・継続的に行われるのは、東北大學に埋蔵文化財調査委員会が設置された1983年度以降のことである。以来、委員会及びそれを改組して東北大學埋蔵文化財調査研究センター・東北大學埋蔵文化財調査室が引き継いで調査した地点



1. 川内地区周辺地形空撮 (1952(昭和27)年11月2日撮影)



2. 川内地区周辺地形図①
(1905(明治38)年測量『仙臺南部』)



3. 川内地区周辺地形図②
(1928(昭和3)年測量『仙台西北部』)



4. 川内地区周辺地形図④
(1969(昭和44)年修正『國土基本図X-QE40』)



5. 川内地区周辺地形図⑤
(2007(平成19)年修正『青葉山』)

図3 川内地区周辺の地形
Fig.3 Topographical map around Kawauchi campus

2・3 : S=1/25,000

4・5 : S=1/10,000



1. 正保2（1645）年 奥州仙台城絵図



2. 宽文4（1664）年 仙台城下絵図



3. 宽文8・9（1668・69）年 仙台城下絵図



4. 延宝6～8（1678～80）年 仙台城下大絵図



5. 延宝9～天和3（1681～83）年 仙台城下絵図



6. 元禄4・5（1691・92）年 仙台城下五重塔絵図



7. 享保9（1724）年以降 仙台城下絵図

1・2・6（小林清春監修1994）

3・4（阿刀田令造1976：第2版）

5・7（吉岡一男編2005）

図4 川内地区周辺の絵図・地図（1）
Fig.4 Picture maps around the Kawauchi area (1)



8. 宝曆10～明和3（1760～66）年 仙台城下絵図



9. 天明6～寛政元（1786～89）年 仙台城下絵図



10. 安政3～6（1856～59）年 安靜補正改革仙府絵図



11. 明治8（1875）年 宮城郡仙台町地引図



12. 明治13（1880）年 宮城県仙台区全図



13. 明治15（1882）年 仙台区及近傍村落之図



14. 明治26（1893）年 仙台市測量全図

9・10・14（小林清春監修1994）

8・11～13（吉岡一男編2005）

図5 川内地区周辺の絵図・地図（2）
Fig.5 Picture maps around the Kawauchi area (2)

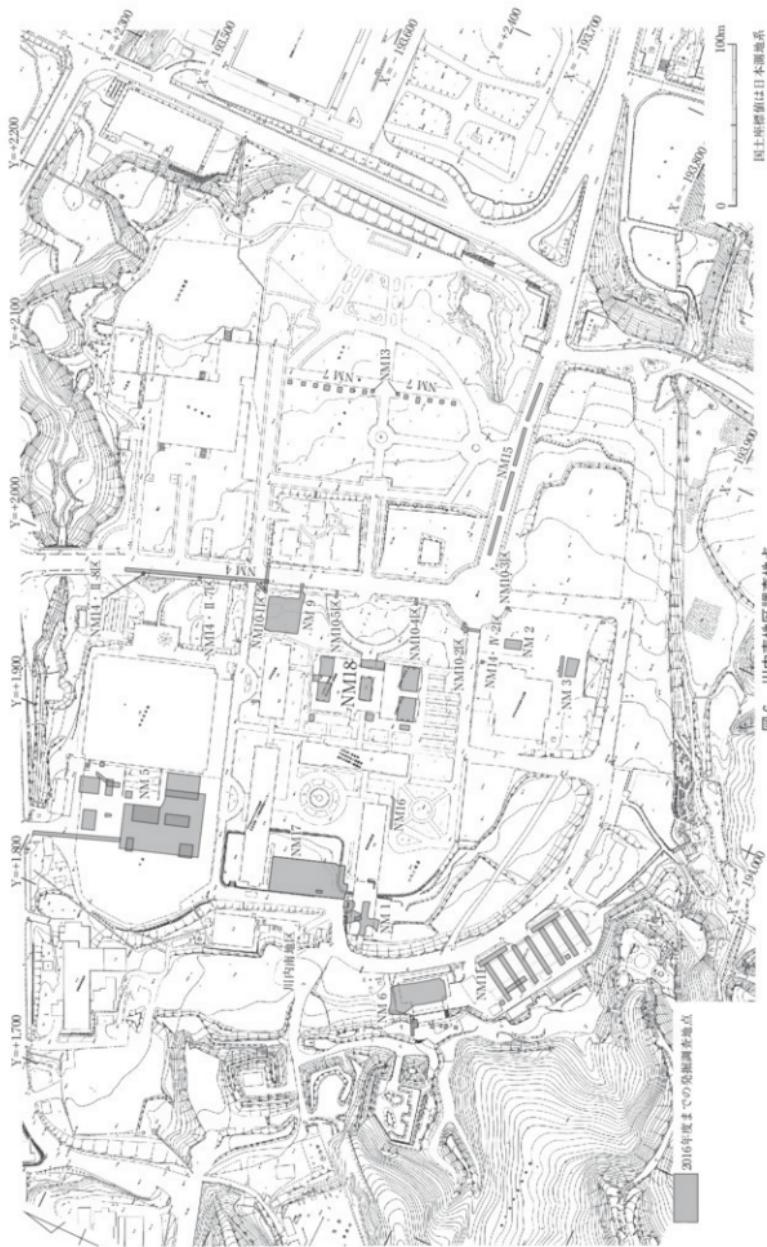


図6 川内南地区調査地点 (NM ie Secondary Citadel)
Fig.6 Location of excavations at Kawauchi-Minami campus (NM ie Secondary Citadel)

は18地点を数える（図6）。いずれも、東北大学の施設整備に伴う、記録保存のための調査である。二の丸造構群の破壊を可能な限りおさえるため、二の丸中腹部における施設整備を極力避ける方針をとってきた。そのため、二の丸の中でも周辺部の調査が多くなる結果となっている。

大規模な調査としては1990年度に実施した第9地点があり、まとまった遺物が出土した調査は、1991年度の第10地点の調査で一旦の区切りとなった。そのため、第10地点の調査成果をとりまとめた『年報』9において、それまでの二の丸地区的調査成果をまとめて検討を加えた。これによって、現況での二の丸建物位置関係を、ほぼ推定することができるようになっている。

これ以降に実施した第11地点～第18地点の調査は、第12地点と第17地点・18地点を除くと小規模な調査である。以下、第1地点～第18地点の調査成果の概略を簡便にまとめておく。

第1地点（NM1）は、文系棟新築工事に伴う調査である。1983（昭和58）年度に150m²の調査を実施し、暗渠の溝や竪穴状のピットなどが確認された。絵図から二の丸の西端にあたると推定される（『年報』1）。

第2地点（NM2）は、文系厚生施設の除外施設建設に伴う調査である。1983（昭和58）年度に60m²の調査を実施し、江戸時代の礎石建物とそれに伴う石敷遺構が確認された。絵図から2代目藩主忠宗の創建の小広間の裏手にあたる御廊下とその張り出し部分と推定され、重要遺構として保存が措置された（『年報』1）。

第3地点（NM3）は、第2地点の代替地として、文系厚生施設の除外施設建設に伴う調査である。1983（昭和58）年度に70m²の調査を実施し、江戸時代の石垣や池、掘立柱建物などが確認された。池は二の丸構築前と推定され、石垣は、絵図から二の丸創建時に構築された二の丸最南端外郭線と推定される（『年報』1）。

第4地点（NM4）は、図書館本館前道路の排水管理設に伴う調査である。調査地点は、川内構内を南北に走る通称「中善通り」と呼ばれる道路沿いで、軸線がやや異なるが、二の丸北東部の東側外郭線にはほぼ一致する。道路の排水管ルートに沿って幅15mのトレンチを設定して、1984（昭和59）年度と1987（昭和62）年度の2回に分けて126m²の調査を実施した。掘立柱列・溝・ピット・石敷きの整地層が確認された。特に下層の溝は伝伊達宗泰屋敷地と西屋敷との境である可能性が推定される（『年報』5）。

第5地点（NM5）は、図書館新館増築に伴う調査である。1985（昭和60）年度・1987（昭和62）年度・1988（昭和63）年度に1520m²の調査を実施した。礎石建物・掘立柱建物・柱列・石列遺構・溝・池など、各時期の遺構が多数確認されたが、礎石建物・配石遺構や複雑な形態の池など下層の遺構群は、絵図では確認できない二の丸拡張以前の五郎八郷の西屋敷に対応すると推定される（『年報』6）。

第6地点（NM6）は、植物園記念館建設に伴う調査である。1985（昭和60）年度に400m²の調査を実施し、石組遺構・溝・堀基礎（石垣状遺構）が確認された。堀基礎から二の丸の最西端であることが明確になり、石組遺構と溝は、二の丸西側の水の管理や庭園的な施設と推定される（『年報』3）。

第7地点（NM7）は、川内記念講堂前庭整備の植樹に伴う調査である。遺構面の深さ以上の工事を行うケヤキ12本に対し、2m×2mの調査区12ヶ所を設定した。1985（昭和60）年度から1986（昭和61）年度に56m²の調査を実施し、溝・掘立柱建物跡・ピットなどが確認された。当地点は大手門に入った北側に位置し、絵図から掘立柱建物が「御兵具蔵」に対比できる可能性が推定される（『年報』4）。

第8地点（NM8）は、教養部文系教官棟新設に伴う調査である。1986（昭和61）年度に355m²の調査を実施し、堀・井戸・ピットなどが確認された。堀の立ち上がりは、二の丸北側に東西に延びていた堀の北側の岸的部分に相当する（『年報』4）。

第9地点（NM9）は、文・法学部研究棟新設に伴う調査である。1990（平成2）年度に473m²の調査を実施し、各時期の掘立柱建物・柱列・溝・土坑・池・井戸など多数の遺構が確認された。二の丸造営に伴う大規模な整地層の下層でまとめて確認された遺構は、江戸時代初期に遡るものもある。伝伊達宗泰屋敷の可能性も含め、本丸築城期から建物が置かれたことが判明した（『年報』8）。

第10地点 (NM10) は、川内南地区を南北に走る道路（通称「中善通り」）の外灯設置に伴う調査である。1区から5区の調査区は小規模であるものの、2区・3区は絵図との対比から二の丸でもっとも重要な儀式で使用された「小広間」の建物及びその廊下周辺に相当する。1991（平成3）年度に10m²の調査を実施し、石敷造構・石組溝・ピットなどが確認された。2区の石敷造構と石組溝・ピットは、絵図の露地や排水関係の溝と対応すると推定される（『年報』9）。

第11地点 (NM11) は、植物園本館新設に伴う調査である。1995（平成7）年度に新建物予定地に3 m × 29m のトレンチ7本を設定し表土を除去して、地耐力試験を実施した。建物支持に支障がないことから布基礎を採用し、工事立会調査とした。南西側付近の若干削平する場所のみ本調査を行った。35m²の調査が実施され、池状造構とピットなどが確認された。二の丸南西隅側の丘陵裾にあたる場所で、水対策に関わる造構の可能性が推定される（『年報』13）。

第12地点 (NM12) は、保健管理センター新設に伴う調査である。1993（平成5）年度に386m²の調査が実施され、堀・堰状造構・溝・土坑・柱列・ピットなどが確認された。北東側の第8地点（『年報』4）と近接しており、同様に、二の丸北側に東西に延びていた堀の北側の岸の部分が確認され、この堀を横断する堰状造構は、丸太と石を詰めた蛇籠を利用したもので、1856～1859（安政3～6）年の絵図の堰状造構と対応する可能性が推定される（『年報』11）。堀は現地表下6 mの深さまで調査され、それ以上の深さは危険のため調査を停止した。そのため堀底部については確認できていない（『年報』11）。

第13地点 (NM13) は、記念講堂前環境整備に伴う調査である。1992（平成4）年度に浸透樹設置予定地2ヶ所に2 m × 2 mの調査区を設定し、8 m²の調査が実施され、溝とピットが確認された。南北に近接する第7地点調査区のピットと組み合う掘立柱建物の可能性があり、絵図から「七十間御兵具蔵」の可能性が推定される（『年報』10）。

第14地点 (NM14) は、川内地区屋外環境整備に伴う調査である。川内北地区と南地区にまたがるが、名称が煩雑になることと、造構が検出されたのが二の丸に相当する区域のみであるため、全体を二の丸第14地点と呼称した。工区I～VI区のうち、川内南地区で対応するのはII～IV区・VI区である。1993（平成5）年度に56m²が調査され、ピットや溝などが確認された（『年報』11）。

第15地点 (NM15) は、川内南地区屋外環境整備に伴う調査である。1994（平成6）年度に、外灯7基とグリーンベルト新設区（東区）と、その電源を確保する管路（西区）の合計70m²の調査が実施された。西区では1882（明治15）年の火災に関連する炭屑を切る2基の暗渠状石組が確認された（『年報』12）。

第16地点 (NM16) は、経済学部仮演習棟新設に伴う調査である。1997（平成9）年度に11m²の調査が実施された。仮設建物本体下は掘削が浅く、近代盛土の範囲に納まることが判明し、工事立会である。排水管区は調査を実施し、調査区東側では多量の瓦と礫・砂を敷いた整地面が確認された。出土した瓦や磁器から、この整地面は18世紀後半から幕末の可能性が高い（『年報』15）。調査地点が絵図から二の丸殿舎中枢の御寝所・御座之間付近に当たり、不要となった瓦を利用して丁寧な整地を行っていたことが判明した（『年報』15）。

第17地点 (NM17) は、文科系4学部総合研究棟新宮に伴う調査である。1999（平成11）年度から2000（平成12）年度に継続して957m²の調査が実施された。礎石建物・掘立柱建物・柱列・ピット・石組溝・土坑・石敷き・便槽造構・堀・井戸など、江戸時代の各時期の多数の造構が確認された。江戸時代の絵図と対比すると、中央奥西端部を区画する解と付近の施設が、調査成果と良く対応することが判明した（『年報』18）。

第18地点は国際文化系教育研究拠点施設整備に伴い、江戸時代の地層や造構の保存状況を確認する目的で、2013（平成25）年度、2014（平成26）年度と継続して確認調査を行った。本書で報告する調査である。調査区総面積は788.4m²である。大学建物基礎、米軍共同溝、第二師団基礎、現代の埋設管などで破壊されている部分以外は、建物の範囲内でも江戸時代の地層が良好に残されていることが判明した。礎石建物とその内部の石敷き・

石組溝・溝などが確認された。絵図との対比から二の丸の「表」の北側から「中奥」にさしかかる部分で、「表」と「中奥」を区切る土手の位置、建物の間を通る石組溝などが、ほぼ推定していた位置で確認され、礎石建物も、おむね絵図に記載された建物に対応すると推定される。

その他、二の丸北側の堀を挟んだ川内北地区の北方武家屋敷も16地点の調査が行われ、成果が蓄積している。仙台市教育委員会による地下鉄東西線建設に先立つ調査は、2005（平成17）年度の川内A遺跡から始まり、二の丸北方武家屋敷地区では2006～09（平成18～21）年度にかけて、川内B遺跡では2008・09（平成20・21）年度に調査が行われている。桜ヶ岡公園遺跡では、2007・08（平成19・20）年度に調査が行われている。

これら、地下鉄東西線建設に伴う調査以外にも、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区では雨水幹線の移設工事、桜ヶ岡公園遺跡では西公園の再整備に伴い、事前調査が行われている。2014（平成26）年度には市の施設建設に伴う試掘調査が川内A遺跡の南側で行われ、新たに川内C遺跡として遺跡登録された。

仙台城三の丸地区的東側の追廻地区は、重臣を含む家臣の屋敷地や、馬場やそれに付随する施設などが置かれていた区域である。この追廻地区は、青葉山公園整備計画の対象区域となっており、公園整備事業の推進にあたって、埋蔵文化財の確認を目的として、2006～08（平成18～20）年度に、遺構確認調査が実施されている。これらの確認調査を踏まえて、2012（平成24）年から2013（平成25）年度にかけて追廻公園センター建築計画に伴う調査も行われた。

これらの調査が行われてきた結果、川内地区は、広い範囲で考古学的調査が実施してきた地区となっている。

表1 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧（1）
Tab.1 List of excavations of Sendai Castle and Samurai Residences around Sendai Castle (1)

年度	仙台市調査		東北大大学構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
	国庫補助確認調査以外	国庫補助重要遺跡遺構確認調査	二の丸地区	二の丸北方 武家屋敷地区	二の丸北方 武家屋敷地区	その他の 周辺武家屋敷
1974 昭和49			文系厚生施設緊急調査 (仙台市教委)			
1978 昭和52				ブル猫排水管緊急調査 (考古学研究室)		
1982 昭和57			第1地点試掘			
1983 昭和58 三の丸博物館新築 (76集)			第1地点（『年報』1） 第2地点（『年報』1） 第3地点（『年報』1）			
1984 昭和59			第4地点（1987年度継続）	第1地点試掘		
1985 昭和60			第5地点試掘 第6地点（『年報』3）	第4地点試掘		
1986 昭和61			第7地点（『年報』4） 第8地点（『年報』4）			
1987 昭和62			第4地点（『年報』5） 第5地点（翌年度継続）			
1988 昭和63			第5地点（『年報』6）			
1989 平成1			第5地点付帯部（『年報』7） 第9地点試掘	第5地点（『年報』7）		
1990 平成2			第9地点（『年報』8）			
1991 平成3			第10地点（『年報』9）			
1992 平成4			第11地点試掘 第12地点試掘 第13地点（『年報』10）			
1993 平成5			第12地点（『年報』11） 第14地点（『年報』11）			
1994 平成6			第15地点（『年報』12）	第4地点（翌年度継続）		
1995 平成7			第11地点（『年報』13）	第4地点（『年報』13）		
1996 平成8 本丸1次石垣修復 確認調査			第6地点（『年報』14）			
1997 平成9 本丸1次石垣修復 確認調査 (翌年度継続)			第16地点（『年報』15）			
1998 平成10 本丸1次石垣修復 確認調査 (翌年度継続)			第17地点試掘			
1999 平成11 本丸1次石垣修復 確認調査 (翌年度継続)						
2000 平成12 本丸1次石垣修復 確認調査 (翌年度継続)			第17地点（『年報』18）			

* 仙台市教育委員会が刊行した報告書は、『仙台市文化財調査報告書』のシリーズ番号で示した。

表2 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧 (2)
 Tab.2 List of excavations of Sendai Castle and Samurai Residences around Sendai Castle (2)

年度	仙台市調査		東北大大学構内		仙台市調査(周辺武家屋敷)	
	国庫補助確認 調査以外	国庫補助重要遺跡 道標確認調査	二の丸地区	二の丸北方 武家屋敷地区	二の丸北方 武家屋敷地区	その他の 周辺武家屋敷
2001 平成13	本丸1次石垣修復 確認調査 (翌年度継続)	第1次大広間1次 第2次清水門 (259集)			第7地点(『年報』19)	
2002 平成14	本丸1次石垣修復 確認調査 (翌年度継続)	第3次大番士手 他第4次興替 第5次本丸大広間 2次(264集)			第8地点(『年報』20)	
2003 平成15	本丸1次石垣修復 確認調査 (275・282・298・349 集)	第6次全城分布 (271集) 第7次大広間3次 第8次登城路 第9次広瀬川護岸 石垣(270集)			第9地点(『年報』21)	
2004 平成16	中門・清水門復旧 整備(299集)	第10次大広間4次 第11次 広瀬川護岸 ・浜曲輪 石垣 (285集)			東西線試掘(289集)	川内A・桜ヶ岡公園東西 線試掘(289集)
2005 平成17	清水門周辺復旧整 備(299集) 登城路1次(300 集)	第12次大広間5次 第13次三の丸1次 第14次広瀬川護岸 ・中門石垣(297 集)			東西線試掘(302集)	川内A周辺・桜ヶ岡公園 東西線試掘(302集) 川内A遺跡東西線(312 集)
2006 平成18		第15次大広間6次 第16次三の丸2次 (309集)		第10地点(『年報』24) 第11地点(翌年度継続)	東西線(亀岡トン ネル・間削部・342集)	川内A周辺・川内B東西 線試掘(316集) 道標確認確認1次(350 集)
2007 平成19		第17次大広間7次 第18次三の丸3次 第19次本丸西石 垣(330集)		第11地点 (『調査報告』1) 第12地点 (『調査報告』1)	東西線(川内駅部・ 立坑部・386集)	川内B東西線試掘東西線 桜ヶ岡公園(広瀬川護 岸部・公園駅部・他・384 集) 桜ヶ岡公園2次(西公園 内整備・318集) 道標確認確認2次(350 集)
2008 平成20		第20次大広間8次 第21次造酒屋敷1 次 第22次本丸西石 垣(348集)		第13地点(本体部分・ 『調査報告』2)	東西線(扇坂ト ンネル部・402集)	東西線川内A(広瀬川護 岸・橋梁部・402集)・川内 B(扇坂トンネル部・385 集)・桜ヶ岡公園(公園 内整備・284集) 桜ヶ岡公園3次(西公園 内整備・335集) 道標確認確認3次(350 集)
2009 平成21	登城路2次(354 集)	第23次造酒屋敷2 次 第24次大広間追加 第25次広瀬川護岸 石垣(374集)		第13地点(付帯工事・ 『調査報告』2)	東西線(扇坂ト ンネル・亀岡トンネル ・間削部・402集) 第2次雨水幹線 (356集)	東西線川内A(広瀬川護 岸部・402集)
2010 平成22			第26次造酒屋敷3 次(395集)			東西線(亀岡トン ネル・間削部・401集)
2011 平成23				第14地点(翌年度継続)		
2012 平成24	大手門北側石垣土 塹・中門北側石垣 本丸北西石垣(震 災復旧)			第14地点 (調査途中で中断) 第15地点(翌年度継続)		追跡青葉山公園センター
2013 平成25	平成24年度継続 (震災復旧)		第18地点 (翌年度継続)	第15地点(翌年度継続) 第16地点 (『調査報告』5)	第15地点(翌年度継続) 步行者通路試掘(扇 坂斜面・427集)	追跡青葉山公園センター 川内C遺跡第1次(427 集)
2014 平成26	本丸北西石垣北 側・清水門石垣 (震災復旧)		第18地点(『調 査報告』6・本 報告)	第14地点(翌年度継續) 第15地点		
2015 平成27				第14地点		

* 仙台市教育委員会が刊行した報告書は、「仙台市文化財調査報告書」のシリーズ番号で示した。

第Ⅱ章 調査の方法と経過

1. 調査地点の位置と調査に至る経緯

仙台城跡二の丸第18地点（NM18）の調査は、東北大学川内南地区における国際文化系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査である（図7）。当初、予定地には2棟の講義棟が並んで建てられていたが、講義棟の間の中庭部分などでは、江戸時代の地層などが残存している可能性が高いと考えられた。川内南地区は、二の丸地区に相当し、仙台市教育委員会が将来国史跡に指定したいとの意向を表明し、「第四種保存地区」に指定した重要な区域にあたる（仙台市教育委員会2005）。そのため、本件に関して仙台市教育委員会・宮城県教育委員会と協議した結果、整備計画の可否を含めた対処方針を検討するデータを得るために、2013年度に計画区域での遺構などの保存状態を確認する調査を実施することとなった。そして、その成果を踏まえた整備計画が策定され、2014年度にその計画に伴い更なる確認調査を行った。

2. 調査の方法と経過

(1) 発掘調査の経過

2013年3月後半に、重機による掘削作業を開始した。手掘りによる精査は、4月から実施した。調査成果の概要が判明した4月18日には、埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会を開催し、調査状況の視察を行った上で、調査成果について検討する機会を設けた。4月23日には、仙台市教育委員会文化財課、宮城県教育委員会文化財保護課の担当者に視察していただき、調査状況を確認していただいた。その後、5月17日まで埋め戻し作業を行い、現状に復旧した。

調査では、既存建物の周囲で調査が可能な5ヶ所に調査区を設けた（図8：1～5区）。調査面積は、1区38.7m²、2区26.0m²、3区21.2m²、4区13.5m²、5区18.0m²で、合計117.4m²である。これまでの二の丸地区的調査では、二の丸の建物群が焼失した明治15（1882）年の火災後の片付けに伴う整地層が、各所で発見されている。そのため、明治15年の火災に伴う土層より新しい第二師團期と考えられる土層までを除去し、保存状態を確認することを基本方針とした。ただし、二の丸期の遺構を確認する必要がある場所については、明治15年の火災に伴う土層を除去している。

2013年度調査区の5ヶ所全てにおいて、大学建物基礎・埋設管、米軍共同溝、師団基礎などで破壊されている部分以外は、江戸時代の地層は残されており、完全に破壊されている調査区はないことが判明した。大学の既存建物建設に際しては、工事範囲を広く掘削することは行われておらず、地表面から基礎杭を打ち込み、基礎を設置する範囲だけを掘削して工事を行ったものと考えられる。そのため、基礎の周囲に、広くても1m程度の余掘りがなされた範囲だけが破壊されていた。それ以外の区域は、建物に覆われる範囲であっても、江戸時代の地層が残されている部分が多いことが判明した。この調査結果を受けて、施設整備の進め方について、東北大学と仙台市教育委員会・宮城県教育委員会との協議が行われることとなった。

当初東北大学施設部では、確認調査の結果を踏まえた協議で方針を策定した後に、概算要求での予算化を目指すというスケジュールを想定していた。しかし、平成24（2012）年度補正予算における震災復興事業として事業化が突如決定されたため、対応に苦慮することとなった。施設部において、地下の遺構に影響を与えない工法での建築方法を公募したところ、竹中工務店による工法が候補となつた。これは、既存基礎のみを撤去した上で、既存杭の試験を行い、利用できる杭は既存のものを利用する工法であった。荷重などで杭を更新する必要がある場合は、既存杭を抜き取り同じ場所に新たな鋼管杭を打つというものである。これらの杭の上に、既存基礎の掘り方の大きさにおさまる規模の基礎を新たに設置し、鉄骨構造の建物を建設するという提案であった。既存の基礎掘り方以外は、新たな掘削が発生せず、遺跡を新たに損壊することは避けられる工法の提案であった。

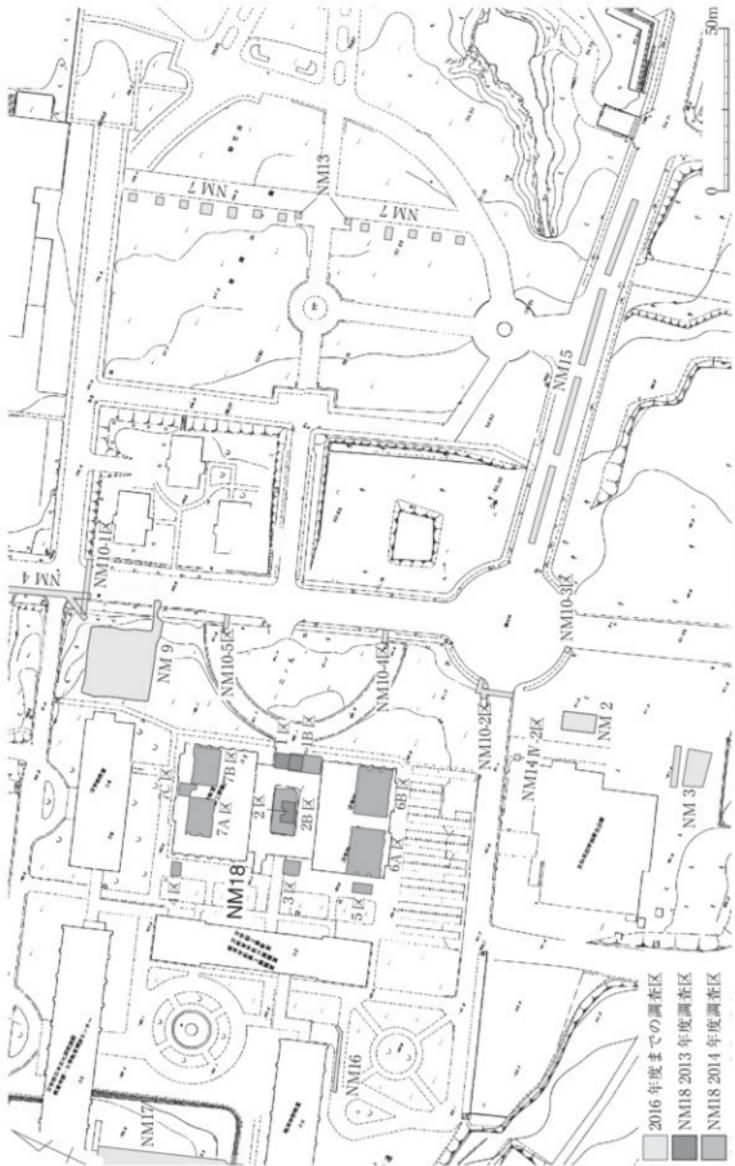


Fig.7 Location of NM18 (NM18 ie. Location 18 of Secondary Citadel of Sendai Castle)

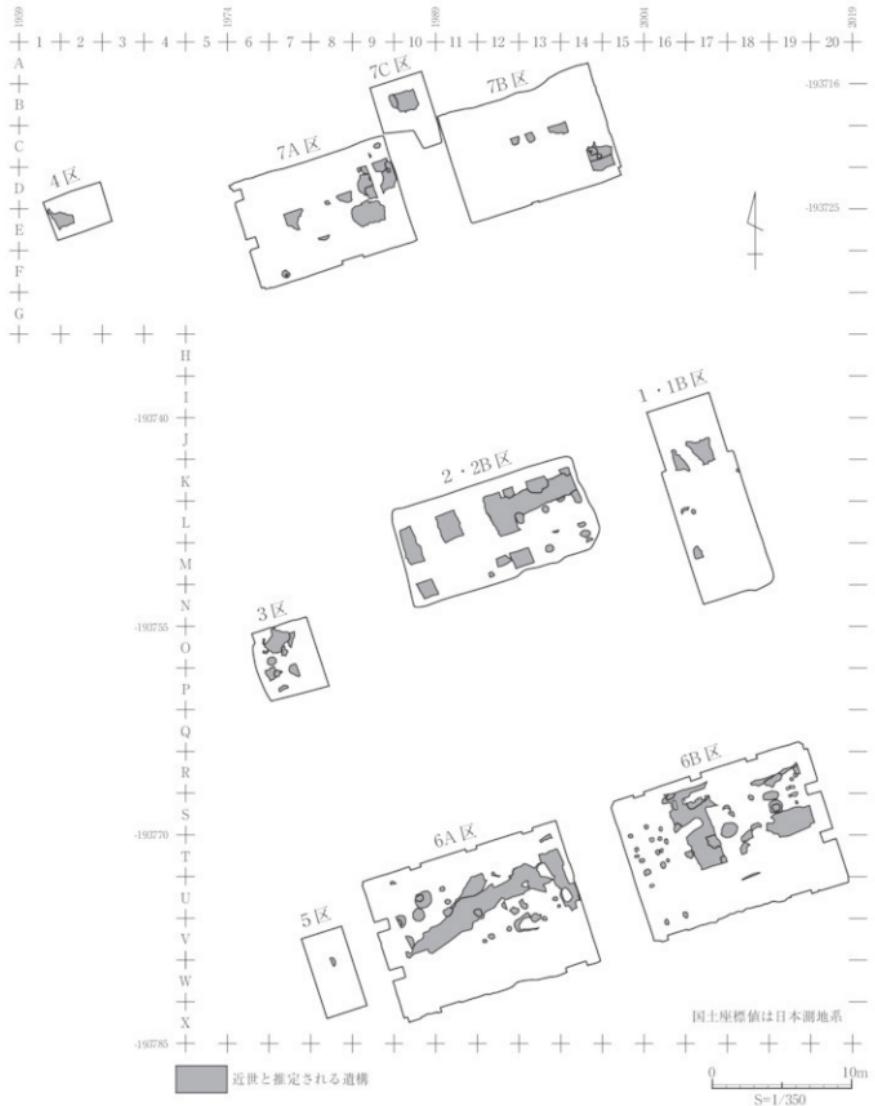


図8 二の丸第18地点調査区模式図
Fig.8 Pattern diagram of location at NM18

震災復興事業に関しては、宮城県教育委員会では発掘調査基準を弾力化して運用している。そのため、恒久的な建造物であっても地下の遺構に影響が無い範囲については、記録保存のための調査は実施せず、確認調査で済ませることが可能となっていた。今回の事業については、震災で被害を受けた建物をほぼ同じ規模で建て替える震災復興事業であり、地下の遺構に影響を与えないという前提で、建設はやむを得ないという判断となった。その上で、重要な遺跡に恒久的な建造物を建設するため、必要に応じた確認調査をさらに行うこととなった。そして、この追加の調査を行うためには既存建物を解体することが必要なため、既存建物を解体した後の2014年度に確認調査を実施することとなった。

2014年度は、必要な範囲で確認調査を実施し、遺構の残存状況などを確認することとなった。既存建物の床コンクリートスラブは、基礎杭を調べて基礎を作り直す部分以外は、撤去しない計画であった。そのため、建物解体後に地表面が露出する範囲は、南北の講義棟内の階段教室で、階段部分が土盛りで構築されている部分と、中庭とその東西両側程度である。これらの調査可能な範囲の中で、重要と考えられる範囲668m²について、4月から3ヶ月間の確認調査を実施することとした（図8：1B区、2B区、6A区、6B区、7A区、7B区）。調査面積は、1B区76.1m²、2B区100.5m²、6A区152.2m²、6B区152.9m²、7A区92.3m²、7B区93.8m²で、合計668m²である。

当初は、上屋建物の解体が終了していた7A・7B区の調査から始め、4月23日には空撮測量を行い、この区の調査を終了させた。4月25日には、山砂を全面に敷き詰めた上で埋め戻しを完了させた。なお、ほかの調査区においても、同様に山砂で保護してから埋め戻している。調査終了後、この区域の基礎杭周辺の基礎の撤去が始まった。その際に7A区と7B区の間から、石組溝が確認された。これを7C区（30m）として急遽調査を行った。5月からは、ほかの4地点の調査を開始した。上屋建物の解体が済んでいた1B区と2B区の調査を優先させ、6月5日には空撮測量を実施し、調査を終了させた。この空撮時の6A区と6B区に関しては、搅乱を概ね除去し、主要な遺構を確認した段階であった。そして、この時点で、今回の調査地点における遺跡内容の概要の大部分が把握できることから、6月14日に現地説明会を実施した。この説明会には120名程の参加者があり、仙台城への関心の高さが窺えた。現地説明会終了後、6A区と6B区の精査を引き続き実施し、6月20日に空撮測量を実施して、全ての調査区の調査を終了した。

（2）記録方法

調査にあたっては、各調査地点が離れているため、当初からは統一的なグリッドは作成していない。当室で学内に設置していた測量基準点を使用し、日本測地系にて各調査区を測量している。また、2013年度調査では全て手作業で各種図面を作成していたが、2014年度調査では株式会社CUBIC製遺構実測支援システム「遺構くん」を導入し、土層断面図作成、簡略的な平面図作成に利用した。また、2014年度調査では、国際文化財株式会社に委託して、合計2回の空中写真測量と、空撮写真による写真測量を行った。

記録写真は、35mmフィルムによるカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、デジタル写真も同じカットで撮影した。空中写真撮影では、6×6のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影し、デジタル写真も同じカットで撮影している。

（3）遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状のみしかわからない遺構も存在する。さらに、今回の調査は確認調査であるため、掘り上げて精査した遺構はないことから、遺構の性格などを把握することは難しい。調査現場では区ごとに主に形状から「遺構」、「土坑」、「ピット」という名称を使用して調査を進めた。また、礎石と考えられる石に関しては、「石」と名称を付けた。今回調査現場や整理作業において使用した遺構名称は、表3・4に示した通りである。調査現

場では遺構とは認識しているが、精査・遺物取り上げが必要ないため名称を付けずにそのまま調査を進めたため、調査現場では正式な名称が無い遺構もあった。そのため、表3・4では、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示した。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。また、遺構の属性は表5～9にまとめた。

比較的大型の掘り方を有するものを「遺構」とした。「土坑」は、不整形であるものも含め、遺構よりは小型のもので様々な規模がある掘り方を有するものである。また、柱穴と想定できるような土坑を「ピット」と呼称した。今回の調査では、やや規模の大きな土坑に川原石を詰め込み根固石とするような事例が認められた。このような土坑は、柱穴の一つとして捉えられることからピットとして扱った。また、礎石と考えられるような大きめで形状の整った石に関しては、「石」とした。この場合、掘方を伴うものもある。通常のピットと礎石が失われた掘方の区別はしていない。

ピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として各区で通し番号を現地で付けた。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、ピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付けた。ただし、今回の調査では現場名称が無い遺構もあったため、ひとまず室内で遺構を整理した段階で名称をつけて、その上で柱番号を付けた（表3・4）。

（4）遺物の取り上げについて

当調査室の調査では、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、基本的には二の丸期の層は掘り上げていないため、本調査で採集した遺物は、篠田期以降の層からの出土遺物が主体となる。層序については次章でまとめるが、基本的には1層と1層下部のほか、二の丸期検出面からの出土遺物である。また、瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けている。刻印や線刻の有無などについては、土壤が付着したままでは判別が難しいので、現地で土壤をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

（5）整理作業

当調査室での整理作業と報告書刊行については、経費は全学的基盤経費として、毎年度ほぼ一定額が措置されている。調査の事業量は年度により多寡があるため、大きな滞りをきたすことなく調査報告書を作成できるよう、各年度に実施する整理作業を平均化して計画的に実施することとしている。二の丸第18地点の出土遺物は、整理作業前の段階で28箱と、それほど遺物出土量が多いわけではなかった。他の調査の整理作業が残っていたことから、整理作業は2015年度から開始することとなった。併行して、他の調査の整理作業も進めたため、2015年度から2016年度の2ヶ年を整理作業期間とし、2016年度に報告書を刊行することとした。

2015年度は、遺構図面の整理・トレース、遺構写真の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・分類、出土遺物の集計などの作業を実施した。接合作業については、1区とIB区については、2013年度調査区を拡張して設定しており、区を越えての接合作業を試みた。2区と2B区についても同様である。これら以外の区は、それぞれ区が独立しており、区を越えて接合することは稀であると考えて、各区内での接合を行った。2016年度は、実測図

作成、トレース、陶磁器の文様のデジタル写真からの図化、写真撮影、遺物観察表の作成、図版レイアウト、原稿作成、編集などの作業を行った。

遺物実測図の作成では、外形や断面などの原図は、手書きによる実測図作成を行った。原図のトレースは、Adobe製Illustratorを用いて行った。磁器と陶器の文様部分については、株式会社CUBIC製の遺物実測支援システム「遺物くん」を用いて、デジタル画像を作成した。その後、Adobe製Photoshopを用いて画像処理を行い、文様部分を作成した。遺物写真的撮影は、当調査室で撮影した。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。そのため本報告書でも、遺物の種類ごとに事実記載を行うとした。遺物の種類ごとの分類基準などについては、出土遺物の報告の各項目の中で、必要に応じて記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようになっている。

磁器：C J 陶器：C T 土師質土器：C H 瓦質土器：C G 土製品：C O 瓦：T（古代の瓦を含む）
古銭：M C 木製品：W 石製品：S

今回の調査では、木製品・金属製品など、保存処理が必要な遺物も少数ではあるが出土している。当調査室では、木製品と金属製品について保存処理を実施しており、二の丸第18地点から出土した遺物についても、独自に保存処理を行っている。

表3 二の丸第18地点遺構名称対照表(1)
Tab.3 List of the features name which are collated at NM18 (1)

区名	現場名称	整理名称	確定名称	区名	現場名称	整理名称	確定名称	区名	現場名称	整理名称	確定名称
	溝状遺構	1号溝	1号溝		抜取跡6	抜取跡6	抜取跡6	1号土坑	1号土坑	1号土坑	1号土坑
	溝	2号溝	2号溝		抜取跡7	抜取跡7	抜取跡7	2号土坑	2号土坑	2号土坑	2号土坑
	敷石	敷石遺構	敷石遺構		抜取跡8	抜取跡8	抜取跡8	3号土坑	3号土坑	3号土坑	3号土坑
	埴堀	埴堀	埴堀		抜取跡9	抜取跡9	抜取跡9	敷石	敷石	敷石	敷石
	-	石1	柱例2柱1		抜取跡10	抜取跡10	抜取跡10	ピット1	ピット1	ピット1	ピット1
	-	石2	石2		抜取跡11	抜取跡11	抜取跡11	道構あ	ピット2	ピット2	ピット2
	-	石3	石3		抜取跡12	抜取跡12	抜取跡12	ピット3	ピット3	ピット3	柱例柱3
	-	石4	柱例2柱2		抜取跡13	抜取跡13	抜取跡13	ピット4	ピット4	ピット4	ピット4
	-	石5	建物柱6		抜取跡14	抜取跡14	抜取跡14	ピット5	ピット5	建物柱2	建物柱2
Pit1		ピット1	ピット1		抜取跡15	抜取跡15	抜取跡15	ピット6	ピット6	建物柱1	建物柱1
北側南壁Pit埋土9・10		ピット2	ピット2		抜取跡16	抜取跡16	抜取跡16	43	ピット7	ピット7	ピット7
北側南壁Pit埋土11 (下部柱2)		ピット3	ピット3		抜取跡17	抜取跡17	抜取跡17	石列掘方	ピット8	ピット8	ピット8
I-1 B区	F柱1		ピット4	ピット4	抜取跡18	抜取跡18	柱例1柱1	道構埋土B	ピット9	ピット9	ピット9
I-1 B区	南側北壁Pit埋土8 (下部柱3)		ピット5	ピット5	抜取跡19	抜取跡19	柱例1柱3	41	41	41	41
B区	北側柱4		ピット6	ピット6	抜取跡20	抜取跡20	柱例1柱2	62	62	柱例1柱1	柱例1柱1
	南側北壁Pit1、抜 取跡28		ピット7	ピット7	抜取跡21	抜取跡21	抜取跡21	64	63	柱例柱2	柱例柱2
Pit8		ピット8	ピット8		抜取跡22	抜取跡22	抜取跡22	道構お	1号道構	1号道構	1号道構
南側北壁Pit2		ピット9	ピット9		抜取跡23	抜取跡23	抜取跡23	道構い	2号道構	2号道構	2号道構
北側南壁Pit埋土 4・5・6・7		ピット10	ピット10		抜取跡24	抜取跡24	抜取跡24	道構う	3号道構	3号道構	3号道構
北側南壁Pit埋土 1・2・3		ピット11	ピット11		抜取跡25	抜取跡25	建物1柱5	道構え	4号道構	4号道構	4号道構
北側北壁Pit埋土 9・10		ピット12	ピット12		抜取跡26	抜取跡26	建物1柱1	道構5	5号道構	5号道構	5号道構
抜取跡1		抜取跡1	抜取跡1		抜取跡27	抜取跡27	建物1柱2	-	6号道構	6号道構	6号道構
抜取跡2		抜取跡2	抜取跡2		抜取跡28	抜取跡28	ピット7	道構埋土b・c	7号道構	7号道構	7号道構
抜取跡3		抜取跡3	抜取跡3		抜取跡29	抜取跡29	抜取跡29	道構埋土G	8号道構	8号道構	8号道構
抜取跡4		抜取跡4	抜取跡4		抜取跡30	抜取跡30	建物1柱3	2号溝下の道構	9号道構	9号道構	9号道構
抜取跡5		抜取跡5	抜取跡5		埴堀	埴堀	埴堀	道構埋土D・E・F	10号道構	10号道構	10号道構
2-2 B区	1号溝		1号溝	1号溝	2号溝		2号溝	2号溝	3号溝	3号溝	3号溝
2-2 B区	3号溝		3号溝	3号溝							
2-2 B区	道構埋土a		道構埋土a	道構埋土a							

表4 二の丸第18地点遺構名称対照表（2）
Tab.4 List of the features name which are collated at NM18 (2)

区名	現場名称	整理名称	確定名称	区名	現場名称	整理名称	確定名称	区名	現場名称	整理名称	確定名称
3区	ピット	ピット1	ピット1	7A区	—	6号遺構	6号遺構	7B区	—	ピット3	ピット3
	ピット	ピット2	ピット2		7号遺構	7号遺構	7号遺構		—	ピット4	ピット4
	ピット	ピット3	ピット3		8号遺構	8号遺構	8号遺構		—	ピット5	柱列1柱2
	ピット	ピット4	ピット4		ピット14・15	9号遺構	9号遺構		—	ピット6	ピット6
	ピット	ピット5	ピット5		—	10号遺構	10号遺構		—	ピット7	柱列1柱1
	1号遺構	1号遺構	1号遺構		石2	61	建物1柱5		—	ピット8	ピット8
	遺構	遺構	遺構		石4	62	建物1柱3		—	ピット9	ピット9
	1号土坑	1号土坑	1号土坑		—	63	建物1柱2		—	ピット10	ピット10
	土坑	土坑	土坑		石13	64	64		1号遺構（遺構埋土）	1号遺構	1号遺構
	遺構	遺構	遺構		石10	65	建物1柱8		遺構埋土う	2号遺構	2号遺構
4区	ピット	ピット1	ピット1		石12	66	66		遺構埋土あ	3号遺構	3号遺構
	ピット	ピット2	ピット2		石7	67	建物1柱11		—	4号遺構	4号遺構
	遺構	遺構	遺構		石8	68	建物1柱10		—	5号遺構	5号遺構
	石畠溝	石畠溝	石畠溝		石9	69	建物1柱9		—	61	柱列1柱3
	1号溝	1号溝	1号溝		御团健石	610	建物2柱5		—	62	柱列1柱4
5区	2号溝	2号溝	2号溝		御团健石	611	建物2柱4		遺構埋土1	1号遺構	1号遺構
	3号溝	3号溝	3号溝		御团健石	612	建物2柱3		遺構埋土2	2号遺構	2号遺構
	木桶	木桶	木桶		御团健石	613	建物2柱2		落ち込み	3号遺構	3号遺構
	—	石1	石1		御团健石	614	建物2柱1		溝	溝	溝
	1号遺構	1号遺構	1号遺構		埋乱2	615	建物2柱5		—	ピット1	ピット1
6A区	2号遺構	2号遺構	2号遺構		ピット1	616	616		—	ピット2	ピット2
	ピット1	ピット1	ピット1		ピット2	617	建物1柱11		石畠溝	石畠溝	石畠溝
	ピット2	ピット2	ピット2		ピット3	618	建物1柱10		—	—	—
	ピット3	ピット3	ピット3		ピット4	619	建物1柱9		—	—	—
	ピット4	ピット4	ピット4		ピット5	620	柱列2柱5		—	—	—
	ピット5	ピット5	ピット5		ピット6	621	柱列2柱4		—	—	—
	ピット6	ピット6	ピット6		ピット7	622	柱列2柱7		—	—	—
	ピット7	ピット7	ピット7		ピット8	623	柱列2柱3		—	—	—
	ピット8	ピット8	ピット8		ピット9	624	柱列2柱9		—	—	—
	ピット9	ピット9	ピット9		ピット10	625	柱列2柱10		—	—	—
6B区	ピット10	ピット10	ピット10		ピット11	626	柱列1柱4		—	—	—
	ピット11	ピット11	柱列1柱4		ピット12	627	柱列1柱3		—	—	—
	ピット12	ピット12	柱列1柱3		ピット13	628	柱列1柱3		—	—	—
	ピット13	ピット13	柱列1柱2		根固7	629	柱列1柱2		—	—	—
	ピット14	ピット14	ピット14		根固8	630	柱列1柱1		—	—	—
	ピット15	ピット15	柱列1柱1		根固8	631	柱列1柱1		—	—	—
	ピット16	ピット16	ピット16		根固9	632	柱列1柱1		—	—	—
	ピット17	ピット17	ピット17		根固1	633	柱列1柱1		—	—	—
	ピット18	ピット18	ピット18		根固2	634	柱列1柱1		—	—	—
	ピット19	ピット19	ピット19		根固3	635	柱列1柱1		—	—	—
6C区	ピット20	ピット20	ピット20		根固4	636	柱列1柱1		—	—	—
	ピット21	ピット21	ピット21		根固5	637	柱列1柱1		—	—	—
	ピット22	ピット22	ピット22		根固6	638	柱列1柱1		—	—	—
	ピット23	ピット23	ピット23		1号遺構	639	柱列1柱2		—	—	—
	ピット24	ピット24	ピット24		石3	640	建物1柱4		—	—	—
	—	ピット25	ピット25		石4	641	ピット26	建物1柱6	—	—	—
	—	ピット26	ピット26		石5	642	ピット27	柱列2柱1	—	—	—
	—	ピット27	ピット27		石6	643	ピット28	建物1柱1	—	—	—
	1号溝	1号溝	1号溝		石11	644	ピット29	建物1柱7	—	—	—
	石畠溝掘方	1号遺構	1号遺構		埋乱9	645	ピット30	ピット30	—	—	—
6D区	2号遺構	2号遺構	2号遺構		埋乱7	646	ピット31	ピット31	—	—	—
	3号遺構	3号遺構	3号遺構		埋乱6	647	ピット32	ピット32	—	—	—
	4号遺構	4号遺構	4号遺構		遺構埋土い	648	ピット1	ピット1	—	—	—
	5号遺構	5号遺構	5号遺構		—	649	ピット2	ピット2	—	—	—
	—	—	—		—	650	—	—	—	—	—

表5 二の丸第18地点遺構属性表(1)
Tab.5 Attributes of structural remains at NM18 (1)

区	名称	グリッド	形状	規模		掘込面	重複する遺構の新古関係		
				面積 (m ²)	長軸×短軸 (m)		古い	新しい	不明
1 1 B 区	ピット1	L16・17	楕円形	0.25	0.32×0.50	2層			
	ピット2	K18	楕円形	(0.03)	0.24×(0.16)	2層			
	ピット3	K18	—	—	—	6層			
	ピット4	K18	—	—	—	6層			
	ピット5	L18	—	—	—	—			
	ピット6	M17	不整楕円形	0.47	(0.77)×(0.74)	—			
	ピット7	M18	楕円形	(0.03)	0.26×(0.15)	2層			
	ピット8	L17	楕円形	0.08	0.34×0.28	—			
	ピット9	L18	—	—	—	3層			
	ピット10	K18	—	—	—	5層			
	ピット11	K16	—	—	—	5層			
	ピット12	K16	—	—	—	2号溝	2号溝		
石 4 区	石1 (柱列2柱1)	L16・17	長楕円形	0.16	0.54×0.34	ピット1			
	石2	L17	楕円形か	(0.18)	(0.51)×(0.43)	2層			
	石3	L18	不整形	(0.22)	0.53×0.47	2層			
	石4 (柱列2柱2)	L18	楕円形	0.23	0.51×0.58	2層			
	石5 (建物1柱6)	M18	長楕円形	0.08	0.37×0.26	2層			
	ピット1	M12	楕円形	(0.11)	(0.34)×(0.34)	2・3層			
	ピット2	L13	楕円形か	(0.05)	0.49×(0.15)	1側下部			
	ピット3 (建物1柱3)	L13	楕円形	0.20	0.55×0.50	3層			
	ピット4	K13・14, M13・14	楕円形か	(0.14)	0.61×(0.26)	3層			
	ピット5 (建物1柱2)	L12・13	楕円形	0.38	0.82×0.62	3層			
	ピット6 (建物1柱1)	K12	楕円形	(0.44)	0.66×0.74	3層			
2 2 B 区	ピット7	L14	楕円形か	(0.09)	(0.44)×(0.25)	3層			
	ピット8	M13	—	—	—	3層			
	ピット9	M11	—	—	—	7層	6・8号道構		
	石1	L14	楕円形	(0.16)	0.51×(0.35)	2・3層	1号溝		
	石2 (柱列1柱1)	L14	楕円形	(0.26)	0.72×0.53	3層	1号溝		
	石3 (柱列1柱2)	M13	楕円形	0.26	0.59×0.52	3層	1号溝		
	1号土坑	K14, L14	楕円形	(0.47)	0.96×0.50	3層	暗渠		
	2号土坑	K13・14	楕円形か	(0.31)	(0.80)×(0.50)	3層	暗渠		
	3号土坑	K13	楕円形	(1.18)	1.52×(0.8)	3層	暗渠		
	1号道構	L14	—	—	—	3層	2号道構		
	2号道構	L14	—	—	—	7層	3号道構	1号道構、石1	
	3号道構	L13・14	—	—	—	10層	2号道構	4号道構	3号道構
3 区	4号道構	L14	—	—	—	—			
	5号道構	N11・12	—	—	—	地山	1号溝、10号道構		
	6号道構	M11	—	—	—	7層	ピット9		
	7号道構	M11	—	—	—	9層	10号道構	3号溝	
	8号道構	M11	—	—	—	9層	10号道構	ピット9	
	9号道構	N10	—	—	—	10層	2号溝		
	10号道構	M11	—	—	—	10層	5号道構	7・8号道構	
	ピット1	P7	—	(0.18)	0.72×(0.30)	2・3層			
	ピット2	P7	楕円形	0.18	0.48×0.47	2・3層	2号土坑		
	ピット3	O6・7	楕円形	0.32	0.07×0.59	2・3層			
	ピット4	O6・7	不整形	0.06	0.34×0.14	2・3層			
4 区	ピット5	O7	不整形	(0.22)	0.73×(0.41)	2・3層	2号道構		
	1号土坑	O・P7	—	(0.45)	0.93×(0.64)	2・3層			
	2号土坑	O7・P6・7	不整形?	(0.50)	(0.79)×0.77	2・3層	ピット2		
	1号道構	O7	—	(0.32)	(1.02)×(0.29)	—	2号道構		
	2号道構	O6・7	楕円形?	(2.17)	(1.67)×(1.09)	2・3層	ピット5、1号道構		
	道構	D1・E1・2	—	(1.73)	(1.47)×(0.95)	整地層			
5 区	ピット1	VW8	楕円形?	(0.15)	0.67×(0.27)	7層?			
	ピット2	W8	—	—	—	7層?			
	道構	V8	—	—	—	地山			
	ピット1	V10	楕円形?	(0.3)	1.05×(0.39)	整地層上部			
	ピット2	U10, V10	楕円形か	(0.43)	0.93×(0.56)	整地層上部	1号溝		
	ピット3	U10, V10	楕円形	0.64	0.98×0.82	整地層上部	ピット4		
	ピット4	U10	楕円形	(1.17)	(1.15)×1.22	整地層上部	ピット5、木舗		
	ピット5	U10	楕円形	0.21	0.59×0.46	整地層上部	ピット4		
	ピット6	U11	楕円形	0.11	0.43×0.33	整地層上部			
	ピット7	U11	楕円形	0.12	0.46×0.36	整地層上部			
	ピット8	U11	楕円形	0.34	0.68×0.61	整地層上部	1号溝	石組溝	
	ピット9	U11・12	楕円形	0.24	0.62×0.48	石組溝	石組溝		
6 A 区	ピット10	V12	楕円形	0.14	0.47×0.39	整地層上部			
	ピット11	V12	楕円形	0.06	0.31×0.24	整地層上部			
	ピット12	V12	楕円形	0.10	0.36×0.34	—			
	ピット13	U13, V13	不整楕円形	0.35	0.78×0.60	整地層上部	2号道構		
	ピット14	U13, V13	楕円形	0.09	0.36×0.29	整地層上部			

* 規模の()は残存長を示す。面積は確認できた面積のみ。

*「石」にピットを伴わない場合、「掘込面」は「石」が設置された面を示す。

表6 二の丸第18地点遺構属性表 (2)
Tab.6 Attributes of structural remains at NM18 (2)

区	名称	グリッド	形状	規模		掘込面	重複する遺構の新古関係		
				面積 (m ²)	長軸×短軸 (m)		古い	新しい	不明
6 A 区	ピット15	U13	楕円形	0.04	0.22×0.21	-			
	ピット16	U13	楕円形	0.09	0.36×0.28	整地層上部			
	ピット17	U13	長楕円形か	(0.24)	0.73×0.41	整地層下部			
	ピット18	U12	長楕円形か	(0.24)	0.55×0.48	整地層下部			
	ピット19	U12	-	(0.13)	(0.29) × (0.26)	整地層下部			
	ピット20	T12, U12	不整形	(0.09)	0.64× (0.08)	整地層下部			
	ピット21	W11	-	-	-	3層 (整地層上部)			
	ピット22	W12	-	-	-	地山			
	ピット23	V13	-	-	-	8層 (整地層下部)			
	ピット24	V13	-	-	-	8層 (整地層下部)			
	ピット25	U9・10	長楕円形か	(0.06)	(0.25) × (0.20)	整地層上部		木柵	
	ピット26	V10	楕円形	0.24	0.55×0.46	石組溝	石組溝		
	ピット27	T12	不整形方彌	(0.09)	(0.40) × (0.20)	整地層上部		木柵	
	石1	V14	楕円形	0.16	0.44×0.44	整地層上部			
	1号遺構	W11・12	-	-	-	3層 (整地層上部)			
	2号遺構	U12・13, V12・13	不整形	(0.68)	-	整地層下部		ピット13	
	ピット1	S18, T18	小整長楕円	0.45	1.07×0.58	整地層	ピット2		
	ピット2	S18	楕円形	(0.22)	0.72× (0.28)	整地層	ピット1		
	ピット3	S19	楕円形	0.03	0.25×0.16	整地層			
	ピット4	R19	楕円形	0.05	0.27×0.24	整地層			
	ピット5 (柱列2柱5)	R19	楕円形	0.08	0.33×0.28	整地層	ピット33		
	ピット6 (柱列2柱4)	S18	楕円形	0.12	0.41×0.33	整地層			
	ピット7	S18	不整形	(0.10)	(0.47) × 0.30	整地層			
	ピット8 (柱列2柱3)	S17・18	不整形	(0.11)	0.55× (0.18)	整地層			
	ピット9	T16	楕円形	0.04	0.26×0.21	整地層			
	ピット10	T16	楕円形	0.06	0.30×0.20	整地層			
	ピット11 (柱列2柱2)	T16	楕円形	0.06	0.29×0.28	整地層			
	ピット12	T15	長楕円形	(0.05)	(0.34) × 0.20	整地層			
	ピット13	R16, S16	不整形	(0.20)	(0.63) × 0.39	1号溝	1号溝, 建物1	木柵	
	ピット14	V17・18	-	-	-	1号溝 (整地層下部)	8号遺構、1号溝		
	ピット15	T・V18			1.45× (0.24)	ピット16 (整地層上部)	ピット16, 8号遺構		
	ピット16	T18	-	-	-	40層 (整地層上部)		ピット15	
	ピット17	T19・20	-	-	-	34層 (整地層下部)	8号遺構		9号遺構
6 B 区	ピット18 (柱列1柱1)	S17・18, T17・18	楕円形	1.04	1.28×1.07	整地層			
	ピット19 (建物1柱1)	T17	不整形	0.24	0.54×0.54	整地層	1号溝		
	ピット20 (建物1柱3)	S16	楕円形か	(0.24)	(0.54) × (0.57)	整地層	1号溝		
	ピット21 (柱列2柱2)	S16	-	(0.1)	0.45× (0.28)	整地層	1号溝		ピット13, 木柵
	ピット22	T17	楕円形か	(0.14)	(0.38) × 0.41	1号溝	1号溝		
	ピット23	T18	不整形	(0.35)	0.79× (0.46)	整地層			
	ピット24 (柱列1柱2)	S18・19	楕円形	(0.73)	(0.89) × (0.93)	整地層			4号遺構
	ピット25 (建物1柱4)	T16	楕円形	(0.17)	0.53× (0.28)	整地層			
	ピット26 (建物1柱6)	V16	楕円形	0.10	0.41×0.28	整地層			
	ピット27 (柱列2柱1)	T15	楕円形	(0.06)	0.27× (0.25)	整地層			行3
	ピット28 (建物1柱1)	T15	楕円形	(0.07)	(0.28) × (0.28)	整地層			
	ピット29 (建物1柱7)	S16	楕円形	0.08	0.33×0.29	整地層			
	ピット30	T20	-	-	-	1層			
	ピット31	T19	-	-	-	1層			
	ピット32	T19	-	-	-	1層			
	ピット33	R19	長楕円形	(0.21)	(0.54) × 0.33	整地層			
	杭	T19	-	-	-	1層			
	石1 (建物1柱5)	U16	楕円形	0.07	0.35×0.24	整地層			
	石2 (建物1柱3)	T15・16	楕円形	0.09	0.38×0.28	整地層			
	石3 (建物1柱2)	T15	不整形	0.06	0.28×0.24	整地層	ピット27		
	石4	S16	楕円形	0.08	0.36×0.27	整地層			
	石5 (建物1柱8)	T16	楕円形	0.10	0.36×0.34	整地層			
	石6	T16	楕円形	0.09	0.43× (0.27)	整地層			
	石7 (建物1柱11)	U16・17	楕円形	0.13	0.45×0.35	整地層			
	石8 (建物1柱10)	T16	楕円形	0.16	0.50×0.37	整地層			
	石9 (建物1柱9)	T16	楕円形	0.09	0.37×0.28	整地層			
	石10 (建物2柱5)	S19	楕円形	2.85	2.04× (1.60)	整地層	4号遺構		
	石11 (建物2柱4)	S・T18	楕円形	0.60	0.91×0.87	整地層	ピット1・2		
	石12 (建物2柱3)	T18	楕円形	0.72	0.99×0.92	整地層			
	石13 (建物2柱2)	T17	楕円形	0.83	1.05×0.92	整地層	1号溝、5号遺構		

* 規模の()は外存長を示す。面積は確認できた面積のみ。

* 「石」にピットを伴わない場合、「掘込面」には「石」が設置された面を示す。

表7 二の丸第18地点遺構属性表 (3)
Tab.7 Attributes of structural remains at NM18 (3)

区	名称	グリッド	形状	規模		掘込面	重複する遺構の新古関係		
				面積 (m ²)	長軸×短軸 (m)		古い	新しい	不明
6B区	石14(建物2柱1)	T16・17	楕円形	0.75	(1.02) × 0.91	整地層			
	土塁(建物2柱5)	U17	—	—	—	1層			
	1号遺構	R18・19	不整形	(0.78)	(3.60) × 0.51	整地層			3号遺構、石組溝
	2号遺構	R18・19, S18・19	長楕円形	0.60	0.62 × 1.16	整地層			
	3号遺構	R18・19	不整長楕円形	(0.63)	1.37 × 0.49	整地層	1号遺構		
	4号遺構	S19・20, T19	不整形	(2.65)	(1.73) × (1.47)	整地層		建物2 柱列1	
	5号遺構	T17	長楕円形	0.68	1.23 × 0.75	整地層	1号溝	建物2 柱列1	
	6号遺構	S17	不整形	(0.63)	1.70 × 0.45	整地層		1号溝、木舗、木製樹	7号遺構
	7号遺構	S17	不整形	(0.40)	(0.51) × (0.50)	整地層		1号溝、木舗、木製樹	6号遺構
	8号遺構	T18・19・20	—	—	—	地山		ピット14～17、9号遺構	
7A区	9号遺構	T19	—	—	—	41層(整地層F部)	8号遺構		ピット17
	10号遺構	R17	—	(0.45)	(1.27) × (0.33)	整地層			1号溝、木舗、木製樹
	木製樹	R17・18, S17・18	隅丸方形	(2.93)	(1.76) × 1.67	—	6・7・10号遺構		
	ピット1	D9	楕円形か	(0.02)	(0.16) × (0.12)	ピット9			
	ピット2	C9	楕円形	0.14	0.51 × 0.35	4層(東西)	ピット9		
	ピット3	D9	楕円形	0.05	0.29 × 0.23	2号遺構			
	ピット4	D9	不整形	(0.06)	(0.29) × (0.25)	4層(東西)			
	ピット5(柱列1柱2)	D8	楕円形か	(0.06)	(1.01) × (0.75)	4層(東西)			
	ピット6	D8	—	(0.08)	(0.31) × (0.29)	4層(東西)			
	ピット7(柱列1柱1)	E7	不整形	(1.16)	(0.97) × (1.28)	整地層(東西)			
7B区	ピット8	F7	長楕円形	(0.25)	(0.56) × 0.51	整地層(東西)			
	ピット9(柱列1柱3)	D9	楕円形か	(1.12)	1.51 × (1.13)	4層(東西)		ピット1、柱列1、2号遺構	
	ピット10	E8	楕円形か	(0.17)	0.84 × (0.27)	整地層下部			
	石1(柱列1柱5)	D9	楕円形	0.22	0.55 × 0.49	2号遺構			
	1号遺構	D9, E8・9	長楕円形	3.32	2.44 × 1.64	5層(南北)			
	2号遺構	C9, D9・10	不整形	(2.09)	— × 0.69	3層(南北)	ピット9	ピット3、3号遺構	
	3号遺構	C9, D10	長楕円形か	(0.89)	1.13 × (0.68)	4層(東西)	2号遺構		
	4号遺構	C9	—	(0.02)	—	4層(東西)			
	5号遺構	E・F8	—	—	—	11・12層(東西: 整地層下部)			
	ピット1	C14	楕円形	0.28	0.56 × 0.51	3層			
7C区	ピット2	C14	楕円形	0.1	0.33 × 0.31	3層			
	1号遺構	C12・13	楕円形か	(0.28)	(0.53) × 0.53	3層			
	2号遺構	C13	隅丸方形か	(0.37)	(0.69) × 0.56	3層			
	3号遺構	B13・14, C13・14	不整形	(3.53)	3.95 × 2.31	3層			

* 規模の()は残存長を示す。面積は確認できた面積のみ。

* 「石」にピットを伴わない場合、「掘込面」は「石」が設置された面を示す。

表8 二の丸第18地点遺構属性表 (4)
Tab.8 Attributes of structural remains at NM18 (4)

区	建物名	グリッド	該当する遺構	軸角度 (南北)	間数 (東西×南北)	間尺	重複する遺構の新古関係		
							古い	新しい	不明
1・IB区	建物1	M17・18	石5、抜取跡25・27・30・31、N-24.5°-W	2×1		6尺3寸			
	柱列1	M17	抜取跡18~20	N-24.7°-W	2	6尺3寸			
2・2B区	柱列2	K16~17、J17	石1~4	N-24.6°-W	2	6尺3寸			
	建物1	K12~13、L12~13	ピット3・5・6	N-22.7°-W	1×1	6尺3寸	断壁		
6AK区	柱列2	L14、M13	石2~3	N-23.8°-W	1	9尺			
	建物1	U10、V10	ピット1~3・26	N-23.7°-W	1×1	5尺	石組溝		
6AK区	建物2	U10~11	ピット5・6・8	N-23.8°-W	1×1	6尺3寸	石組溝		
	柱列1	U13、V12	ピット11~13・15	N-23.5°-W	3	6尺3寸	2号遺構		
6BK区	建物1	S15~16、M16、V16	石1~3・5・7~9、ピット19~21・25・26・28~29	N-23.5°-W	15×4?	6尺3寸	1号溝、柱 列2	ピット13、 木桶	
	建物2	S18~19、T17~18	石10~14、土坑	N-23.5°-W	4×1?	6尺3寸	ピット1~ 2、4~5号 遺構、1号溝		4号遺構
6BK区	柱列1	T17~19、T17~18	ピット18~24	N-23.6°-W	1	12尺			
	柱列2	T15~16、S16~ 18、R18~19	ピット5~6・8~11	N-23.5°-W	7	6尺3寸	ピット33	建物1	
7AK区	柱列1	D8~9、W7~8	石1~2、ピット5~7	N-19.8°-W	4	6尺	ピット9、 2号遺構		

*柱列等が東西方向の場合は「90°-東西方向の軸角度」の値を算出し、比較のため「南北の軸角度」として示した。

表9 二の丸第18地点遺構属性表 (5)
Tab.9 Attributes of structural remains at NM18 (5)

区名	名称	グリッド	方向	規模			掘込面	重複する遺構の新古関係		
				最大幅 (m)	長さ (m)	面積 (m ²)		古い	新しい	不明
1 1 B区	1号溝	J16~17、K16~17	N-18.6°-W	1.77	(2.83)	(3.1)	2刷?			断壁
	2号溝	K16~M17			-	-	地山			ピット11~12
2 2 B区	断壁	J16~17、K17~18、 L17~18、M18	N-39.4°-W	1.79	(9.94)	(9.75)	2刷			数石遺構、ピット 3~5
	1号溝	K12~L12~13	N-25.4°-W	1.54	(5.61)	(5.99)	2刷			5号遺構、ピット 8
3 3 B区	2号溝	L10~M10、N10~ 11	N-22.4°-W	1.13	(5.23)	(3.97)	3刷			9号遺構
	3号溝	L11	N-22.5°-W	1.57	(1.95)	(2.90)	7刷			7号遺構・10号遺 構
6 A 区	断壁	K12~L13~14、 L12~13	N-23.0°-W	1.63	(5.23)	(7.98)	3刷			建物1
	1号溝	T11~12、U11~12	N-61.8°-W	1.18	(1.90)	(2.01)	整地層上部			建物2、石組溝、 木桶
6 B 区	2号溝	U13	N-16.4°-W	1.35	(0.25)	(0.29)	整地層下部?			石組溝
	3号溝	V14		-	-	-	14刷(整地層下部)			
6 A 区	石組溝 南北	T13~14、U13~12	N-25.0°-W	1.47	(5.54)	(5.19)	整地層上部	1~2号溝、建物		ピット9、建物1
	石組溝 東西	T12~13、U11~ 13、V10~11	N-25.8°-W	2.07	(10.29)	(16.24)				
6 B 区	本桶	T10~13、U9~10	N-16.7°-W	1.43	(13.54)	(12.65)	整地層上部	ピット4~25~27、 建物2、1号溝、 石組溝		
	1号溝	R16~17、S16~17、 T17	N-27.1°-W	2.54	(5.97)	(10.32)	36刷(整地層下部)	6~10号遺構		建物1~2、5号 遺構、ピット13~ 14~22
6 B 区	石組溝	R17~19	N-24.9°-W	1.35	(1.75)	(3.01)	-	1号遺構		
	木桶	S15~16	N-18.6°-W	0.81	(3.59)	(2.56)	-		ピット13~21、1 号溝、6~7~10 号遺構	
7 B 区	溝	C14~15、D14~15	N-18.9°-W	0.85	(1.60)	(1.26)	3刷			
7 C 区	溝	B9~10	N-20.2°-E	1.51	(1.40)	(2)	-			遺構

*溝等が東西方向の場合は「90°-東西方向の軸角度」の値を算出し、比較のため「南北の軸角度」として示した。

*規模の()は残存長を示す。面積は確認できた面積のみ。

第Ⅲ章 基本層序

今回の調査では、現代の表土層および第二師団期以降の近現代の整地層等をまとめて「盛土等」とした。その下から、主に炭で構成される非常に特徴的な黒色の土層を確認した。2B区では、この層から昭和13・15（1928・1930）年の硬貨が確認されている。これらの遺物は小さいため、上層から混入した可能性も否定はできない。しかし、その他の出土した遺物を含めたとしても、この層の時期はそれほど古くはならず、昭和15（1930）年以降でもそう遠くはない時期であると推定した。この層は、上下の層とは明瞭な土質の差があり、水平に堆積していることなどから整地層と考えられる。調査現場では「I 炭層」という名称を使用していたが、本報告では、この層を「1層」とする。

なお、類似した層を川内北キャンパスの仙台城跡北方武家屋敷地区第16地点（BK16）で確認している（「調査報告」5）。報告書では、その層が師団期の建物のレンガ基礎を覆うように分布していることから、戦後に形成された整地層として捉えた。そのため、今回の調査で確認された層も、戦後あるいはその直前に形成された層である可能性も考えられる。

地区によって層厚などの特徴は様々であるが、1層の下には、黄色粘土による整地層が確認され、その最も下部には炭化物が多く含む焼土層が確認されている。2・2B区と3区では、焼土層の下に焼けた上面が確認される場所もあることから、この炭化物を含む焼土層の大部分は現地性のものと判断した。また、出土している遺物は幕末から明治初頭期に主体があることから、この炭化物を含む焼土層は明治15（1882）年の火災に伴うものであり、その下面是二の丸期の最終面であるとして捉えた。調査現場では、この炭化物を含む焼土層とその後の整地層を「I 炭層下部」としていたが、本報告では「1層下部」とする。

今回の調査は、近世以前の土層の遺存状況の確認であることから、調査時には基本的に1層を除去し、その状況を確認した。そして、遺構確認のため、部分的に1層下部まで掘削した。師団期以降の時期のものであると明らかにわかる土管等による擾乱については、なるべく掘削した。その上層断面では、近世以前の整地層・遺構のはか、地区によっては地山も確認している。地山は、粘土・砂を主体とする土質であり、地区によっては小礫が多く含まれる水性堆積の土層である。

今回の調査では、各調査地点が離れていることから、それぞれに特徴的な堆積状況が認められ、各地区の土層の厳密な対比は難しい。そのため、本報告では、1層以下の層については区ごとに説明する。

図9に、各区の1層下部を除去した面（二の丸期最終面）の標高と、地山が確認された標高あるいは地山以外の確認できた標高の最低値を示した。7C区では、1層が確認されておらず、盛土等を除去した段階で遺構を検出している。これらの値からは、各区における近世以前の土層の厚さのほか、7C区以外では二の丸期最終面の標高がわかる。4・7A区は、その標高が最も高い。1B・2B・3区は差がなく、5・6A・6B区も多少の差はあるがほぼ変化しない。7B区の値は低いが、4・7A区以外については、おおむね61m近辺に当時の標高があったことがわかる。

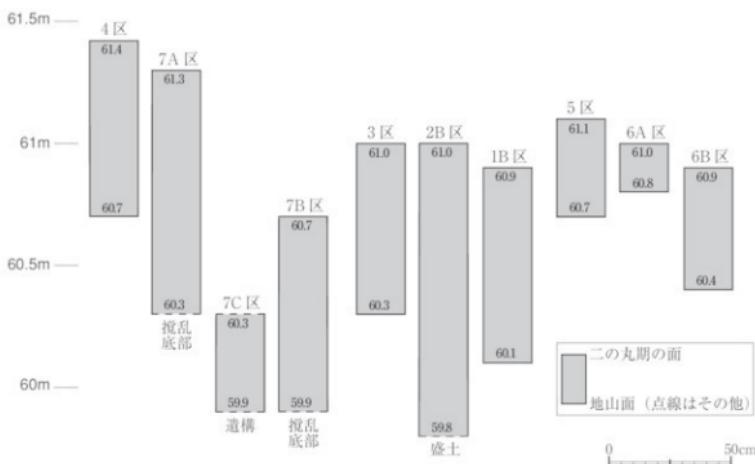
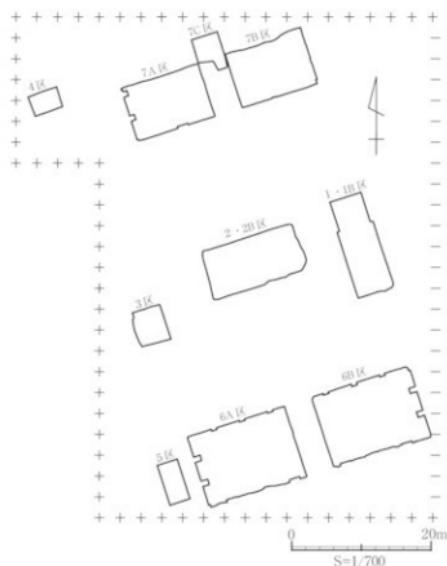


図9 二の丸第18地点における地層の対比
Fig.9 Comparison of the stratum at NM18

第Ⅳ章 検出遺構

1. 1・1B区の層序と遺構（図10～13）

（1）経過と層序

この区は、2013年度に1区として調査を行ったところ、1層下部除去後に敷石遺構等が確認された。そのため、2014年度には南側に拡張を行い、1B区としてさらに確認調査を行った。1B区においても、1区と同様に1層下部まで除去し遺構等を確認している。

調査区の北側と南側の2箇所において土管による搅乱が認められた（図10）。本調査区では、それらの搅乱部を掘り上げることにより、その土層断面で近世以前の土層を確認した（図11・12）。断面で確認した土層は、水平に堆積した層が多く、その土質は均質である。それらの特徴からすると、整地層である可能性が非常に高い。このような堆積状況を詳細に記録するため、北側と南側2箇所の搅乱部の両面の土層断面を作成した。

南側土層断面（図11）では、堆積層は8層確認した。図11の土層断面の最上層は、1層下部にあたる。2・3層が褐色・暗褐色土である。4層が最も特徴的な土層で、白褐色土の夾雜物のない均質な土層である（巻頭カラー図版2）。この層より下は、黄褐色の土層となる。とくに下部の層では、地山上に近い土質になる。

北側土層断面（図12③）からは、遺構の掘込面が複数存在することがわかる。最下層の16層は地山上に近い土質であるが、その層を掘込面として2号溝が形成される。その溝が埋まりきった後に、厚い整地層である10層が形成される。この層は、地山由来の砂礫層である。その上に6・9層として礫をやや多く含む褐色主体の土層が堆積する。この6層を掘込面として、ピット3・4が形成される。このピットは、やや大きめの川原石を根固石として充填しているものであり、その上に礫石があったものと推察される。その後にそれらのピットが埋められ、5層により整地がなされた後にピット10・11が掘られる。こちらは掘立柱である。その次に最も均質な4層により整地される。

遺物が出土していないため確実な時期は不明であるが、1・1B区の遺構の大別時期としては、北側土層断面を基準とすると、①南北に走る溝があった時期、②大きめの礫石による建物の時期、③掘立柱建物の時期、④最上面で確認できる遺構が存在していた時期の4段階が認められる。

（2）検出した遺構

掘込面が不明の遺構もあるが、検出した遺構を各段階にまとめて記載する。

①段階

【2号溝】（図11・12③・12④） 断面のみで確認している。最下層の16層を掘込面とする遺構である。各土層断面に認められ、南北に走る溝であることがわかる。また、溝底部の標高からすると、南（約60.1m）から北（約59.8）へと緩やかに流れていたものと考えられる。幅は1.3m程度で、壁は緩やかに立ち上がり、その断面形は緩やかな弧状となる。埋土は、最大で3層ある。最下層は、黒みの強い褐色粘土であり、水が流れていた様相が想定できる。

【ピット12】（図12④） 断面のみで確認している。2号溝が埋まりきった後の遺構である。柱穴にしては小さく、搅乱である可能性も考えられる。

②段階

【ピット3～6】（図10・11②・12③） 根固石が充填されたピットである。ピット3・5は、断面のみの検出で、暗渠床面の下部から検出されている。ピット6は、土管による搅乱の底面にて検出した。平面形の形態や規模は不明であるが、土層断面図から判明する残存部分の深さは、ピット3・5が40cm、ピット4が52cmとなる。また、残存状態の良いピット4からは、その規模は径1m程度であることがわかる。これらの値からすると、これらの

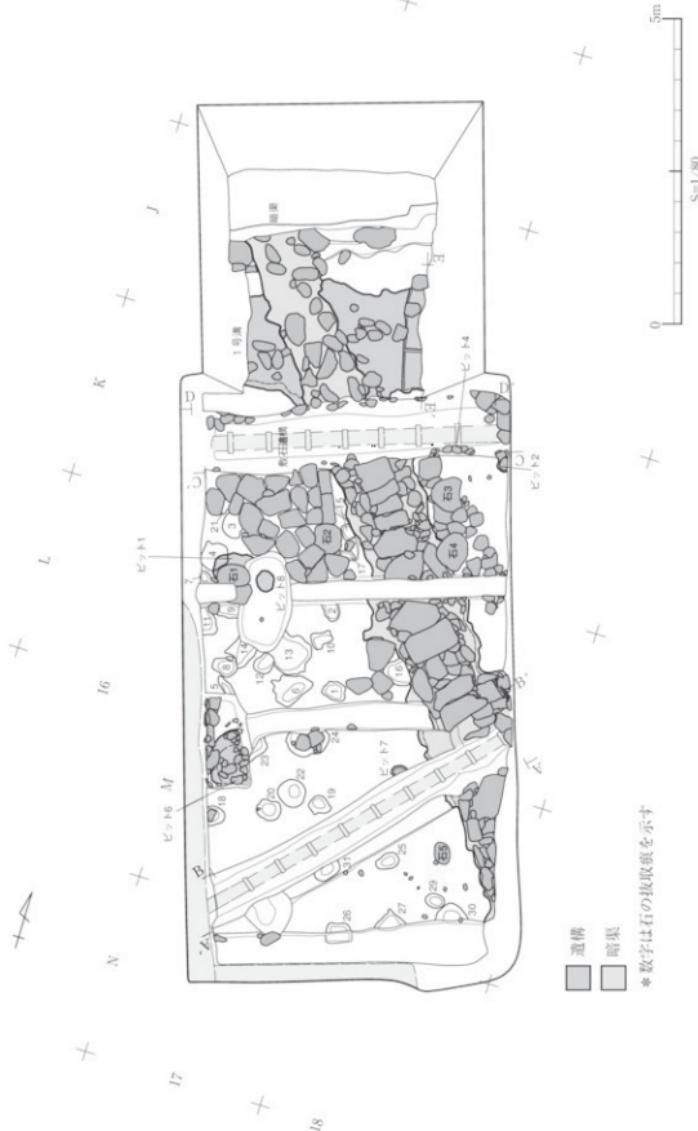
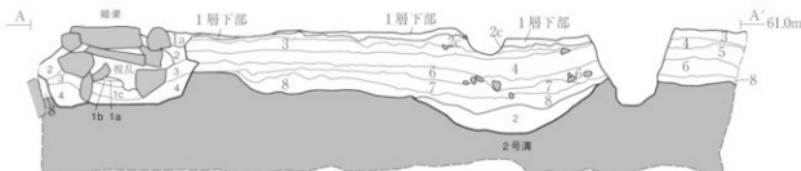


図10 二の丸第18地点1・1B区の遺構配置
Fig.10 The Distribution of features of area 1 and 1B at NM18

①1B区南側土層断面図（南壁）

18

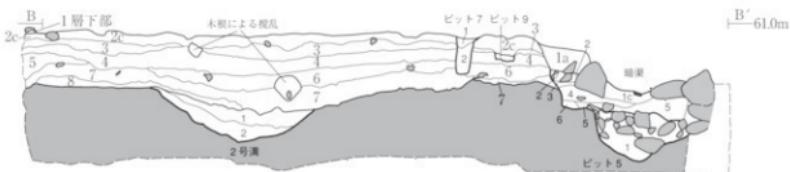
| 17



②1B区南側土層断面図（北壁）

17

| 18



基本層

- 1 層下部 10YR4/6褐色 細質シルト 岩化物と塊土に夾む
- 2a 10YR4/4褐色 細質シルト 粘性弱・しまり強 径1-10cm程度の礫を多く含む 岩化物を多量に含む
- 2a 10YR4/4褐色 細質シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を少量含む 白色・黄色土粒
- 2b 2aと同じであるが、岩化物が大きく、白色・黄色土粒の数が少ない
- 2c 10YR3/4暗褐色 細質シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を織りに含む 岩化物、白色・黄色土粒を含む
- 3 10YR3/3暗褐色 細質シルト 粘性弱・しまり強 岩化物粘土ロックを微かに含む 岩化物、白色・黄色土粒を少量含む
- 4 10YR6/2暗褐色 シルト質粘土 粘性弱・しまり強 白色・黄色土粒を少量含む
- 5 10YR4/4褐色 シルト 耐性弱・しまり中 岩化物を少額含む
- 6 10YR4/4褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1-5cm程度の礫を微かに含む 岩化物を多量に含む
- 7 10YR5/8黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 黄褐色を含む 岩化物を極端に含む
- 8 10YR5/8黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 黄褐色・白色土粒を多量に含む
- 9 10YR4/6褐色 細質シルト 粘性弱・しまり中 黄褐色を含む 岩化物を極端に含む
- 10 10YR4/4褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を少量含む 岩化物と黄色土粒を少量含む
- 11 10YR3/2黒褐色 細質シルト 粘性中・しまり中 径1cm程度の礫を微かに含む 黏分を斑状に含む
- 12 10YR4/2黒褐色 粘土 粘性弱・しまり中 岩化物を含む
- 13 10YR4/3に近い黄褐色 細質シルト 粘性弱・しまり中
- 14 10YR4/2灰黃褐色 粘土 粘性弱・しまり弱
- 15 10YR5/4に近い黄褐色 粘土 粘性中・しまり中
- 16 10YR4/1褐褐色 粘土 粘性弱・しまり強 黏分を多く含む

副層

- 1a 10YR2/2黒褐色 粘土 粘性強・しまり弱
- 1b 10YR2/2黒褐色 粘土 粘性中・しまり弱
- 1c 10YR2/2黒褐色 粘土 粘性中・しまり中
- 2 10YR4/2灰黃褐色 細質シルト 径1-10cm程度の礫を多量に含む
- 3 10YR4/3に近い黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 白色・黄色土粒を少量含む
- 4 10YR4/2暗褐色 細質シルト 粘性中・しまり中 径5-10cm程度の礫を少量含む
- 5 10YR6/8黄褐色 細質シルト 粘性中・しまり中 岩化物を多量に含む
- 6 10YR6/6明黃褐色 シルト 粘性中・しまり強 径1-3cm程度の礫を多く含む 黄褐色粘土をブロック状に含む

2号溝

- 1 10YR4/2灰黃褐色 シルト 粘性中・しまり中 黏分を無限に含む 明顯色シルトを斑状に含む 径1cm程度の礫を極少含む
- 2 10YR3/2黄褐色 シルト 径1-3cm程度の赤色土粒を少量含む 径1-3cm程度の礫を少量含む
- 3 10YR4/4褐色 粘土 粘性中・しまり弱

ピット5

- 1 10YR5/8黄褐色 細質シルト 粘性中・しまり中 径10-30cm程度の礫を多く含む

ピット7

- 1 10YR5/3に近い褐色 細質シルト 粘性弱・しまり強 岩化物を多量に含む 径1cm程度の礫を含む
- 2 10YR4/6褐色 細質シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を極少含む 白色・黄色土粒を微かに含む 上部には岩化物を解状に含む

ピット9

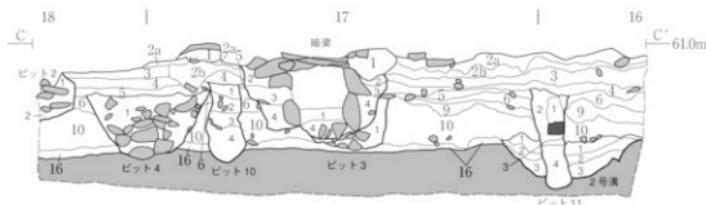
- 1 10YR5/6黄褐色 細質シルト 粘性弱・しまり強 下部に黄色・白色土粒と岩化物を少量含む

0 1m
S=1/40

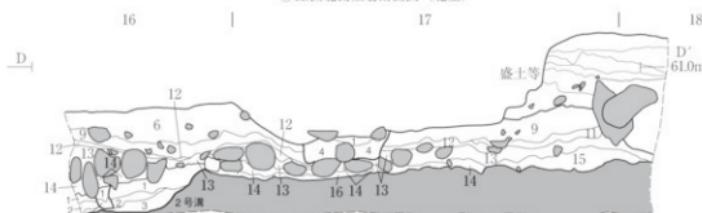
図11 二の丸第18地点1・1B区の土層断面図（1）

Fig.11 Cross section of area 1 and 1B at NM18 (1)

③IB区北側土層断面図(南壁)



④IB区北側土層断面図(北壁)



断面 2 ピット 12

- 1 10YR3-3 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり弱 ①-③の暗渠 1c 層に対応
 - 2 10YR4-1 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 白色・白色土粒を微かに含む ①-②の暗渠 3 層にはは対応
 - 3 10YR5-4 に赤い黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 径 1cm程度の礫を含む ①-③の暗渠 4 層にはは対応
 - 4 10YR3-3 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 灰化物を多量に含む 灰青褐色粘土をブロック状に少量含む ①-③の暗渠 5 層にはは対応
- ピット 2
- 1 10YR3-1 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり中 径 10-20cm程度の礫を含む
 - 2 10YR4-2 に赤い黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を少量含む
- ピット 3
- 1 10YR5-6 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり中 径 5-10cm程度の礫を多く含む
- ピット 4
- 1 10YR4-6 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径 10-20cm程度の礫を多量に含む
 - 2 10YR5-6 黄褐色 砂質シルト 粘性中・しまり強
 - 3 10YR4-2 に赤い黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径 1-3cm程度の礫を多量に含む 灰化物を少量含む
 - 3 10YR5-3 に赤い黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径 1.5cm程度の礫を多く含む 灰分を灰状に含む
 - 4 10YR5-1 黄褐色 粘土 粘性中・しまり強 径 1-3cm程度の礫を少量含む 灰分を灰状に含む
- ピット 11
- 1 10YR3-3 黄褐色 粘土 粘性中・しまり中 黄褐色粘土をブロック状に含む 植生跡
 - 2 10YR5-2 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径 1.3cm程度の礫を極端に含む
 - 3 10YR4-2 に赤い黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり弱 灰分を斑状に含む
 - 4 10YR4-1 黄褐色 粘土 粘性中・しまり弱 灰分を斑状に含む
- ピット 12
- 1 10YR3-3 黄褐色 砂質シルト 粘性中・しまり弱 径 3cm程度の礫を含む
 - 2 10YR5-4 に赤い黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり弱 灰化物を少量含む

⑤1号溝断面図

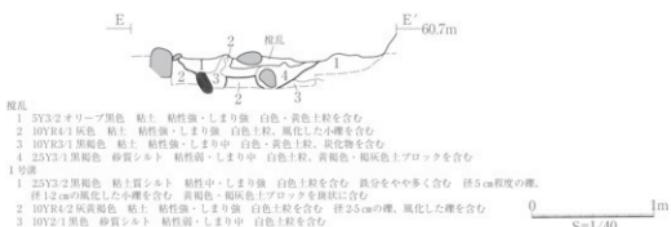


図 12 二の丸第 18 地点 1・1B 区の土層断面 (2)
Fig.12 Cross section of area 1 and 1B at NMI8 (2)

根固石のあるピットは、大きめの礎石を有していたことが推定される。

③段階

【ピット10・11】(図12③) 掘立柱建物の柱穴と考えられるピットである。その深さはピット10が64cm、ピット11は80cm程度である。両者共に、埋土は4層程度に分かれる。なお、ピット11には柱痕跡と推定される埋土がある（埋土1）。

【ピット9】(図11②) 3層を掘り込んだ小さなピットである。柱穴にしては深さが浅い。

④段階

【暗渠】(図10・11・12) 師團期の遺構と考えられる暗渠である。中心軸（南北）の傾きはN-39.4°-Wである（註）。蓋石として粘板岩を主体的に用いる。この蓋石の上面には、1層下部が堆積していた。また、1区では蓋石部分を含めた上部が破壊されており、その痕跡だけが認められる。蓋石直下には空隙があり、機能時の堆積層と考えられる砂や粘土による埋土1層がある。2層以下は暗渠構築時の構築土である。側石は上下の二段のみで、丸みのある川原石とそれを打ち欠いて加工したものを用いている。それから、今回の調査では蓋石を撤去していないため詳細は不明ではあるが、L18区における東端部で北東方向に分歧する。また、西端のピット6の位置から東側に向かって土管が認められたが、この暗渠に接続していた。この暗渠は、周辺の雨水等をまとめた排水施設と考えられる。また、2号溝と同様に、底部標高からすると南から北へ流れていたものと考えられる。

【敷石造構】(図10・12③・13) 暗渠に破壊されている遺構である。土層断面の観察からすると、2層上面に敷いていたことがわかる。原位置から動いている敷石も多数認められる。その場合、敷石石材の下部に1層下部と考えられる黒色土層が入る。図13に原位置を留めている敷石を示した。暗渠の北側「石2」の北側に2つの長方形の石が認められる。この2つの石が敷石造構の端部と考えられる。全体の構造や敷石の性格などについては不明である。

【石の抜取跡】(図10・13) 1B区では、1層下部と考えられる土壤が埋土となる不整形の凹みが多数認められた。これらの凹みは、敷石や礎石の抜き取り痕跡と考えられる。それぞれの抜取跡から出土する遺物も、そのほとんどは1層下部と同じであり、幕末から明治初頭の年代である。これらのうち、搅乱により断面が観察できた抜取跡24の断面図を図13②に示した。埋土は2層ある。その周囲には整地層が認められる。これらの整地層は抜取跡底部付近で歪み、下方に曲がる。この歪んだ整地層を平面で見ると、円環が重なる状態となる（図版6-8）。このような状況は、ピット1の石1下部でも認められた（図版5-8）。これらの様相を踏まえると、礎石下部にある整地層が、建物の重みで下方に歪んだものと考えられる。同様の状況が、他の区でも認められ、礎石自体は失われているものの、下方がこのような状況であれば、礎石があったと推察できる。

【建物1】(図13) 1間が6尺3寸となり、半間にもピットがある。軸方向（南北）はN-245°-Wである。柱6に礎石があることから、その他の柱1～5にも礎石が有ったものと推測できる。

【柱列1】(図13) 1間が6尺3寸となり、半間にも柱穴がある。軸方向（南北）はN-24.7°-Wである。建物1と並びが同じであることから、同じ建物を構成する可能性がある。しかし、建物1柱4と柱列1柱3の間が、6尺3寸が基本となる柱間には合わない。建物1と同様に、どちらの方向に伸びるか不明である。

【柱列2】(図13) 大型の円形の礎石により構成される6尺3寸の柱列である。軸方向（南北）はN-246°-Wとなる。本報告では、この軸方向から石1・4を柱1・2として想定した。中央の礎石は無い。この柱列と敷石造構の関係は不明であるが、敷石と礎石2の形状が合うことから、同時に存在していた可能性もある。また、石1・2・3と組んだ柱列も考えられるが、その場合、柱列の軸の方向は暗渠の軸の方向とはほぼ同様の値となる。

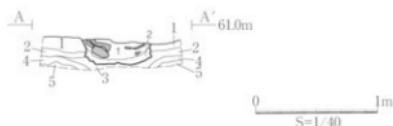
【1号溝】(図10、12⑤) 1区調査時に検出した東西に走る溝である。軸方向（南北）はN-18.6°-Wとなる。幅は1.5m程度である。調査区東端の搅乱部を掘り下げ、一部断面を確認したが、その構造は不明である。

【ピット2・7・8】(図10・11②・12③) ピット2・7は2層上面で検出している。それぞれの規模は小さい。

①1B区の造構配置



②抜取跡24土層断面



基層

- 1 圖11①-②の2c層と同じ
 - 2 10YR3/1 黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 白色・黄色土粒、炭化物を多量に含む
 - 3 圖11①-②の3層と同じ
 - 4 圖11①-②の4層と同じ
 - 5 圖11①-②の5層と同じ
- 敷石抜取跡24
- 1 圖11①-②の1層と同じ
 - 2 10YR4/3に近い黄褐色 粘土 粘性弱・しまり強 炭化物と白色土粒を僅かに含む 解状に褐色粘土を含む

図13 二の丸第18地点1B区の造構
Fig.13 Features of area 1B at NM18

2. 2・2B区の層序と遺構（図14～17）

（1）経過と層序

2013年度に調査を行い、下部の遺存状況が良好であることから、2014年度に拡張して土層や遺構等の確認を行った。この区でも中央部に1・1B区へと繋がる土管による擾乱があり、その断面で複数の整地層が確認されている（図15・16）。整地層では無い土層としては、1層下部の下方から面上に広がる焼土層がある。この焼土層と焼土層に相当する土層を1a～1d層とした。焼土層から出土した遺物は、1層下部としてまとめている。また、この区では深い擾乱が多く、盛土等の下から近世の整地層が直接確認される場合もあった。その場合、土層断面で確認できた整地層のうち、上部は削平されたものと捉えられる。

整地層は1～10層ある。最下部の10層は瓦片等を含む、砂質シルトの厚い整地層であり、地山由来と考えられる風化した礫を多數含む。地山は、調査区東側で確認されている。これらの堆積層の中で、1・1B区で特徴的であった4層は、この区では9層に対応するものと考えられる。

土層断面からは、次の①～⑦の段階が考えられる。①地山層を掘り込む遺構としては5号遺構がある。②その後に10層により整地される。10層上面を掘り込む遺構としては、3・9・10号遺構がある。3号遺構より古い4号遺構もその可能性がある。③これらの遺構を覆う整地層として9層がある。その9層を掘り込む遺構としては、7・8号遺構がある。④次に7層により厚い整地層がなされる。その7層を掘り込む遺構としては2・6号遺構、3号溝、ピット9がある。これらの遺構を埋めるようにして2～6層により整地層がなされている。⑤6層上面には平面で確認できた敷石部がある（図15・16）。この層と一連の整地層としては、3号溝を埋めている5層がある。これらの層を一時期の地表面として捉えるならば、2～4層と5・6層の間には時期差があることになる。⑥2層あるいは3層を掘り込む遺構としては1・2号溝、1号遺構、ピット8、石1がある。⑦最後に1層下部が堆積する。ピット2は、この1層下部を掘り込む新しい時期の遺構である。

平面のみで検出している遺構としては、ピット1・3～6、1～3号土坑、石2・3、暗渠がある。これらの遺構の周辺の土壤と土層断面における層序との細かな対応関係は不明であるが、1・2号溝が検出できている状況からすると、おおむね2層あるいは3層上面が露出しているものと考えられる。L11区では3号溝が平面で検出されている。この3号溝に関しては、土層断面の観察から整地層5層により埋められていることがわかる。今回、平面で検出した3号溝のプランはそのような整地層が確認されている可能性が高い。また、1号溝と暗渠は接続しているものと考えられ、この暗渠周辺で検出されている遺構群（暗渠、ピット3～6、1～3号土坑）も3層上面の遺構群と想定できる。石2・3は石1の事例を踏まえて3層上面の遺構、ピット1はその位置からすると2層あるいは3層上面の遺構と考えられる。

（2）検出した遺構

掘込面が不明の遺構もあるが、1・1B区と同様に検出した遺構を各段階にまとめて記載する。

①段階

【5号遺構】（図15・16） 地山面から掘り込まれる大型の遺構である。今回の調査の中央部付近に位置する。土管の擾乱部より深く、底面は確認されていない。最大深で52cmである。その埋土は、2層ある。壁際に堆積する2層は粘土であり、下部には黒色粘土を主体とする層が薄くラミナ状に堆積している。1層は礫や黄色粘土ブロックを多く含む層である。その機能は不明であるが、池のような水が貯まる遺構であったことが推察される。

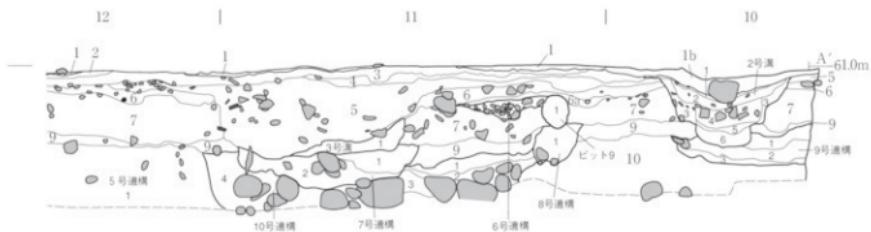
②段階

【3・4号遺構】（図16） 3号遺構は、10層から掘り込まれる遺構である。最大深は30cmであり、大きめの川原石を含む。埋土は4層である。下層となる3・4層は黒色の土層であり、砂をラミナ状に含んでいる。5号遺構と同様の機能が考えられる。4層遺構は、3号遺構の底面下で確認された遺構である。部分的に検出されたのみ



図14 二の丸第18地点2・2B区の遺構配置
Fig.14 The Distribution of features of area 2 and 2B at NM18

2B区中央南壁土層断面図（西側）



基本解

- 1 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 基礎土を多く含み炭化物を少量含む 径35cmの塊をやや多く含む
- 1a 10YR3-1 黃褐色 シルト 粘性中・しまり弱 径5-10cmの炭化物を極少含む 径3cmの塊を少し含む
- 1b 10YR3-1 黃褐色 粘性中・しまり強 径5-10cmの炭化物を多く含む 径3cmの炭化物を少含む
- 1c 10YR3-3(上) 黃褐色 粘性中・しまり強 径5-10cmの炭化物を多く含む 径3cmの炭化物を少含む
- 1d 10YR4-4 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径5-10cmの炭化物を多く含む 径3cmの炭化した塊を多く含む
- 2 10YR4-3(下) 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 砂をやや多く含む 径1cmの風化した塊を含む
- 3 10YR4-2 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1cmの白色土粒を含む 砂をやや多く含む
- 4 10YR2-3 黑褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径5-10cmの炭化物を極少含む 径3cmの炭化した塊を中量含む
- 5 10YR2-2 黒褐色 シルト 粘性弱・しまり強 砂を少量含む 上方に径3-10cmの凹溝を現状に含む
- 6a 10YR5-4(上) 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径5cmの炭化物を極少含む 砂をやや多く含む 径3-5cmの円潤を4層との間に現状に含む
- 6b 10YR5-4(下) 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり弱 白色土粒を含む 径1cm程度の風化した塊を含む
- 7 10YR4-2 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1cmの風化した塊を多く含む 径1cmの白色土粒を含む
- 8 10YR4-1 黃褐色 粘土 粘性強・しまり中 径2mmのマンキンを極端に含む 径1-2cmの塊に含む
- 9 10YR4-1 黃褐色 砂質シルト 粘性強・しまり弱 径2mmの炭化物を極端に含む
- 10 10YR5-6 黄褐色 砂質シルト 粘性中・しまり中 径1cmの風化した塊を多く含む 径3-5cmの塊に含む 黄褐色の土を多く含む 径3-10cmの塊を少量含む
- ビット9.
- 6号通構
- 付記し忘れ
- 7号通構
- 1 10YR4-2 黄褐色 砂 耐性なし・しまり中 黑褐色土を層状に含む 径1cm程度の炭化物を層状に含む
- 2 25Y4-1 黄褐色 粘土 粘性中・しまり中 大きな人頭大的塊を含む 徒手で白い色粘土小ブロックを握かに含む
- 8号通構
- 1 10YR4-2 黄褐色 シルト 粘性中・しまり強 風化した小塊を多く含む 明黄褐色の粘土小ブロックを含む 白色・黄色土粒、鉄分を含む
- 9号通構
- 1 10YR3-2 黑褐色 砂質シルト 粘性中・しまり中 明黄褐色の粘土小ブロックを握かに含む 白色・黄色土粒。径12cmの小塊。径5mm程度の炭化物を握かに含む
- 2 10YR4-2 黄褐色 粘土 粘性強・しまり弱 明黄褐色・黒灰色粘土小ブロックを握かに含む 径5mm程度の炭化物を握かに含む
- 3 25Y2-1 黑褐色 粘土 粘性強・しまり弱 径1cm程度の炭化物を極端に含む
- 10号通構
- 1 10YR4-3(上) 黄褐色 砂 粘性なし・しまり弱 黑褐色の粘土をテラス状に含む 黄色土粒。径5mm程度の炭化物を握かに含む 10号通構上
- 2 25Y3-1 黄褐色 粘土 粘性強めて強・しまり中 砂を多少に含む 10号通構上
- 3 10Y3-4(下) 黄褐色 砂 粘性なし・しまり弱 明黄褐色・黒灰色粘土小ブロックを握かに含む 径10号通構上
- 4 25Y4-2 黄褐色 黏土 粘性強・しまり中 浅黄色・黄褐色粘土ブロックを握かに含む 風化した小塊を含む 拾大から人頭大的塊を含む
- 2号通構上
- 1 10YR2-2 黑褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり弱 径5mm程度の炭化物を握かに含む
- 10YR4-3(下) 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり弱 黑褐色の粘土小ブロックを握かに含む 黄色土粒。径5mm程度の炭化物を握かに含む 10号通構上
- 3号通構上
- 1 10YR3-3 黄褐色 砂 耐性なし・しまり弱 径1cm程度の炭化物を含む

0 1m
S=1/40

図 15 二の丸第18地点2・2B区の土層断面（1）
Fig.15 Cross section of area 2 and 2B at NM18 (1)

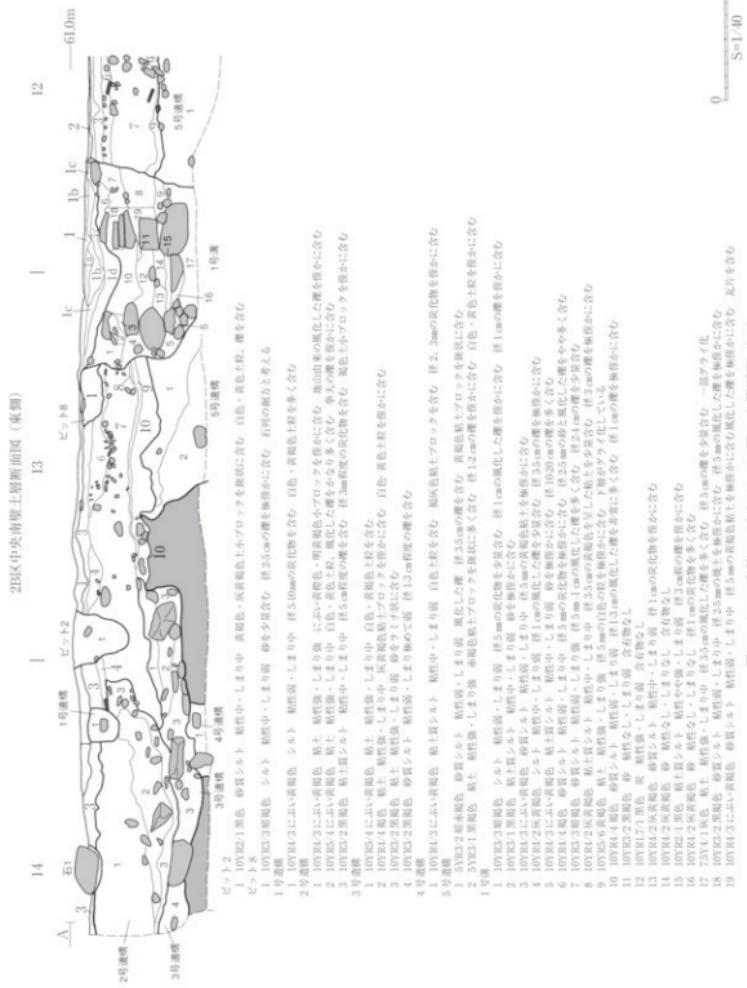


Fig.16 Two points of area 2 · 2B at NM18 (2)

Fig.16 Cross section of area 2 and 2B at NM18 (2)

であり、詳細は不明である。

【9号遺構】(図15) 調査区西端の2号溝の下方で確認された。埋土は3層あり、最大深は32cmである。全ての埋土に炭化物を含むが、最下層となる3層にはとくにその量が多い。機能は不明である。9号遺構の上層断面から抜き取った磁器(CJ3:図40)は、中国産の17世紀前半の遺物である。

【10号遺構】(図15) 西側では10層、東側では5号遺構を掘り込んで構築された遺構である。5号遺構と同様に底面は確認されていない。最大深も5号遺構と同様に52cmである。埋土は4層確認している。埋土下部となる3・4層には、最大30cm程度の川原石を多く含んでいる。埋土は全体的に砂質である。それらの堆積状況はラミナ状であることが多いことから、5号遺構と同様に池などの水が堆積する遺構であったことが推測される。多數確認されている確は、その護岸施設の可能性がある。

③段階

【7号遺構】(図15) 10号遺構の上部に形成された遺構である。埋土は2層であり、最大深は30cm程度である。埋土は粘土質はあるが、その堆積状況などは下部の10号遺構と類似している。10号遺構と同様に水と関連した機能が考えられる。

【8号遺構】(図15) 小型の遺構である。最大深は32cmである。ピットの可能性もある。

④段階

【2号遺構】(図16) 調査区東端で確認した規模の大きな遺構である。最大深は68cmである。埋土は3層確認した。いずれの埋土も地山に由来する風化礫、炭化物などを含む粘土質の土質である。これらの状況からすると人為的に埋め戻された様相が推定できる。遺構の機能などの詳細は不明である。

【6号遺構】(図15) 緩やかに凹む遺構である。最大深は16cmである。埋土は1層のみで、小さい川原石を充填している。遺構の機能などの詳細は不明である。L10区で小さい川原石の密集が認められたが、そのような部分と接続するすれば、溝状遺構であった可能性も考えられる。

【3号溝】(図14・15) L11区で平面プランを確認している。軸方向(南北)はN-22.5°-Wであり、最大幅は1.6mである。埋土は搅乱断面で確認している。遺構の上部は整地層によって埋められており、遺構埋土としては底部の一部が残っていたのみであった。この埋土は炭化物を含む砂層であり、水が流れていると考えられる。

【ピット9】(図15) 6号溝と重複しそれより新しいピットである。最大深は26cmである。詳細な内容は不明である。

⑤段階

【敷石】(図14・16) M12区で部分的に確認されたものである。土層断面図では6層上面にて確認されている。どの程度広がるか不明ではあるが、土層断面からすると3号溝近辺まで広がるようである。

⑥段階

【1号溝】(図14・16) K～M12、M13区で検出した石組の溝である。軸方向(南北)はN-25.4°-Wであり、最大幅は1.44mである。掘方の底面は確認されていないが、確認できた部位の最大深は80cmである。上部に焼土層(1a～1d層)が堆積している。これらの焼土を外すと、石組が確認できる。側石は3段となる。使用される石は大型の川原石や、部分的に打ち欠いた石である。蓋石は確認されていない。土層断面にて平たい床石を1点だけ確認している。溝構築時の埋土は1～9・16～19層である。溝機能時の埋土は13～15層で、いずれも砂質の土層となる。12層は炭層で、10層は炭化物や小礫を含む粘土層である。11層を含むこれらの層は、自然に堆積したものではなく、溝を埋める際に施した処置と考えられる。

【2号溝】(図14・15) L～N10、N11区で検出された素掘りの溝である。軸方向(南北)はN-22.4°-Wであり、最大幅は1.08mである。最大深は56cmである。土層断面の観察からすると2時期ある。当初の溝は底面が0.72mとなるやや幅広の溝で、最大深0.36mである。埋土3層がこの溝に属する。その後に底面0.44m程度の幅で、中央部を深く掘り直したと考えられる。埋土4～6層はその掘り直した部分の埋土で、埋土1・2層は最終的な埋

土となる。6層は砂をラミナ状に含む土層で、機能時の埋土と考えられる。5層は炭化物を多量に含む土層である。4層も炭化物も含み、瓦片を多数含む。最終的な埋土である1・2層は粘土質の土層であり、埋戻し土と考えられる。

【暗渠】 (図14) K・L12・13、K14区において平面のみで確認した暗渠である。軸方向（南北）はN-23.0°-Wであり、最大幅は1.6mである。確認できる蓋石には粘板岩は使用されていない。また、蓋石は上からの力によつて折れている様子が所々見受けられた。1号溝と接続しているものと推定できるが、接続部の詳細は不明である。ちなみに、このまま西進するならば、I・IB区で検出した1号溝とは合流しない。

【1号遺構】 (図16) 調査区東側の土層断面で検出した小型の遺構である。ピットである可能性もある。

【建物1】 (図17) 調査区東北部に位置する1間四方の建物である。軸方向（南北）はN-22.7°-Wで、間尺は6尺3寸となる。北側に伸びる可能性もあるが不明である。柱1・2は径30~40cm程度の川原石を充填しており、根固石と考えられる。柱3には礎石が認められ、構造が異なる。暗渠とは重複しており、それより新しい。

【柱列1】 (図17) 調査区東南部に位置する柱列である。軸方向（南北）はN-23.8°-Wである。ただし、間尺は9尺となり本遺跡では異質であることから、実際は組み合わない可能性もある。なお、石1とピット7と組み合う可能性もあるが、その間隔が短い。

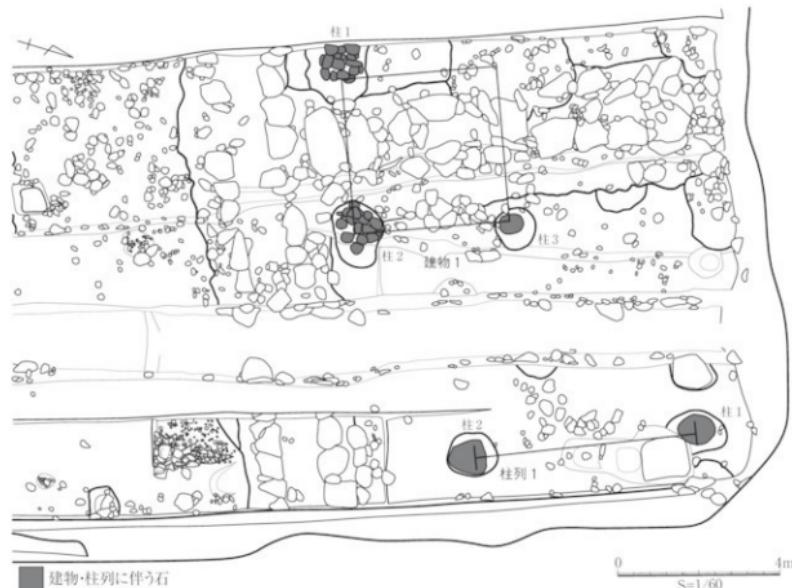


図17 二の丸第18地点2・2B区の遺構
Fig.17 Features of area 2 and 2B at NM18

【ピット1・4・7】(図14) 平面で確認したピットである。その他の組み合うピットは無い。ピット4は暗渠と重複し、それより古い。

【1～3号土坑】(図14) 暗渠と重複し、それより新しい土坑である。少数の川原石が認められることから大型のピットである可能性もあるが詳細は不明である。

⑦段階

【ピット2】(図14・16) L13区において平面・土層断面でも確認できたピットである。埋土は1層のみである。

3. 3区の層序と遺構 (図18・19)

(1) 経過と層序

2013年度調査区である。調査では、搅乱と1層下部を全て除去した状態で終了とした。この区では、現存する建物基礎の周囲のみが破壊されていたが、その他の部分は良好に残っていた。

1層を掘り込む形で廃棄土坑が認められた(図版10-5・6)。この土坑からは、CJ5・6(図版29)の様な遺物がまとまって出土している。この土坑の埋土は、1層と土質が類似するものであるので、1層の形成から離れた時期ではないことが推測される。1層下部を除去すると、基本層の2層あるいは3層が現れる。いずれの層の表面でも炭化物を含み、2層は焼土も含む。

土層断面では砂礫主体の地山が確認されている。地山上面はほぼ平らになっており、整地された痕跡と推定される。その上層の9層は、白色粘土を主体とする土層である。6～8層は黄色粘土を主体とした層であり、小さな礫、黒褐色の粘土等を含む。5層は、やや灰色に見える均質で夾雜物のない土層となり、1・IB区4層、2・2B区9層に対応する。それより上層に関しては、小礫や炭化物を含む粘土主体の褐色土層となる。

遺構は、1・2号土坑、1・2号遺構、ピット1～5が平面で確認された。1号遺構以外は全て1層下部除去後に検出している。1号遺構は、掘込面を含む上部が建物基礎により破壊されている。また、土層断面のみで確認できた遺構は無い。

(2) 検出した遺構

【1・2号土坑】(図18・19) 1号土坑は断面でも確認できた。埋土は1層のみである。黄色粘土、黒色粘土が斑状に混ざり、小さな礫、瓦片を含む。人為的な埋戻し土と考えられる。2号土坑は平面のみの検出である。

【ピット1～5】(図18・19) 全て平面で検出したピットである。そのうちピット3では、直径15cm程度の柱痕跡が認められた。

【1号遺構】(図18・19) 断面でも確認できた遺構である。埋土は2層ある。その土質は整地層の7・8層に類似しており、上層からの掘り込まれた遺構ではなく、古い遺構である可能性がある。

【2号遺構】(図18) 平面のみで検出した遺構である。埋土には瓦片、拳大程度の川原石を多量に含む部分がある。

4. 4区の層序と遺構 (図18・19)

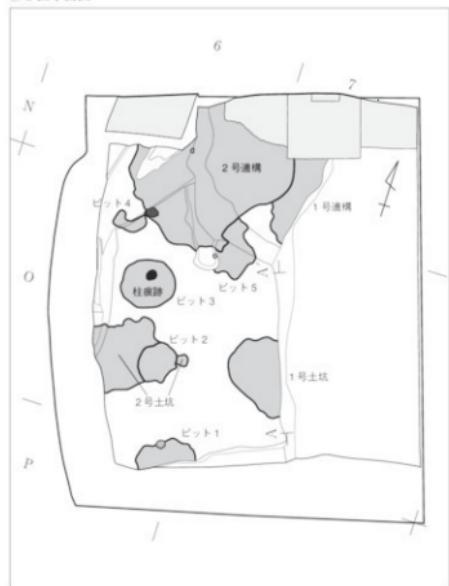
(1) 経過と層序

2013年度調査区である。東端と南端が配管等により搅乱を受けている。その搅乱部が狭いため、充分な土層観察ができないかった。他の区とは異なり、顯著に炭を多量に含む1層は認められない。盛土等の直下の2～4層にはレンガ片が含まれることから、1層・1層下部の時期に相当するものと考えられる。この上層を除去した後に、整地層と考えられる5・6層を確認した。また、平面で礫が列状に並んでいることを確認した。

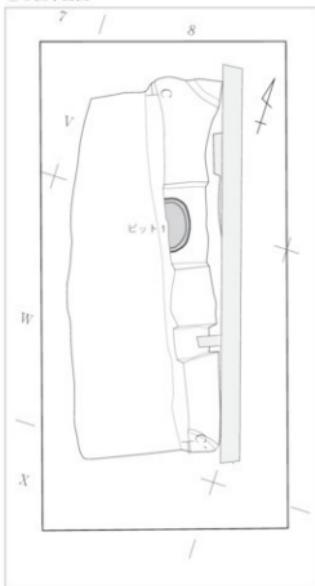
(2) 検出した遺構

【遺構】(図18・19) 磕が列状に並ぶ遺構である。この部分を端部として南北方向に向かって落ち込む。

①3区平面図



③5区平面図



②4区平面図

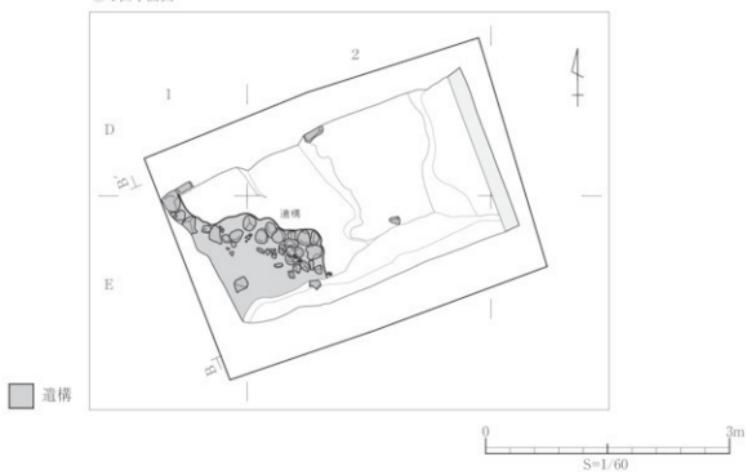
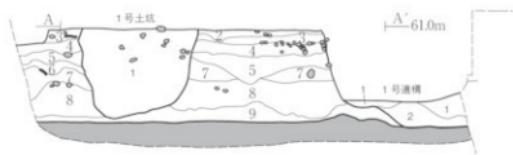


図18 二の丸第18地点3・4・5区の遺構配置
Fig.18 The Distribution of features of area 3 and 4, 5 at NM18

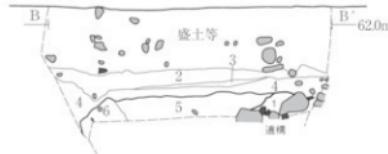
①3区東壁土層断面図



1号土坑

- 1 IOYR3-2 黒褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり中 赤化物、風化した小礫、にい・黄褐色粘土をやや多く含む 球を多く含む
- 1号遺構
- 1 IOYR3-2 黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 径5-10cmのにい・黄褐色粘土を多く含む 径2cmの風化した礫をやや多く含む
- 2 IOYR6-4 にい・黄褐色 粘土・粘性強 径5-10cmのにい・黄褐色粘土を少含む 径2.5cmのマングン残を僅かに含む
- 基礎
- 2 IOYR4-2 黒褐色 粘質シルト 粘性弱・しまりや強 径2cmの風化した礫を少量含む 径1cmの赤化物と幾本を無数に含む
- 3 IOYR4-3 にい・黄褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり中 径1cmの風化物を無数に含む 径3-5cmの風化した礫を少量含む
- 4 IOYR4-4 黄褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり中 径5mmの風化した礫をやや多く含む 径3.5cmの礫を少量含む 径2cmのにい・黄褐色粘土を僅かに含む
- 5 IOYR4-2 黑褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 径2cmの礫を無数に含む
- 6 IOYR4-4 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 径2cmの礫を無数に含む
- 7 IOYR4-3 にい・黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 白色土粒 径3.5cmの礫を僅かに含む にい・黄褐色粘土ブロックを含む
- 8 IOYR4-3 にい・黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 白色土粒 径1cm程の炭化物を僅かに含む 径1.5cm程の風化した礫を含む
- 9 IOYR6-4 にい・黄褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり中 浅黄褐色・明黄褐色、灰黃褐色粘土ブロックを斑状に含む
- 9 2.5Y6/4 にい・黄褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり中 浅黄褐色・明黄褐色、灰黃褐色粘土ブロックを斑状に含む 白色土粒を含む

②4区西壁土層断面図



基本層

- 2 IOYR2-1 黒色 シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土粒が1cm程の厚さで部分的に層状に含まれる 白色土粒を多く含む レンガを含む 黄褐色土粒、径5mmの風化物を僅かに含む
- 3 IOYR4-2 黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 白色、黄褐色土。此分を多く含む 径2.5cmの風化した礫を僅かに含む
- 4 IOYR4-4 黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 白色土粒を多く含む 径5cmの風化した礫を含む 径2.5cmの風化した礫を含む
- 5 IOYR3-2 黄褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり強 にい・黄褐色、明黄褐色粘土小ブロックを斑状に含む 白色、黃褐色土粒を多く含む

整地層

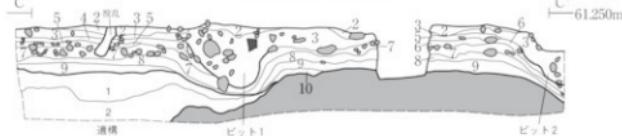
- 6 IOYR1-3 にい・黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 にい・黄褐色、明黄褐色粘土小ブロックを斑状に含む 白色土粒を含む 径5cm程の礫を含む

4解よりやや黒い 整地層(4解)が潜り落ちた事と考えられる

遺構

- 1 IOYR2-3 黑褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり中 黄褐色土、マンガンを僅かに含む

③5区中央東壁土層断面図



基本層

- 2 IOYR3-3 黄褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり強 径5-1cmの風化した礫を多く含む 径10-20cmの礫をやや多く含む 瓦片を僅かに含む

- 3 IOYR1-6 黄褐色 シルト 粘性中・しまり強 径1cmの風化した礫を非常に多く含む 径1.5cmの礫を非常に多く含む

- 4 IOYR3-2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり中 径1.5cmの礫を少含む 径5cmの風化物を僅かに含む

- 5 IOYR1-2 黑褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり中 径3-10cmの礫を多く含む

- 6 IOYR3-4 にい・黄褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり中 径2-5cmの礫を僅かに含む 径5-10cmの礫を少含む

- 7 IOYR1-3 にい・黄褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり中 径5-10cmの礫をやや多く含む 径3-5cmの礫を少含む

- 8 IOYR1-2 黄褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり中 径2-5cmの風化した白色土粒を僅かに含む 径1-2cmの風化物を少含む

- 9 IOYR1-4 黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり中 径2.5cmの白色的風化した礫を僅かに含む 径3.5cmのにい・黄褐色粘土を少含む

- 10 IOYR3-2 黑褐色 粘質シルト 粘性弱・しまり弱 径3cmのにい・黄褐色粘土を含む 径3cmの風化した礫をやや多く含む 遺構の埋土の可能性もある

遺構

- 1 IOYR1-3 にい・黄褐色 粘質シルト 粘性中・しまり中 径2cmの白色的風化した礫を少含む 径1.2cmの風化した礫を多く含む

- 2 IOYR3-2 黑褐色 粘質シルト 粘性なし・しまり弱 径5-10cmの礫を多く含む

0
S=1/40
1m

図 19 二の丸第 18 地点 3・4・5 区の土層断面

Fig.19 Cross section of area 3 and 4,5 at NM18

5. 5区の層序と遺構（図18・19）

（1）経過と層序

2013年度調査区である。西側はレンガ積みの共同溝、東側は現代の管により搅乱を受けている。この搅乱部にて、土層断面を観察することができた。この区の1層は、かなり薄い。その下から、山砂と川原石を敷き詰めた特徴的な層を検出した。この層は近代以降に多く見られる整地層であり、1層直下であることと近代の遺物が出土していることなどから、新しい時期の整地層と判断した。また、本区では、この層を1層下部として扱い遺物を取り上げている。この層を除去した後に、近世と考えられる整地層を検出した。

搅乱部の土層断面の観察から、地山と複数の整地層を確認した。整地層の堆積状況は、本調査区の北側に位置する3区と類似する。整地層の中で5層と8層が特徴的である。5層は薄い層であり、砂利のような小さな小石が多数認められる。また、ピット1・2とした部分近辺には存在しない。平面で確認しなければ確実なことはわからないが、砂利層のような状況であることも想定される。その場合、5層は2・2B区の6層に対応する可能性がある。8層は、灰色に近い灰雜物の少ない整地層である。この層は3区の5層に対応する。

遺構はそれほど多くはなく、ピット1・2と遺構の3基を確認した。遺構は地山面を掘込面とする大型の遺構である。ピット1・2は、その埋土が整地層3層と全く同じ土質であったため、区別することができなかった。また、ピット1・2の下方の整地層が大きく歪む。2013年度調査時には、ピットと認識できず、さらにこの整地層の大きな歪みの理由が不明であった。2014年度調査の1B区において、礎石下に同様の歪みが認められたことから、このような歪みは礎石建物の重みによるものと考えられた。したがって、この区におけるピット1・2も、かつては礎石が据えられていたが、その後に抜き取られ、3層により整地されたものと考えることができる。

（2）検出した遺構

【遺構】（図19）土層断面図のみで確認した遺構である。底面は確認できていない。埋土は2層あり、どちらも礎を多く含む砂質シルト質の土層である。

【ピット1・2】（図18・19）先述のように礎石が据えられていた痕跡と捉えている。根固石等もない。

6. 6A区の層序と遺構（図20～23）

（1）経過と層序

2014年度の調査区である。この調査区では、ほぼ全面に1層が確認された。南側に米軍による共同溝が東西に走り、北側は師団期の木橋が確認された。それらの搅乱を掘り上げると共に、調査期間に応じて1層の除去を行った。1層除去後に黄色粘土による整地層が確認できた。搅乱部の土層断面の観察からすると、この黄色粘土による整地層の下方にも炭化物が主体となる層が認められた。これらの層から出土している遺物は、幕末から明治初頭の時期が主体となっている。このことから、整地層下の炭化物が混じる層が明治15年の火災に伴う層であり、その後に黄色粘土による整地を施し、しばらくしてから1層が形成されたものと捉えることができた。このことから、1層下部と1層には時期差があることが、この区で判明した。今回の調査では、これらの層は1層下部とほぼ同時期とは考えられるが、その特徴が大きく異なることから本調査区では2層とした。

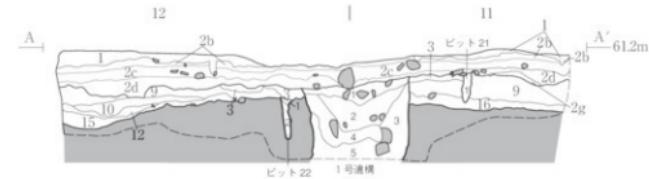
東西の土層断面で確認できた整地層は3～16層である（図21）。中央部が米軍共同溝により破壊されているため、東側と西側で土層の対比が難しい。そのため、層の数が比較的多い。

東側土層断面（図21②）では、3号溝とピット23・24が確認されている。これらの遺構は、基本層8・13・15層が堆積した後に掘り込まれた遺構である。このことから、8層あるいは14層上面が生活面となる時期があることがわかる。西側土層断面（図21①）では、5・15層が東側土層断面と直接的に対応するものの、その間の土層の関係を対応させることは難しい。土質のほか、整地の目的という観点からすると、西側10・12・16層は東側8・

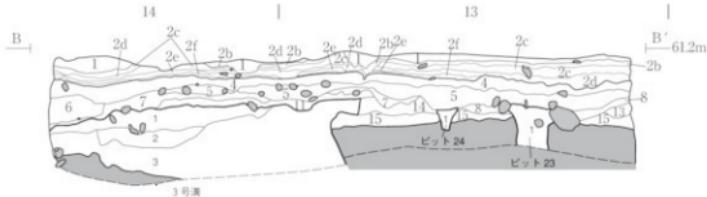


図20 二の丸第18地点6A区の遺構配置
Fig.20 The Distribution of features of area 6A at NMS 18

①6A区東西土層断面図(西側)



②6A区東西土層断面図(東側)



基本解

- 1 10YR2'2黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を多量に含む
- 2 10YR4'4褐色 シルト 粘性弱・しまり強 絆合層
- 3 10YR4'4褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1cm程度の礫を多く含む 1層下部
- 2c 10YR5'4褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄色粘土ブロックを斑状に多く含む 径1-10cm程度の礫を縦らに含む 1層下部
- 2d 10YR2'2黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を多量に含む 径1-10cm程度の礫を少量含む 1層下部
- 2e 10YR5'5黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を多く含む 1層下部
- 2f 10YR2'2黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を多量に含む 1層下部
- 2g 10YR4'4褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を多く含む 灰化物を少量含む 1層下部
- 2g 10YR4'4褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を多く含む 灰化物を少量含む 1層下部
- 3 10YR4'4褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物、白色 灰化物を縦らに含む
- 4 10YR5'4にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1cm程度の礫を縦らに含む 黄色粘土ブロックを縦らに含む
- 5 10YR4'6褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1-10cm程度の礫を縦らに含む 径2cm程度の黄色粘土ブロックを縦らに含む
- 6 10YR2'2灰褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 明黃褐色粘土を斑状に多く含む 少量の灰化物を含む
- 7 10YR4'2灰褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1.5cm程度の礫を縦らに含む
- 8 10YR2'2灰褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を少量含む
- 9 10YR5'6明褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 部分的に砂の塊を縦状に多く含む 径1-3cm程度の礫を縦らに含む
- 10 10YR4'4褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を縦状に多く含む 灰化物を極少量に含む
- 11 10YR5'4褐色 粘土 粘性弱・しまり強 白色粘土ブロックを縦に多く含む
- 12 10YR5'1褐色 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1-2cm程度の礫を含む
- 13 10YR5'5黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1-2cm程度の礫を含む
- 14 10YR6'6明黃褐色 シルト 粘性弱・しまり強 砂の砂と白色粘土を斑状に堆積する 部分的に褐色の砂を含む
- 15 10YR5'4にぶい黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1cm程度の礫を少量含む 砂を斑状に含む 最下部には黃褐色粘土が層状に堆積する
- 16 10YR6'4にぶい褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1cm程度の礫を少量含む 径1-2cm程度の礫を少量含む

1号溝

- 1 10YR4'2灰褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1.5cm程度の礫を縦らに含む 黄色粘土ブロックと灰化物を多量に含む
- 2 10YR4'4褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1.5cm程度の礫を縦らに含む 黄色粘土ブロックと灰化物を縦らに含む
- 3 10YR5'3にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1.5cm程度の礫を縦状に多く含む 明黃褐色の砂を含む
- 4 10YR5'6黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1.5cm程度の礫を縦状に多く含む 明黃褐色粘土ブロックを縦らに含む
- 5 10YCI3'3黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄色粘土ブロックを縦状に含む

2号溝

- 1 10YR4'4褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1.5cm程度の礫を多く含む 径1cm程度の白色粘土ブロックを縦に含む
- 2 10YR5'4にぶい黄褐色 粘土 粘性弱・しまり強
- 3 10YR4'6褐色 砂 貨シルト 粘性弱・しまり強 径1-15cm程度の礫を多量に含む 部分的に白色粘土を斑状に含む

ピット21

- 1 10YR2'4褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 上部に灰化物と径1cm程の礫を多く含む

ピット22

- 1 10YR5'6黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 白色、黄色土粒を縦らに含む
- 2 10YR5'3にぶい黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 灰化物を少量含む

ピット23

- 1 10YCI3'2黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径3cm程度の礫を含む

ピット24

- 1 10YR4'3にぶい黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強

0 1m
S=1/40

図21 二の丸第18地点6A区の土層断面(1)

Fig21 Cross section of area 6A at NM18 (1)

13・15層と同時期の整地層であると想定する。東側ではピット22がその際の遺構である。そして、これらの遺構が機能していた時期の後に、3～7・9層により整地がなされ、その頃に1号遺構、ピット21が形成されたものと考えられる。このように遺構の存在から、整地層は上部と下部に分かれることがわかる。もちろん、土層断面に現れた遺構のみで判断しているので、それ以上に生活面があったものと推察される。また、平面で検出した遺構の大部分は、整地層上層を掘り込んで形成された遺構と捉えられる。

(2) 検出した遺構

本調査区では土層断面で確認できた遺構も少ないことから、遺構ごとに説明をまとめる。

【石組溝】(図20・22) 南北と東西に走る石組溝である。整地層上部を掘込面とするものと考えられる。南北方向の石組溝は、軸方向（南北）はN-25.0°-Wであり、最大幅は1.44mほどである。南端部は擾乱などで判然しないが、東西の土層断面には認められない。U14区で東側に曲がるようであるが、調査区外へと伸びるため、その部分の詳細は不明である。また、T・U13区にて西側に分岐する。東西方向の石組溝の軸方向（南北）はN-25.8°-Wであり、最大幅は1.68mである。そして、U・V11区においてクランク状に曲がる。

T・U13区において擾乱を利用して、師団期の木橋埋土の一部と南北方向の端部と東西方向の断面を確認した(図22④)。5～9層は砂を主体とする土層で、溝機能時の埋土である。その中に、大きめに加工された石があるが、動いた側石と考えられる。この部分に関しては、底面も確認できた。北側にある大きめの丸石は、南北方向の側石と考えられる。埋土4層は、南北方向の石組溝の側石の掘方埋土とも考えられるが、不明である。埋土2・3層は、炭化物・焼土含む土層である。1層は黄色の粘土であり、埋戻し土と考えられる。

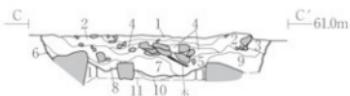
U11区においても擾乱部を利用して石組溝の土層断面を観察した(図22③)。底面は確認していない。左右端の側石は原位置であると考えられる。埋土8・10・11層は溝機能時の埋土と推定できる。この埋土11層からは、19世紀中葉～後葉(CJ9：図版30)、19世紀後葉以降(CJ10：図版30)の遺物が出土している。これらの出土遺物から、19世紀後葉頃にはまだ機能していたと考えられる。細かな変遷過程は不明であるが、その後に黄色粘土(7層)による埋め戻し、窪地への瓦礫の投棄(4・5層)を経て、焼土混じりの土が入り(2層)、黄色粘土による埋め戻し(1層)となる。この1・2層は、T・U13区の1・2層と対応する。このような、石組溝の埋土の堆積状況や出土遺物の年代などからすると、溝機能時以後の埋土は、本区における2層(1層下部)に相当するものと考えられる。

【1・2・3号溝】(図20・21) 1・2号溝は平面のみでの確認である。軸方向は、1号溝N-61.8°-W、2号溝N-16.4°-Wとなる。他の溝や建物などとは軸方向がかなり異なる。幅はどちらも1.1m程度である。どちらも石組溝より古い。1号溝は、整地層上部を掘込面としている。2号溝は、整地層下部を掘込面としているものと推定される。3号溝は、土層断面(図21)で確認している。整地層下部を掘込面としている。その底面は、西側に向かって緩やかに傾斜する。また、西側の壁がオーバーハングしており、崩落した痕跡とも推測できる。埋土の最下層である3層は砂層であり、礫が多量に含まれている。これらの様相から、規模は大きいが溝と判断した。また、2号溝がそのまま南進るのであれば、3号溝と接続することとなり、一連の溝となることも考えられる。

【1号遺構】(図21) 断面のみで確認しており、整地層上部を掘込面とする。最大幅88cmである。底部は検出していないが、検出した深さは64cmとなる。壁は垂直に立ち上がる。形状から素掘りの井戸である可能性もある。

【2号遺構】(図20) 平面のみで検出している。2層除去後には認められず、擾乱部を掘り上げた時点で確認していることから、整地層下部を掘込面とする古い時期の遺構と考えられる。詳細は不明である。

③石組溝(U11区)土層断面図



石組溝

- 1 IGYR7/8 黄褐色 粘土・粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を少量含む
- 2 IGYR3-3 基岩面 砂質シルト 粘性弱・しまり強 硫化物と土塊をブロック状に多量に含む
- 3 IGYR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を縦に含む
- 4 IGYR6-6 明黄褐色 粘土・粘性弱・しまり強 丸などの遺物を多量に含む
- 5 IGYR12 黄褐色 シルト質粘土 粘性弱・しまり強 丸などの遺物を多量に含む
- 6 IGYR12-2 黄褐色 粘土・粘性弱・しまり強 丸などの遺物を多量に含む
- 7 IGYR5/12-2 黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を少量含む
- 8 IGYR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱・しまり強 硫化物を少量含む
- 9 IGYR4/3 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を縦に含む 黒褐色のシルトを部分的に含む
- 10 IGYR3/3 黑褐色 粘土・粘性弱・しまり強 硫化物を少量含む
- 11 IGYR3/2 黑褐色 粘土・粘性弱・しまり強 硫化物を何かに含む

④石組溝・木樁(T13区)土層断面図



木樁

- 1 IGYH5/4 にぶい 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径5mm程度の礫を多量に含む
- 2 IGYR4/4 黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径5mm程度の礫を少量含む
- 3 IGYC1/2 黒褐色 粘土質粘土 粘性弱・じまり強 硫化物と白色土粒を少量含む
- 石組溝
- IGYH7/8 黄褐色 粘土・粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を少量含む
- 2 IGYR3-3 基岩面 砂質シルト・粘性弱・しまり強 硫化物と土塊をブロック状に多量に含む
- 3 IGYR2/2 黑褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 硫化物を多量に含む
- 4 IGYC3/2 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径1cm程度の礫を少量含む
- 5 IGYR4/2 灰黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強
- 6 IGYC3/1 黑褐色 シルト 粘性弱・しまり強 硫化物を少量含む
- 7 IGYR4/1 黄褐色 粘土・粘性弱・しまり強
- 8 IGYR4/2 灰黒褐色 シルト・粘性弱・しまり強 径1-3cm程度の礫を含む
- 9 IGYR4/1 黄褐色 粘土・粘性弱・しまり強

0 1m
S=1/40

図22 二の丸第18地点6A区の土層断面 (2)
Fig.22 Cross section of area 6A at NM18 (2)

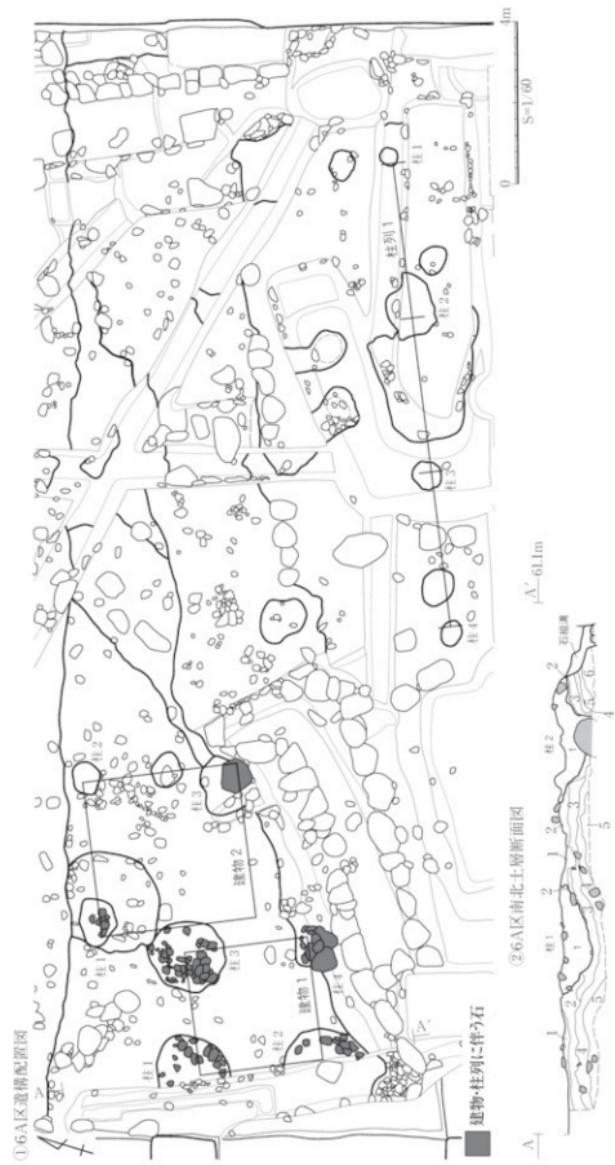
【建物1】(図23) 間尺は5尺となる。軸方向(南北)はN-237°-Wとなる。掘込面は、整地層上部と考えられる。東側以外の方向に伸びる可能性がある。礎石があつたらしく、根固石のみが残る。柱2の西側の搅乱部に大きめの石があり、礎石が落下したものと推定できる。それから、その土層断面(図23②)では、やはりピット下方の整地層が歪んでいる(巻頭カラー図版5)。これららの特徴からすると、規模の大きな礎石建物が建てられていたものと考えられる。また、柱4に関しては当初ピットとしては認識していなかったため、その掘方等は不明である。ただし、その重複関係から、石組溝が構築された後に形成された遺構であると考えられる。

【建物2】(図23) 間尺は6尺3寸で、軸方向(南北)はN-238°-Wとなる。掘込面は、整地層上部と考えられる。西南隅のピットは検出できなかった。柱3は石組溝と重複しており、石組溝のほうが新しい。

【柱1】(図23) 間尺は6尺3寸で、軸方向(南北)はN-235°-Wとなる。ピットの径はそれほど大きくはなく、搅乱底部から発見された柱1・3があるように深い柱のようである。掘込面は、柱2・4の存在から、整地層上部と考えられる。

【ピット21~24】(図21) 断面で検出したピットである。ピット21のみが整地層上部、他のピットは整地層下部を掘込面としている。また、ピット21・22は細いピットであり、杭の可能性もある。

【その他のピット】(図20) 平面で確認したピットである。ピット4・7・9・10・14・16・25・27は整地層上



1. 107323 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し咸味、炭酸物と汗による酸味を多く含む
2. 107341 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
3. 107342 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
4. 107344 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
5. 107345 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
6. 107346 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
7. 107347 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
8. 107348 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
9. 107349 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
10. 107350 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
11. 107351 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い
12. 107352 佐賀県西原町 シルト 始めに、少し酸味、汗による酸味が強めで、後味は甘い

0 $\xrightarrow{\zeta=1/60}$ 1m

図23 二の丸第18地点6A区の遺構
Fig.23 Features of area 6A at NM18

部を掘込面とするピットである。ピット17~20は搅乱底部等で検出されており、2号遺構と同様に整地層下部を掘込面とするピットと考えられる。

【石1】(図20) 調査区南端部で検出している。整地層上部に形成された遺構である。6B区の建物1に接続する可能性もある。

7. 6B区の層序と遺構 (図24~27)

(1) 経過と層序

2014年度の調査区である。6B区の調査経過は、6A区と同様である。調査区北側に6A区から続く師団期の木柵があり、調査区中央付近で木柵に接続する。そして、さらに西側の石組溝と接続する。調査区南側には6A区と同様に米軍共同溝があり、調査区の東西の土層断面の観察は、この共同溝によって破壊された南壁で行った。ただし、この米軍共同溝による搅乱部は、6A区とは異なり場所によって非常に狭く、土層断面下部の観察が不十分である可能性もある。また、調査区中央から東側にかけて、規模の大きな搅乱が全面的に認められた。そのため、整地層の上部が削平を受けている。

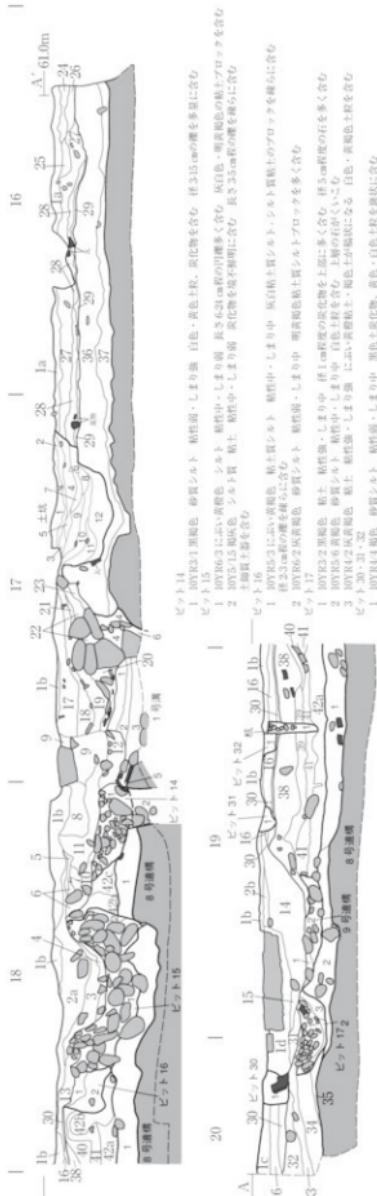
本区の層序は、1層に相当する層がIa~Id層となる(図25)。炭化物や焼土を多く含む層である。1層下部に相当する層は、2~31層と多数に分層している。調査区西側の4~29層は、基本的に6A区の2層に対応している。東端の16・30層、中央部の16・29層も同様である。1層下部に相当する層の最下部には、6A区と同様に薄い炭層(西側の29層、東端の30層)が認められる。一方で、調査区中央部近辺には複数の遺構が存在しており、その凹みが影響したためか整った層序となっていない。非常に薄いため分層ができなかったが、13・14・31層最下部にも炭層が存在する。そのような炭層の上部には、黄色粘土の埋戻し土が伴う。この埋戻し土は、明治15年の火災の後に、平坦となるように整地をしたものと考えられる。また、1号溝上部にて17~23層が9・12層により切られている様子が観察できた。この17~23層は、西側の24~29層と土質等が類似していることから、火災後に1号溝を埋めた整地層と考えられる。これらの状況から、9・12層を含む2~13層は、明治15年の火災に伴う整地以後にさらに搅乱を受けたものと考えられる。先述のように、このような新しい搅乱が、調査区中央から東側にかけてしばしば認められる。

二の丸期の整地層は、西側の36・37層、東側の32~35層がある。西側の36・37層は、6A区の整地層下部に相当する。それぞれの上面は60.8m程度の高さとなる。東側の34~35層を掘込面とする遺構としてピット17がある。その上部に整地層の33層が存在する。このことから、34・35層が整地層下部、32・33層が整地層上部に相当するものと推定する。しかし、34層上面の標高は60.6m程度であり、ほかの場所の整地層下部表面の標高より少し低い。一方で、32層上面の標高値が60.8m程度となるので、ピット17の存在などは整地層下部での変遷である可能性も否定できない。

また、調査区東側の最下部には、8号遺構と命名した規模の大きな遺構がある。地山を掘り込む遺構で、埋土は砂を主体とし遺物や礫を含む。その堆積層の状況からは、水と関連するような遺構であることが推定できる。その8号遺構の上部に堆積する38~42層とした層は、当初は異なる遺構の埋土とも考えていたが、土質や堆積状況などからすると、整地層である可能性が高い。ただし、その付近以外の整地層とは、その特徴が一致しない。8号遺構が水と関連する遺構であると推定するならば、その上部を異なる土壤でとくに整地したものと考えたい。また、8号遺構より新しい遺構として、41・42層を掘込面とする9号遺構が存在する。この関係から、41・42層を整地層下部と推定する。そして、9号遺構を38層が覆っていることから、この38層を整地層上部と判断する。39・40層は上部と下部のどちらに該当するのか不明であるが、平滑にするという整地の目的を鑑みるならば、整地層上部に帰属するものと考えられる。

以上のことから、遺構の変遷は、①地山面を掘込面とする遺構(8号遺構)、②整地層下部を掘込面





8号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
2 JOY4.4 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
9号断面
1 JOY4.6 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
2 JOY5.4 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
1号断面
1 JOY4.2 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
2 JOY5.2 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
3 JOY4.1 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
4 JOY4.2 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
5 JOY5.2 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
6 JOY5.3 黄褐色 粘土 剥蚀地・しまり地・砂を多く含む
7号断面
1 JOY3.1 黄褐色 砂質シルト 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
2 JOY5.5 黄褐色 砂質シルト 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
8号断面
1 JOY3.3 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
2 JOY5.6 黄褐色 砂質シルト 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
9号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
10号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
11号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
12号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
13号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
14号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
15号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
16号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
17号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
18号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
19号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
20号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
21号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
22号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
23号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
24号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
25号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
26号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
27号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
28号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
29号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
30号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
31号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
32号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
33号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
34号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む
35号断面
1 JOY3.2 黄褐色 粘土 剥離地・しまり地 白色・黃褐色・炭化物を含む

0 S=1:40

図25 二の丸第18地点6B区の土層断面 (1)
Fig25 Cross section of area 6B at NM18 (1)

四九

図 26 二の丸第 18 地点6B区の土層断面（2）

Fig.26 Cross section of area 6B at NM18 (2)

とする遺構（9号遺構、1号溝、ピット14・17）、③整地層上部を掘込面とする遺構（ピット15・16）、④師団期以降の遺構（ピット30～32、土坑）の4段階と大きく捉えることができる。しかし、調査区西端の様に整地層上部が無い地区、あるいは調査区中央から東にかけて擾乱が著しい地区もあることから、平面のみで検出した遺構は、それらの段階に屬する事が難しい。

(2) 極出した遺構

段階ごとに構造をまとめて記載する。ただし、平面のみで検出した構造に関しては、帰属させることが難しいことから、とりあえず②、③段階として報告する。

① 起點

【8号透構】(図25) 調査区東半分の最下部に位置する地山面を掘ほ面とする最下段階の透構である。掘上は2

層であるが、1層は砂を主体とし遺物を含む埋土であり、2層はシルト質の土層で礫を含む。先述の様に水に関連する遺構と考えられるが、詳細は不明である。

②段階

【1号溝】(図24・25)

整地層下部を掘込面とし南北に走る石組溝である。軸方向（南北）はN-27.1°-Wである。平面ではR-T・16-17区で検出している。断面では底部は確認できなかった。R17区で搅乱により破壊されており、その部位を計測すると検出面からの深さはおよそ70cmほどとなる。図25の土層断面図において、西側で確認できた最下部の側石のみが原位置で、それより上の側石は動いている。1号溝に伴う埋土は6層あるが、機能時の埋土は埋土1～3層と考えられる。詳細な観察はできなかったが、埋土4～6層は搅乱を受けている可能性もある。

また、同じく整地層下部を掘込面とするピット14と重複関係があり、ピット14より古いことから、整地層下部の段階において数段階が存在することがわかる。ピット14を柱とする建物が構築される以前の溝と考えられる。

【9号遺構】(図25) 整地層下部を掘り込む遺構で、部分的に8号遺構埋土2層と重複する。

【ピット14】(図25) 底部が確認されていないピットである。上部と下部で形態が異なることから、埋土1と埋土2は別の遺構である可能性もある。埋土1には根固石と考えられる小礫が充填されている。埋土2は垂直的に落ち込むようであるので、掘立柱の可能性も考えられる。

【ピット17】(図25) 整地層下部を掘り込む遺構で、根固石の小礫を多数含む。礎石は認められない。

③段階

【ピット15】(図25) ピット16との関係から整地層上部を掘り込む遺構と考えられる。根固石としてやや大ぶりの礫を多数充填したピットである。礎石は認められないが、大型の礎石建物であったことが推測される。柱列1と並び、建物となる可能性も考えられる。その場合、整地層上部を掘込面とする遺構となる。

また、このピット周辺の整地層は大きく歪んでいる。この場は、水と関連する遺構である8号遺構の上部にあたり、地盤がゆるい地点になる。このような場に、大型の礎石建物を建てたため、大きく整地層が歪んだものと推定される。

【ピット16】(図25) 整地層上部を掘込面としているピットである。ピット15と隣接しており別の遺構と捉えたが、ピット15と同一のものとも考えられる。また、周囲の整地層が大きく歪んでおり、その歪みの一部である可能性もある。その判断が難しい。

②・③段階

【建物1】(図27) 調査区西部で検出した建物である。軸方向（南北）はN-23.5°-Wとなる。この区画では整地層上部が無いため、どちらの整地層を掘込面とするのか不明である。柱8を記載の基準とすると、柱13との間尺が6尺3寸、柱9はその半間、柱1は1/3間となる。西側から1・2列目の柱は、浅い掘り込みを伴う礎石である。少し離れた三列目の柱は、根固石を伴っており、1・2列目の柱とは異なっていたものと考えられる。

【建物2】(図25・27) 当初は師団期の建物礎石と考えていたが、間尺が6尺3寸、軸方向（南北）が他の建物・柱列と類似する値であるN-23.5°-Wとなり、師団期の遺構とはその特徴が異なる。その埋土には、師団期以降と考えられる焼土や炭化物が混ざっており、調査時には1層下部相当として掘り上げている。先述のように、柱6は上層断面図(図25)で土坑とした遺構であり、米軍共同溝設置時に撤去されたものと推定した。これらのことからすると、礎石自身は二の丸期のものであるが、その後の整地により撤去や埋め戻しがなされた遺構である可能性を想定したい。また、この建物2が二の丸期の建物である場合、建物1と柱列1と接近することとなるが、その関係は不明である。

【柱列1】(図27) 規模の大きな根固石を有するが、礎石は失われている。軸方向（南北）はN-23.6°-Wである。間尺は12尺となり異質である。先述のようにピット15と組み、建物跡となる可能性がある。

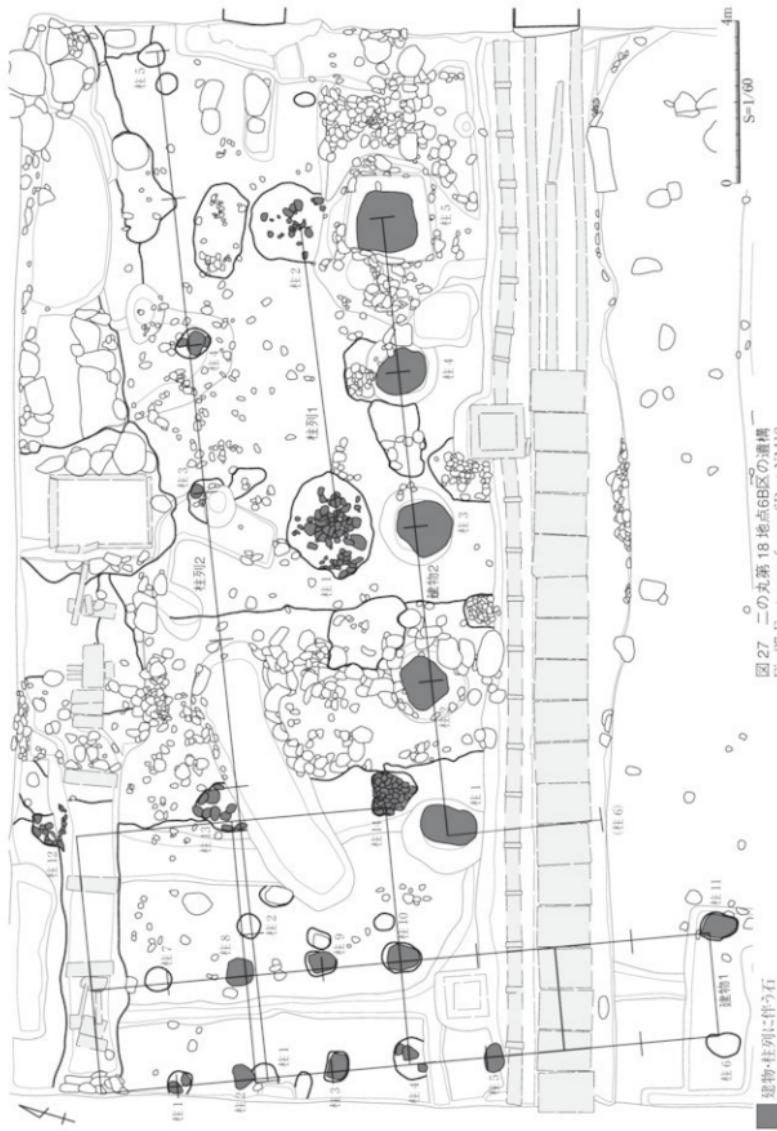


図27 二の丸第18地点6B区の遺構
Fig.27 Features of area 6B at NM18

【柱列2】(図27)

間尺6尺3寸で東西方向に走る柱列である。礎石などは認められておらず、掘立柱の可能性が高い。軸方向(南北)はN-23.5°-Wである。その構成などを含めて考えると堀等の可能性が考えられる。柱1の重複関係からすると、建物1より古い時期と考えられる。なお、柱4の検出面にて大きめの礎が確認されているが、礎石には適さない角がある石である。

【その他の遺構】(図24) その他の平面で検出した遺構としては、1～7・10号遺構、ピット1～4・7・9・10・12・13・22～24・33、石4・6がある。1号遺構は、師団期の石組溝の掘方である可能性もある。4号遺構は礎が多数検出されている。建物2柱5の底部付近でも確認されており、4号遺構は建物2より古い遺構である。また、1号溝上面において多数の礎が集まっている箇所がある。それらの礎群も礎石が失われた根固石の可能性がある。

④段階

【土坑】(図25) 1層を掘り込んでいる土坑である。建物2と関係し、柱6の位置にあることから、礎石が存在していたが、米軍共同溝を構築する際に抜き取られた痕跡と推定した。

【ピット30～32、杭】(図25) ピットは1層を掘り込む遺構であり、米軍期であろうか。杭は、1層に覆われてることから、明治15年の火災以降、1層形成前の時期であるといえる。

8. 7A・7C区の層序と遺構 (図28～31)

(1) 経過と層序

2014年度調査区である。7A区では、近現代の基礎、配管などで全面に縦横の搅乱がある。その最も長い搅乱部を用いて、土層観察を行った。他の区で認められた様な1層は確認できなかった。それに相当する層として、しまりの強い土質で、多量の炭化物とレンガ、コンクリートなどを含む土層を確認した。他の調査区の1層下部に相当する土層として2層があるが、1層よりは炭化物が少ないと想定される。本調査では、他の調査区と同様に1層と1層下部として調査を進めてきたが、その土質などの特徴が大きく異なっている。本調査では、部分的に2層まで外して遺構等を確認している。

3層以下は全て近世の整地層と考えられる。本調査区では、地山は確認できなかった。最下層となる12層は北西部のみで確認しており、基本的に西側から東側に向かって傾斜する堆積となっている。その上の11層は最も厚い層であり、グリット7D区の辺りから東側に向かって強く傾斜する。この層以後も東側に向かって傾斜するが、5層以降になるとほぼ平らに近い堆積となる。このことから、西側から順次整地していく様相が窺える。

東側9・10層までは、地山由来の砂礎層を用いて整地している。その中でも12層は、礎が非常に多く、やや褐色が強い。8層は黒褐色土層となり、本区において非常に特徴的な層となる。7層以降は、地山由来の風化礎が混ざることはあるが、基本的には粘土質の土壤で整地を行っている。それぞれの層は黄褐色を基本としている土層であるため、黒褐色の8層は非常に目立つ。

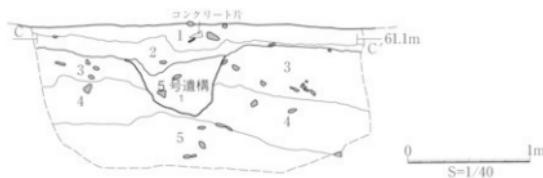
この12層と8層の分布を平面で捉えることができた(図28)。12層は深い搅乱部で確認できている。おおよそ南北を走るラインとして検出した。8層は、調査区中央付近から東方向に曲がり、1・2号遺構の間を通り東端へと向かう。このことから、本調査区における8層整地の頃は、北東端の方が凹むような状況であったことがわかる。また、南北方向の土層断面図でも8層を確認している(図29②:3層)。この層は、1号遺構埋土北端を切る形で堆積している。このような状況から、8層形成前に一時的な中断があったことが推察される。

7C区は、2014年度の立ち会い調査時に遺構が発見されたことに伴い設定した調査区である。基本層序の項でも説明したように、1層に相当する土層はすでに搅乱を受けており、石組溝とそれと重複する遺構を確認した。記録作成後に保存のため埋め戻した。



図28 二の丸第18地点7A・7C区の遺構配置

③7A 区南端土層断面



基本層

- 1 地図25の1層と同じ
 - 2 地図25の2層と同じ
 - 3 IORYR6#明黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり極めて強、小礫を多量に含む 砂を含む 白色・黄色土粒含む 地図25の11・12層に相当
 - 4 IORYRS#黄褐色、砂・粘性弱・しまり中 白色土粒を僅かに含む 径1.2cmの小礫と拳大の礫を僅かに含む に赤い黄褐色土粒が解体状に広がる部分もある
 - 5 IORYRS#黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中 砂を多量に含む 砂分を多く含む 黄褐色粘土ブロックを僅かに含む 白色・黄色土粒を含む
- 5号遺構

1 7.5YR3/3褐褐色 砂質シルト・粘性弱・しまり強 径1.2cmの小礫を多く含む 径3.10cmの礫を含む 白色・黄色土粒を多く含む

図30 二の丸第18地点7A区の土層断面（2）
Fig.30 Cross section of area 7A at NM18 (2)

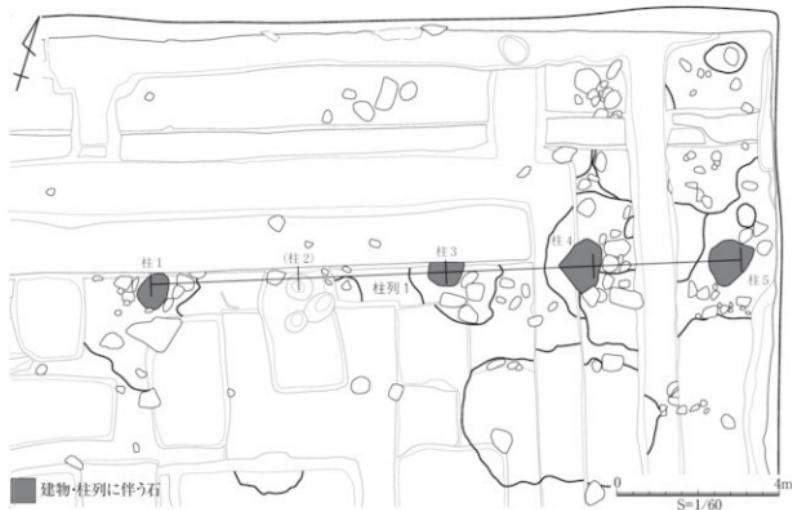


図31 二の丸第18地点7A区の遺構
Fig.31 Features of area 7A at NM18

(2) 検出した遺構

本調査区の遺構はほとんどが平面での検出であるため、遺構ごとに説明する。

【1～5号遺構】(図28・29) 1号遺構は、先述のように重複関係から古い時期の遺構と考えられる。1号遺構の検出面にて19世紀前葉～中葉の陶器(CT20: 図版36)を回収しているが、1・2層に帰属する遺物と推定される。埋土を掘り下げていないので、時期等の詳細は不明である。2～4号遺構も、すべての整地がなされた後の遺構であることは判断できるが、詳細は不明である。また、2号遺構は溝状となっているが、後述のように石1に伴うピットも重複している可能性が高い。4号遺構は、3号遺構と同一の遺構とも考えられる。5号遺構は、断面のみの確認である(図30③)。ピットの可能性もある。

【柱列1】(図31) 磐石を有する6尺の柱列である。軸方向(南北)はN-19.8°-Wである。柱1・4の掘方の大きさからすると、2号遺構とした範囲内に石1の掘方が存在しているものと推定できる。柱2の部分は別の搅乱で破壊されていたが、磐石に相当する大型の礫が搅乱の中に認められた。この柱列は、他の調査区における二の丸期の遺構の軸方向と間尺等とは異なることから、明治15年以前の師団期の柱列と考えられる。

【ピット1～4・8・10】(図28) 柱配置が不明なピットである。ピット2・3間は6尺3寸となり、柱列として組む可能性がある。ピット10は搅乱底部で検出したピットである。その他のピットの詳細は不明である。

【7C区の遺構】(図28) 石組溝の軸方向は不明であるが、川原石を南北に並べていることから、石組溝は南北に走るものと考えられる。瓦、土師質土器等が出土しているが、正確な時期は不明である。また、石組溝と重複して古い時期の遺構も確認できたが、プランのみの確認である。

9. 7B区の層序と遺構(図32・33)

(1) 経過と層序

2014年度調査区である。この区の堆積状況は、隣接する7A区とは様相が全く異なっていた。最初に重機で掘削した際には、1層に相当する層が確認できず、かなり深くまでコンクリートやガラスなどが混ざる土層が続いた。その後、精査を行い炭が多く混じる黒色土層を検出した(巻頭カラー図版6)。この土層は、他の調査区の1層に対応するものと考えられ、本調査区では炭化物等の混入状況から1a～1c層に細分している。そして、中央部に東西方向のトレンチを設定して、その下部を確認した。その下部は、炭化物を含むグライ化した粘土質の土層が続く。この層は、1層下部に相当するものと判断し、その土質が様々であることから2層と命名し、2a～2e層まで細分した。その2層の下からは、二の丸期の整地層と考えられる3層を確認すると共に遺構を検出した。3層は、基本的には粘土質の整地層であるが、グライ化が著しい。土質や炭化物のあり方等から3a～3f層まで細分している。

本調査区では1～3号遺構、溝の合計4基の遺構を確認している。これらの遺構の検出面は、3層上面である。

(2) 検出した遺構

【1～3号遺構】(図32・33) 1・2号遺構は平面での検出のみであるので詳細は不明である。3号遺構は、搅乱2と重複しており、その搅乱を掘り下げる際に、同時に部分的に掘り下げている。深さは50cm程度であり、壁は緩やかに立ち上がる。大型の落ち込みのような遺構である。遺構の東端は調査区外へと伸びていてことから、規模は大きいものと推測される。埋土には瓦を多量に含んでいた。

【溝】(図32・33) 東西方向に走る溝である。軸方向(南北)はN-20.2°-Eである。幅は88cm程である。土層断面も部分的に確認している。底面は検出していない。

註) 柱列・溝等が東西方向に伸びる場合は、容易に比較をするため「90-東西方向の軸角度」の値を算出し、「軸角度(南北)」として表記した。



図32 二の丸第18地点7B区の遺構配置
Fig.32 The Distribution of features of area 7B at NM18

第V章 出土遺物

今回の調査は、確認調査のため、近代の層序を除去した段階で遺構確認を行った。近世の層序はごく一部しか掘削していないため、遺物の大部分は、明治時代以降のものである。調査区によっては、近代の層序に江戸時代の遺物が多く含まれている区もみられた。

磁器の集計に関しては、近現代、幕末から明治初頭、幕末以前と、磁器の特徴から年代分けをして集計した。基本的に江戸時代の層序・遺構を調査していないため、本來の層位に基づいた江戸時代の遺物は出土していない。しかし、盛土等や1層からは、二の丸の最終段階に位置づけられる幕末から明治初頭頃の遺物、また下層の江戸時代の遺構や整地層に含まれていたと考えられる遺物、明治時代中期以降の陸軍期の遺物が混在している状態であった。従来のように、大まかな年代を区別せずに点数を集計するだけでは、磁器の実態をよく示すことができないことから、幕末前、幕末から明治初頭、近現代の3時期に分けて集計することとした。近現代の磁器の判断材料としては、染付にコバルトを用いているもの、摺絵のもの、銅版転写のもの、クロム青磁などを考えた。他にも、過去に出土した近代磁器と比較して、文様や器形、胎土などの特徴から判断した。小破片で判断が困難な磁器は、上記の明らかな近代磁器以外は、幕末から明治初頭の年代に入れて集計している。集計表で、「m」と付けて集計している皿は、瀬戸の唐草文の皿(図版30-CJ10, CJ15)である。

陶器を含む他の遺物では、幕末前、幕末から明治初頭、近現代を区別することが難しいものも多いことから、年代での区別は行わず、従来通りに集計を行った。

瓦については、これまで何度か分類基準を見直し、瓦の種類を設定してきた(『年報』6・7・8・9・18、『調査報告』1)。基本的にこれらの分類基準を踏襲して瓦の種類を分類した。これまでの報告書では、軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦など、瓦当面がある瓦については、抽出し、図化することとしていた。また、他の種類の瓦については、『年報』6に示した基準に従って、計測できるものを抽出し、図化してきた。ただし、今回出土した瓦は、従来の基準に従って図化すると、近代以降の瓦と推測されるものを多数図化することとなる。江戸時代の層序を調査していないため、江戸時代の層序に伴った瓦は基本的には出土していない。出土した瓦のほとんどが、近代以降の層位に含まれる瓦であるため、従来の抽出基準による実測図や写真による図化は行わないこととし、文様や法量などを観察表にまとめるのみとした。瓦当面のある瓦については、図34~36にこれまで出土した瓦当文様の模式図を提示している。それを基に、集計の際に瓦当文様ごとに点数を示している(表32~35)。刻印のある瓦は、刻印部分のみを拓図で示し、観察表の中に提示している。

また、通常の調査では、近代のレンガや板ガラスなどは集計から外していたが、確実な近代の遺物が出土する層位であることを示すために、集計に載せている。

調査区ごとに、出土遺物の傾向が異なるため、調査区ごとに出土遺物の特徴について述べていく。なお、盛土等、1層、1層下部の基本的な遺物の年代観については、各区で共通している。

1. 1・1B区の遺物 (図39、図版27、表11・12・30・32・36・38・40・44・45・47)

2013年度に調査した1区の南側を拡張するように、2014年度の調査で1B区を設定した。そのため、1・1B区の遺物を一連として記載する。

確認調査のため、江戸時代の遺構・層序は基本的には掘っていない。そのため、大半が近現代の遺物である。盛土等、1層、1層下部からは、レンガや板ガラス、洋釘などの明確な近代以降の遺物が含まれている。

磁器(表11・12)は、1・1B区の盛土等、1層には銅版転写や摺絵の磁器が含まれていることから、明治時代以降の層序である。しかし、幕末から明治初頭頃や、幕末より古い近世の磁器もわずかではあるが含まれている。出土量の割合として多いのは、幕末から明治初頭頃の磁器が多く、幕末より古いと考えられる近世の磁器は

三巴文（左巻）		三引両文	
三巴文（右巻）		九曜文	
連珠三巴文（左巻）		桐文	
連珠三巴文（右巻）		二つ丁子巴文	
		無文（万十）	
		無文（石持）	

図34 仙台城跡出土軒丸瓦類・軒棧瓦小巴の文様

Fig.34 Designs of round eaves tile and round shaped part of eaves pan-tile from Sendai Castle

唐草	中心飾り		
唐草1a類		三枚笪1a	
		三枚笪1b	
		三枚笪2a	
		三枚笪2b	
		三枚笪2c	
		陰桔梗1	
		陰桔梗2	
		隅切折敷に三文字	

図35 仙台城跡出土軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様（1）

Fig.35 Designs of flat eaves tile and eaves pan-tile from Sendai Castle (1)

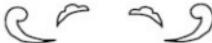
唐草		中心飾り	
唐草1 b		三枚笪1a	
		三枚笪1b	
		三枚笪2a	
		三枚笪2b	
		三枚笪2c	
		細葉雪持笪	
唐草2		太葉雪持笪	
		梅	
唐草3b		細桔梗1	
		細桔梗2	
		劍形桔梗1	
		劍形桔梗2	
		劍形桔梗3	
唐草3c		特殊桔梗	?
唐草3d		四弁花	
唐草4		?	?
唐草5		三引両	
		三枚笪	
		?	?
唐草6		四弁花	

図36 仙台城跡出土軒平瓦・軒桟瓦の瓦当文様（2）

Fig.36 Designs of flat eaves tile and eaves pan-tile from Sendai Castle (2)

8点含まれているのみである。いずれも小破片で、年代や特徴のわかるものではなく、図化していない。1・IB区では、近代・近世の磁器で図化したものはない。

陶器（表30）では、1・IB区とも、盛土等や1層で、大皿、土瓶の点数が多くなっている。大皿は、瀬戸・美濃の灰釉大皿で、19世紀以降に多くみられるものである。類似した破片が多いが、接合しないため、点数が多くなっている。小中皿は、19世紀中葉の平清水の染付陶器が主体である。CT1は大堀相馬の灰釉小中皿で、19世紀中葉から後葉である（図39、図版27）。

抜取跡の各遺構からは、幕末から明治初頭の磁器の碗や皿、陶器では土瓶が出土している。磁器では、近代の描繪の製品などは含まれていなかった。

瓦（表32）は、軒丸瓦、軒平瓦類が1点ずつ出土している。いずれも盛土等からの出土であるが、九曜文や唐草文1a類など、二の丸の瓦に使われる文様である。それ以外では、全体形状がわかる瓦ではなく、小破片が若干出土する程度である。

土師質土器では、1・IB区の盛土等、1層を中心として、皿の小破片の出土が多い。接合するものはほとんどなく、表面が磨滅している場合が多い。土師質土器の火鉢や火鉢の可能性が考えられる鉢類、擂鉢も比較的多く出土している。これらは比較的大きい破片ではあるが、全体の形状が判明するものはなかった。

1層から寛永通宝（新）が1点出土している（図39-MC1、図版27）。完形で残存状態もよいが、本来の層序を保ったものではない。また、石製の賽子が1点出土している（図39-S1、図版27）。約半分程度が欠損した状態である。

2. 2・2B区の遺物（図40、図版28、表13・14・30・33・36・38・39・40・44）

2013年度に調査した2区の南側を拡張して、2014年度の調査で2B区を設定した。そのため、2・2B区の遺物を一連として記載する。

確認調査のため、江戸時代の遺構・層序は基本的には掘り下げておらず、大半が近現代の遺物である。1層は、昭和十三年の一錢、昭和十五年の五銭などが、1層下部からは薺葉、洋釘など、近代の遺物が多く含まれている（表38）。遺構出土遺物に関しては、検出面での出土のため、遺構自体の年代を示していない場合がほとんどである。

磁器（表13・14）は、盛土等と1層から、描繪や銅版転写の磁器が出土しており、19世紀後葉から末葉以降の年代であることが考えられる。1層下部からは描繪磁器は出土しているものの、銅版転写は出土していないことから、近代に属していても、1層よりもわずかに年代が古いことが考えられる。

CJ1、CJ2はいずれも1層下部から出土している（図版28）。瀬戸の磁器で19世紀後葉以降のものである。CJ4（図40、図版28）は、瀬戸の19世紀代の磁器で、2号溝検出面からの出土である。CJ3（図40、図版28）は9号遺構からの出土である。近代の上管によって破壊された場所の壁面を利用して、下層の近世の遺構確認をしていた際に、遺構断面から検出されたものである。そのため、9号遺構の本来の年代に伴うと考えられる。内外面網目文で、虫喰いの痕跡があることから、中国の青花磁器で、明末清初の年代（17世紀前半）が考えられる。

陶器（表30）では、盛土等、1層、1層下部などから、土瓶が多数出土している。出土点数自体も多いのだが、薄手の土瓶の性質上、小破片になる場合が多く、接合や同一個体の認定が難しいため、点数が多くなることを考慮する必要がある。CT3（図版28）の土瓶も、同一個体だが完全に接合することはできなかった。土瓶には受熱痕がみられるものも多かった。体部下半に、「松」「造」「八」などの墨書きがみられる。他の陶器も小破片が多い。高級品は含まれず、普段使いの日用品が出土している状態である。

瓦（表33）は、1層下部から三巴文の文様を持つ軒丸瓦類の破片が1点出土している。他は、破片は小さくないものの、接合することはほとんどなかった。

土師質土器も小片ばかりで、接合するものは少なかった。皿がほとんどであるが、擂鉢、火鉢などがごくわず

かに含まれている。瓦質土器は、ほとんどみられず、火鉢、十能のはか、小破片がわずかにみられる程度である。古銭（図40、図版28）は1層下部から寛永通宝（新）が1点（MC2）、3層検出面から寛永通宝（古）が1点（MC3）出土している。

3. 3区の遺物（図41、図版29、表15・16・30・33・36・38～41）

調査した盛土等、1層、1層下部の各層は、いずれも近代以降の層序であり、遺物もほとんどが近現代のものであった。

磁器（表15・16）は、幕末から明治初頭のものも若干含まれているが、大半が近現代の磁器であった。中でも、CJ5、CJ6（図版29）のような白磁の出土が多かった。これまでの調査では出土していない器形である。CJ5は口縁部に浅い段がある。蓋が付くような器形であるが、これと組みになるような磁器製や金属製の蓋は出土していないため不明である。紙や布などで蓋をしていた可能性も考えられる。外面は無釉で、内面に釉が掛けられているが、釉の掛け方は全体的に雑な様子である。器種名は広口瓶Bとした。CJ6は口縁部に段がない器形で、外面と内面の口縁部付近に釉が掛けられているなど、CJ5とは若干異なる特徴がある。器種名は広口瓶Aとした。広口瓶は、1・IB区、6A区からも出土しているが3区からの出土量が際だっている。また、規格品として量産された磁器のよう、類似した破片は多数あるが、あまり接合しないのも特徴である。出土状況から考えて、陸軍が使用したものであると考えられる。戦時下の昭和13年（1938）年4月の「銑鉄鈎物製造制限に関する規則」、7月の「銅製品の製造制限に関する件」の交付（瑞浪市陶磁資料館2012）によって、さまざまな統制陶磁器が本格的に作られた。CJ5、CJ6は統制陶磁器の化粧品容器にもっとも近いのではないかと推測される。全く同じ器形のものは確認できなかったが、陸軍内で使用する整髪料入れやクリーム入れなどの統制陶磁器（安藤貞夫2012）の可能性が高いのではないかと考えられる。仙台市の「桜ヶ岡公園遺跡」からは、1層遺構外出土遺物の参考資料として、CJ6と類似した磁器が掲載されている（仙台市教育委員会2011）。

陶器はあまり出土していない（表30）。土瓶や碗などの小破片が中心である。CT4は、1層下部からの出土である。型打で木の葉形の器形をしている。小孔があることから、水滴の可能性が考えられる。瀬戸・美濃であるが、年代は不明である（図41、図版29）。CH37は、1層下部出土の焼塩壺である。同一個体と考えられるが、接合はしなかった。非常に薄手で、地元産特有の厚手で格子目を持つ焼塩壺とは器形も異なるものである。近世のものであるが、年代は不明である（図41、図版29）。

3区からは、土師質土器、瓦はほとんど出土していない。ガラス類は、インク瓶や漏斗など陸軍関連と考えられる遺物が多くみられる。

4. 4区の遺物（表17・18・31・33・36・38）

調査した層序は、盛土等のみである。出土遺物は、磁器、陶器、瓦、土師質土器、金属製品などが出土しているが、全体的に非常に少ない。磁器は、銅板転写など確実な近代以降の遺物が入っている。団化した遺物はなかった。

5. 5区の遺物（表19・20・31・33・36・38）

調査した層序は、盛土等、1層、1層下部で、いずれの層からも近代の陶磁器が出土している（表19・20・31）。団化した遺物はない。磁器では、近代の遺物とともに、幕末から明治初頭ごろの磁器も含まれている。陶器も小破片が主体である。大堀相馬の碗や土瓶、東北産擂鉢、平清水の染付皿など、幕末から明治初頭のものが含まれている。その他に、土師質土器の皿、軟質施釉陶器、硬質陶器、瓦の小破片などが出土しているが、特徴のわかるものはない。

6. 6A区の遺物（図42、図版30・31、表21・22・31・34・36・37・38・39・40・44～47・49）

この区では、盛土等、1層、1層下部と、他の区と共通した層序から遺物が出土している。また、石組溝に関連した層序から遺物が出土している。他の調査区と同様に、盛土等、1層からは、銅板転写、クロム青磁などの陶器、洋釘、針金などの金属製品など、近現代の遺物と共に、幕末から明治初頭や幕末より古い近世の陶磁器が出土している。他の区と比べて特徴的なことは、1層下部（2層）から、幕末から明治初頭の遺物が比較的まとまって出土していることである。また、「第IV章検出遺構」で記述した通り、石組溝埋土1層・埋土2層については、石組溝機能時以後の埋土であり、基本層1層下部（2層）に相当する。そのため、石組溝埋土1層・埋土2層からも幕末から明治初頭の遺物が出土している。これらと同時期の陶磁器は、過去の調査で、二の丸第2地点においてまとまって出土している（『年報』1）。

6A区1層下部（2層）、石組溝（U11区）埋土1層・埋土2層からは器形や文様などのわかる比較的大きな破片が出土しているため、幕末から明治初頭の陶磁器をまとめて掲載した（図42、図版30・31）。なお、6A区出土磁器CJ47は、1層からの出土であり、白磁に「池田」の文字が描かれたものである。近代以降の磁器で、陸軍関係で使われた湯飲みと考えられるため、幕末から明治初頭のまとまりからは除外される。

1層下部（2層）の磁器は、瀬戸、平清水、切込などの産地が中心である。平清水、切込の磁器は、見分けることが困難な場合も多く、観察表では断定する表現はしていない。碗は、小型、中型とも端反碗が中心である。CJ7は見込みに山形に武田菱文の皿で、平清水産と考えられる。CJ17は中型の端反碗で、同様の山形に武田菱文が見込みと外面にみられる。CJ11は、外面3カ所に福東文が展開する小型端反碗である。CJ16は、蝶文と源氏香文が展開し、見込みにも蝶文がみられる。源氏香文を持つ碗も多数出土した。CJ18は、文様を唐草文としたが、千鳥文、波文のような文様が無造作に描かれたものである。見込みにも文様があり、千鳥文としたが、これもだいぶ崩した描かれ方をしている。これらと類似した器形、文様の碗、皿が多数出土している。CJ10、CJ15は瀬戸の唐草文の皿である。同種の皿は、東京大学本郷構内の遺跡（本郷台遺跡群）医学部附属病院入院棟A地点（東京大学理蔵文化財調査室2016）で出土したSK1160の一括資料に含まれている。SK1160は、「東大編年Ⅷd期」に比定される一括資料である（東京大学理蔵文化財調査室1997）。およそ1850～1860年を中心とした年代で、幕末頃からみられる。この皿は、「東大編年Ⅷ期」（明治4・5年～明治11年を中心にした年代）にも継続して含まれている。今回の調査で、「幕末から明治初頭」と比定した年代観とおよそ一致する年代である。磁器の集計表では、CJ10、CJ15のような皿を「m」を付けて、他の皿と区別して集計している。なお、CJ10、CJ15のような唐草文は、これまでの仙台城跡の二の丸地区や武家屋敷地区の調査では、幕末期の遺物には含まれておらず、明治初頭以降に含まれると考えられていることから、CJ10、CJ15は明治初頭頃ととらえている。他にも瀬戸や平清水、切込を中心とした呉須染付の多様な文様の磁器が多数出土している。また、摺絵や銅板転写、クロム青磁など、明治初頭以降に確立されていく技法の磁器を基本的に含んでいない。基本的にとしたのは、6A区1層下部（2層）から、銅板転写の鉢1点、クロム青磁の小碗1点が出土しており（表22）、完全に含まれないわけではなかったからである。しかし、1層下部（2層）での幕末から明治初頭の磁器が784点出土している出土割合からすると、混入であると考えられる。

陶器の1層下部（2層）では、小中皿、土瓶、壺、瓶類、土鍋などの器種が多い。中でも土瓶が特に多く出土している。6A区からは完形に近い程度の大きさの土瓶も多数出土しており、土瓶の蓋の出土も多い（図版30・31）。いずれも幕末から明治初頭頃の土瓶であるが、CT7の勿来手やCT8の筒描文、CT9の青釉鉄絵山水文など、明治初頭頃を示す遺物も比較的含まれている。CT15は、体部下半の無釉部分に墨書きが認められる。東北大大学院文学研究科准教授籠橋俊光氏からご教示頂いたところによると、「用」「分」などの文字と判読される。他に、呉須絵唐草文の皿（CT12）もいくつか含まれている。

CT13は東西土層断面2b層からの出土で、肥前の鉄絵の描かれた皿である。幕末から明治初頭の層からの出土

ではなく、年代的にも17世紀後葉から18世紀前葉と江戸時代の遺物である。

他には、石組溝(U11区)埋土7から瓦質土器の火鉢(CG1)が出土している。火鉢の他にも炭櫃、蚊遣などが出土している。炭櫃は、接合してやや大型破片になるものもみられたが、完形のものはなかった。古銭(MC4)は、近現代の盛土等からの出土である。完形で残存状態のよいものであった。

6A区からは瓦当面のある瓦が多数出土しているが、いずれも江戸時代の層序からの出土ではないため、同化はせず、観察表のみの記載とした。軒丸瓦・軒丸瓦類は、九曜文、三引両文、三巴文が出土している(表46)。軒丸瓦は、瓦当面が無文のもののみであった。また、T39~41は、従来の抽出基準で法量を計測できる瓦であるため、法量を観察表にまとめている(表49)。T43は刻印のある瓦である。

7. 6B区の遺物(図37・43~46、図版32~35、表23・24・31・34・35・37~47・49)

6B区は、他の区に比べ、幕末以前の近世陶磁器が多く出土している。破片資料が中心で、接合するものは少ない。全体形状がわかるものもほんどのないが、17世紀代までさかのばる陶磁器が比較的多く含まれている。また、中国磁器や肥前磁器でも優品とみられる破片も多い。遺物の出土は、盛土等と1層からが多いが、ピットや1号溝からも出土している。遺構出土の遺物は、いずれも遺構を掘り下げたものではなく、検出面からの出土であるため、近現代の遺物も併せて出土する状態である。

磁器は、他の区と違い、近現代のものより、幕末から明治初頭や幕末以前のものが圧倒的に多い。中でも17~18世紀代にさかのばる磁器が多く出土する点で、他の区と大きな違いがみられる。また、幕末以前とした磁器には、中国磁器、肥前磁器の中でも優品の破片が含まれていることも6B区の特徴である。図43・44、図版32・33には、比較的残りがよく、文様などがわかるものを掲載したが、それでも破片資料が中心となっている。抽出した磁器以外にも多数の磁器破片が出土しているが、文様の一部がわかる程度の残存状況のものが多数である。

中国磁器は、CJ21、CJ25、CJ28、CJ29、CJ34、CJ35、CJ37、CJ42、CJ45である。CJ25は、見込みに孔雀文のある皿である。高台と高台内に砂が付着している。CJ28は、青磁で見込みに線刻文がみられ、高台内に粗い砂が付着している。釉調から肥前磁器ではないと考えた。CJ29は見込みに船上唐人文が描かれている。小中皿としたが、碗の可能性も考えられる。高台内には「大明成化年製」の文字がみられ、放射状の削り痕が観察される。また、釉には虫喰いがみられる。CJ34は、内面に菊花文が描かれており、口縁部がわずかに端反る器形をしている。口唇部に虫喰いの痕跡がみられる。CJ35は、見込みに唐草文の描かれた皿で、高台内に粗い砂が付着する。CJ37は内面に線刻による牡丹文?がみられる青磁皿である。CJ42は、漳州窯系の印判手の大皿である。これまでにも、二の丸地区第5地点(『年報』6)、武家屋敷地区第7地点(『年報』19)で出土例がみられる。高台内には粗い砂粒が多く付着している。CJ44は、外面青磁釉で、外面に半陽刻唐草文が描かれている。文様や釉の様子から、中国など外国産の青磁の可能性も考えられるが、产地は不明とした。中国磁器は、いずれも明末清初の年代で、17世紀前半のものと考えられる。景德鎮系、漳州窯系とともに含まれるとみられるが、小破片から判別することが難しい。

肥前磁器も破片が小さく、文様の一部しかわからないものが多い。CJ22は見込みに菊水文がみられ、高台内に「年」の文字がみられる。CJ23は、見込みに鳥文をもつ。抽出外資料に類似した破片がさらに1点出土している。CJ24は見込み鶴散らし文、七宝・青海波文、外面に木の葉文、高台内に「福?」の銘が確認される。底部の器厚がやや厚手であるが、丁寧な文様が描かれている。CJ26は、見込みに色紙重ね桐文が描かれている。CJ27は見込みに山水文が描かれており、高台内の釉が一部途切れで掛かっている。CJ30は、小破片であるが芙蓉手の皿である。CJ31も小破片であるが、墨彈で文様が描かれた皿である。CJ32は青磁の大皿で、線刻による波状文が描かれている。釉調から肥前の可能性を考えた。CJ33は吹墨技法による梅枝文が描かれている。CJ36は、芙蓉手の大皿である。呉須の様子から肥前の可能性を考えている。CJ39は吹墨による皿であるが、文様部分は

不明である。CJ40は見込みに山水文がみられる皿である。高台径が比較的小さい。CJ41は内面に撫子文、外面に梅花唐草文の皿である。小破片であるが、非常に緻密な文様が描かれている。CJ43は、見込み椿四方襷文の皿で、これも非常に緻密な文様が描かれている。

6B区の陶器は、磁器に比べてそれほど出土量は多くない。さらに、磁器と異なり、17~18世紀代の近世陶器はあまり多くない。甕、擂鉢、土鍋など、陶器自体から年代を特定しにくいものも含まれているが、碗や皿など比較的年代の絞りやすい器種でも、17~18世紀代の陶器は少ない。幕末から明治初頭や近現代の陶器が主体である。幕末から明治初頭の陶器は、6A区出土のものと基本的に同じ様相であるため、6B区からは図化していない。CT16~18(図44、国版33)は、17~18世紀代と考えられる陶器を抽出して掲載している。CT16は、産地、年代ともに不明の擂鉢である。口縁部外面に段のない形態をしている。17世紀前半代などの瓦質土器の擂鉢には、口縁部外面に段のない形態がみられ、類似している点もみられる。しかし、瓦質土器の擂鉢は器目が密でない場合が多く、異なる特徴もあり、詳細は不明である。CT17は、無釉の焼締め陶器で、口縁部外面の形態などの特徴から、壺産の可能性が考えられる擂鉢である。CT18は、京・信楽の中型丸碗である。色絵の一部分が残存している。詳細な年代は不明であるが、CT17、CT18は18世紀代と推測される。

土師質土器の皿は、比較的完形に近い形で出土するもの多かった。土師質土器の皿については、従来からの基準に従って、口縁もしくは底部外周の6分の1以上が残存し、なおかつ器高が判明するもの、すなわち口縁端部から底部までが残っており、口径、底径の復元および器高の計測ができるものを抽出し、諸属性の観察を行った。上記の基準で抽出した土師質土器の皿は30点である(表43)。個々の皿の特徴には、あまり差はなかったことから、そのうち4点を抽出し、図化した(図45~CH6、11、13、30、国版33)。6B区出土の土師質土器の皿は、製作時の調整痕が新鮮な状態で観察され、使用によって擦れたような様子のないもの多かった。そのため、未使用の皿である可能性も考えられる。絵図との対比では(図50)、6B区は「御上大所」に近い調査区であり、未使用の土師質土器が出土することも可能性の一つとして考えられる。二の丸の「御上大所」に近いことは、優品の磁器が多く出土する理由であろうと推測される。

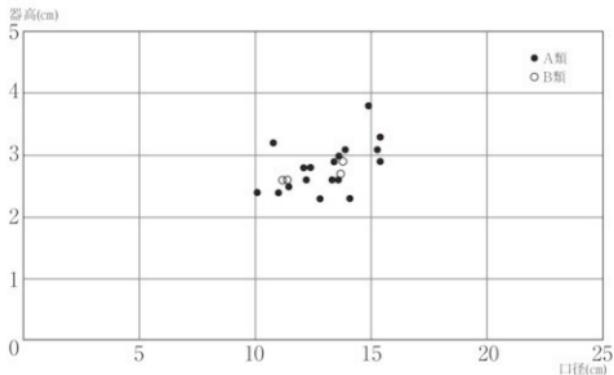


図37 二の丸第18地点6B区出土土師質土器(皿)の法量分布図

Fig.37 Scatter diagrams of size of ceramic dishes from NM18

図37は、土師質土器の皿の口径と器高の法量分布図である。口径約10~15.5cm、器高約2~3.5cm程度にまとまる大きさが中心であった。小型の皿、大型の皿は、今回の資料では確認されなかつた。器面をミガキ調整するものが4点含まれていた。土師質土器の皿の全体量と比べても、ミガキ調整の皿はそれほど大きな比率を占めるものではなく、若干含まれる程度である。CH2、CH18は器面にタール状の付着物が観察され、灯明皿として再利用されたものと考えられる。

CH38~40は、土師質土器の焼塙壺である（図45、図版34、表41）。CH38は、外面に刻印が観察される。一部分のみの残存ではあるが、図45の拓本からは「坂」と判読される。一部分のみのため、断定はできないが、畿内系焼塙壺の「浜州大阪」の焼塙壺の可能性が考えられる。過去の調査では、「泉州麻生」の刻印を持つ畿内系焼塙壺は出土しているが（『年報』19-2）、「浜州大阪」の可能性のある焼塙壺が出土したのは今回が初めてである。CH39は、器形からやや古手の17世紀代の焼塙壺の可能性が考えられるが、底部のみの残存であり、詳しいことは不明である。CH40は、「泉州麻生」の刻印がみられる畿内系の焼塙壺である。板作りで、内面には布目压痕が観察される。

CH31~36は、墨書のある土師質土器の皿である（表42）。墨書は、東北大学大学院文学研究科准教授龍橋俊光氏に判読して頂いた。CH31は、内面に二文字残存しているが、上の文字は一部のみのため不明である。下の文字は、「徳」もしくは、「値」の可能性が考えられる。CH32は、内外面にいくつかの墨書がみられ、また、文字が重なって書かれていることから、習書したものと考えられる。内面は「閑」の習書、「馬」へんの習書の可能性が考えられる。外面には「寺」もしくは「守」のつくりの一部、「印」のつくりの一部の可能性がある墨書がみられる。CH33は内外面に墨書が確認できるが、破片が小さいため判読できなかつた。CH34は、内外面に墨書がある。内面は、二文字ある。上の文字は「山」であるが、下の文字は「草かんむり」まで判読できたが、文字全体はわからなかつた。CH35は、内面に「童子」という墨書がみられる。CH36は、外面に墨書が見られる。文字全体はわからない状態であるが、「寿」の一部の可能性が考えられる。

6B区からは古錢も比較的多く出土している。すべて、盛土等と1層からの出土で、本来の層序に伴つた出土ではない。古寛永5点、新寛永3点、文銭5点の出土である。それぞれの特徴は観察表にまとめている（表44）。

W1（図46、図版35）の木簡は、盛土等からの出土のため、近世のものか近現代以降のものかは、層序からはわからない。比較的木目の整った木簡が用いられている。長方形の形をしており、孔が1つ穿たれている。一面には、「荷」の文字が、片面には「右内」と判読される文字がみられる。荷札木簡と考えられるが、「右内」が人名や地名などの意味なのかはわからなかつた。

瓦は、軒丸瓦、軒丸瓦類、軒平瓦類、軒桟瓦、熨斗瓦の特徴を表46~49に示している。いずれも盛土等、1層、木製構造からの出土で、近現代の層序に伴つた出土である。軒丸瓦、軒丸瓦類は三巴文、九曜文、三引両文と近世の瓦が出土している。軒平瓦類はやや多く出土している。木構埋土出土の軒平瓦類では、三枚笠2a類を中心飾りが唐草1a類のものが多い。

8. 7A区の遺物（図版36、表25・26・31・35・37・38・40・48）

この区では盛土等と2層を除去したが、遺物の出土は盛土等が中心であった。遺物の出土量はあまり多くない。盛土等なので、近代以降の遺物が主体であるが、幕末から明治初頭や幕末前に遡る近世の陶磁器が、破片資料であるが出土している。

磁器（表25・26）では、図化する遺物はない。銅版転写の磁器とともに、碗や猪口、婧唐草文の大皿など、18世紀代などの近世の遺物が破片ではあるが含まれている。出土量は全体に多くはない。

陶器（表31）では、大堀相馬の碗、土瓶、瀬戸・美濃の水鉢などのほか、土鍋、擂鉢などの東北産の陶器がみられる。詳しい年代までわかる陶器はほとんど含まれていない。その中で、CTI9は、ごく小さい破片であるが、

鼠志野の菊皿である。盛土等からの出土であり、本来の層序に伴うものではない。17世紀初頭まで遡る遺物のため、写真を掲載した（図版36）。CT20（図版36）は、1号遺構検出面からの出土である。1号遺構は盛土等を除去後に検出したが、検出面からの遺物であるため、1号遺構の年代を直接示す遺物ではない。大堀相馬の中型丸碗で、青釉が流し掛けされている。幕末から明治初頭頃のものと考えられる。

瓦（表35）は、三引両文、連珠三巴文の軒丸瓦類など、文様がわかるものが3点出土している。土師質土器（表37）は皿の破片が中心であるが、さなが盛土等から1点出土している。

9. 7B区の遺物（図38・47・48、図版36・37、表10・27・28・31・35・37～39）

この区では近現代の盛土等の層序をはずして、遺構確認を行った。盛土等は、硬質陶器や壺子など近現代の遺物が含まれる層序である。

磁器（表27・28）では、盛土等からは近現代のものが多いが、幕末から明治初頭頃の磁器や、幕末より遡る磁器も比較的多く含まれている。下層にある近世の層序から遺物が巻き込まれていると考えられる。CJ46（図47、図版36）は、3a・3b層検出面から出土した肥前磁器である。見込みに柏文、外面に折れ松葉文が描かれている。文様から17世紀後半から18世紀前葉ごとと考えられる。他にも「くらわんか手」の碗や皿、見込五弁花文の猪口など、18世紀代と考えられる磁器が含まれている。

陶器（表31）でも、近現代の遺物と共に伴して、大堀相馬の灰釉碗、灰釉皿、掛け分け碗、京・信楽の色絵碗など、18世紀～19世紀前葉頃と考えられる陶器が比較的多く含まれている。年代は判明しないが、壺や擂鉢などの東北産と考えられる陶器もやや多く含まれている。

土師質土器（表37）は、盛土等と3号遺構から皿の破片を中心に出土している。完形に近い大きな破片はほばなく、小破片でほとんど接合しないものばかりであった。また、耳皿が盛土等から3点、3号遺構から1点出土している。瓦質土器（表37）では、多少大きな破片はあっても、接合して器形が判明するような遺物は出土していない。火鉢の破片の他、さな、蚊遣、炭櫃などがみられるが、いずれも一部分のみの破片資料であった。瓦（表35）は、盛土等から三引両文の軒丸瓦が2点出土している。2点とも瓦当面のみが残存しているが、比較的大きい破片であった。他の瓦は、小破片がほとんどであるが、大きな破片であっても器形が判明するものはなかった。土製品（表37）では、盛土等から猿とと考えられる破片が1点出土している。胴部のみの破片で、背中には筋状に毛を表現した痕跡がみられる。頭や手足部分は剥落した痕跡が残る。

7B区の盛土等を掘削中に師団期の境界石3点を回収した（図38・48、図版37、表10）。何かの遺構等があつたわけではなく、擾乱土層の中にあったものである。米軍あるいは大学造成時に、共に整地されたものと考えられる。このような陸軍境界石については、本学敷地内に樹立した状態で存在していることがすでに紹介されている（福垣森太2011）。

これらの資料は、いずれも粘板岩製である。石材については、東北大大学院文学研究科准教授鹿又喜隆氏にご教示頂いた。S2は上半部が欠損していた。遺存状態の比較的良好S3に関しては写真にて細部を示し（図38）、同様にS4は図面にて加工状況を示した（図48）。これらの3点に認められる加工痕跡は同じである。

S3は、最大長117.1cm、最大幅18.5cm、最大厚15.0cmであり、角柱部分のサイズは13.3cm×13.3cmとなる。重さは60.9kgである。地中に埋められる下部は、横方向から大きく荒削をされているのみである。上部に関しては、荒削後に盤により横方向から整形（図38③）したものと推定される。文字を入れる前面部は、さらに敲打により平滑にし、研磨をする。その重複する痕跡が、上部と下部の境付近に認められる（図38②）。前面部には、「陸軍省用地」の文字が盤により刻まれる。この文字は、始筆部分や跳ねや払い等の終筆部分も丁寧に表現されている（図38④）。頭頂部は、四角錐状に整形し、角部に沈線を刻む（図38①）。この頭頂部は、研磨がなされずに、敲打の痕跡のみが残る。

S2は、残存長101.0cm、最大幅21.0cm、最大厚15.0cmであり、角柱部分のサイズは12.8cm×12.3cmとなる。重さは41.0kgである。S4は、最大長111.7cm、最大幅19.2cm、最大厚16.8cmであり、角柱部分のサイズは13.0cm×13.0cmとなる。重さは55.6kgである。この2点も、S3と同様に手順で加工されたものと考えられる。ただし、この3点では文字のサイズや間隔はほぼ同じではあるが、筆使いがそれぞれ異なる。このことから、事前に文字の位置を決める何らかの目安があり、その目安の中でそれぞれ文字を刻んだ可能性がある。この目安の痕跡が、表面に残っていないか観察したが認められなかった。

表10 二の丸第18地点出土境界石観察表
Tab.10 Notes on border stone from NM18

登録番号	区	出土場所	法量	重さkg	特徴	図	図版
S2	7B	盛土等・1層	残存長101.0cm 最大幅21.0cm 最大厚15.0cm 角柱部分12.8cm×12.3cm	41.0	粘板岩製 上半部は角柱状 印刷文字「省用地」 上端は欠損 文字のない面は加工痕が残る	48	37
S3	7B	盛土等・1層	最大長117.1cm 最大幅18.5cm 最大厚15.0cm 角柱部分13.3cm×13.3cm	60.9	粘板岩製 頭頂部四角錐 上半部は角柱状 印刷文字「陸軍省用地」	48	37
S4	7B	盛土等・1層	最大長111.7cm 最大幅19.2cm 最大厚16.8cm 角柱部分13.0cm×13.0cm	55.6	粘板岩製 頭頂部四角錐 上半部は角柱状 印刷文字「陸軍省用地」	48	37



①上面



②表面



③側面



④文字

図38 陸軍省境界石(S3)の加工状況
Fig.38 The process of the border stone (S3) of the army



図39 二の丸第18地点（1・1B区）出土遺物
PL39 Various implements from NM18 (Area 1・1B)



図40 二の丸第18地点（2・2B区）出土遺物
PL40 Various implements from NM18 (Area 2・2B)

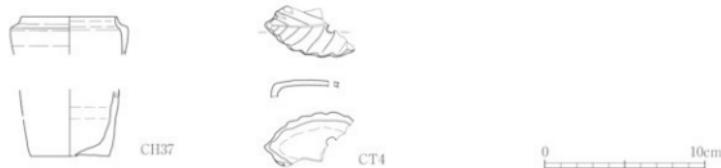


図41 二の丸第18地点（3区）出土遺物
PL41 Various implements from NM18 (Area 3)

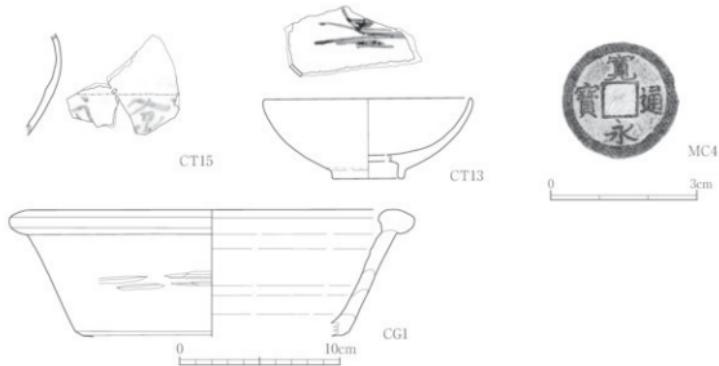


図42 二の丸第18地点（6A区）出土遺物
PL42 Various implements from NM18 (Area 6A)

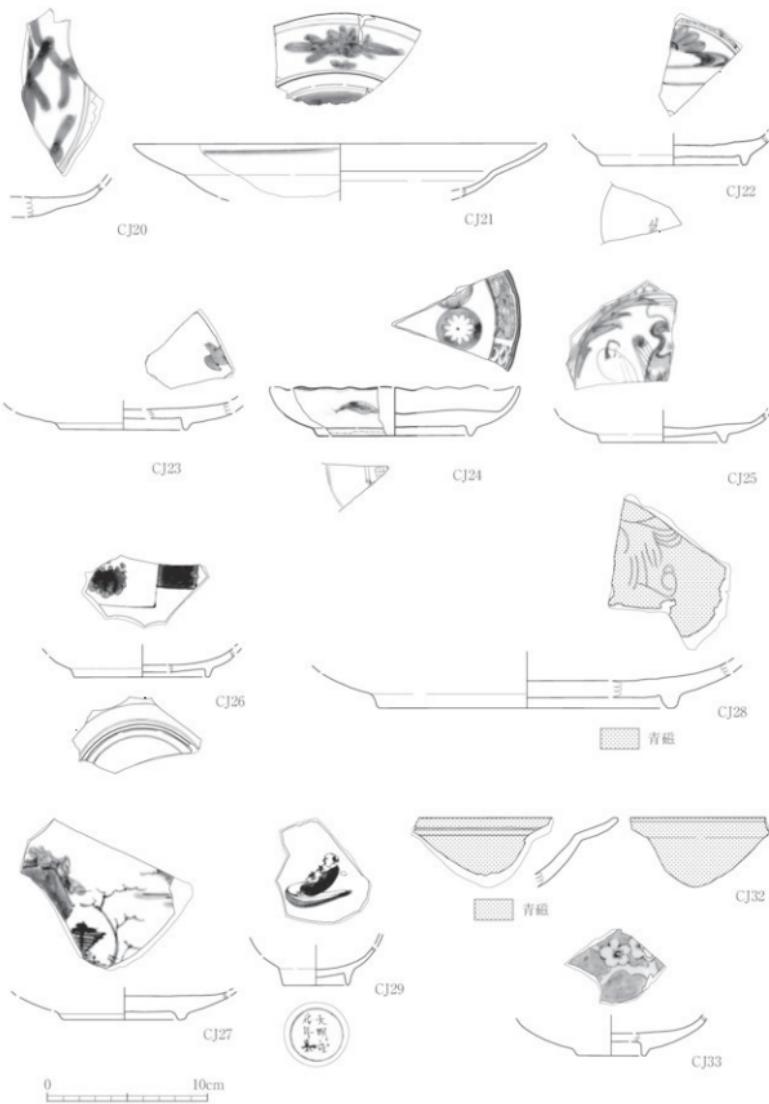


図 43 二の丸第 18 地点 (6B 区) 出土遺物 (1)
PL43 Various implements from NM18 (Area 6B)

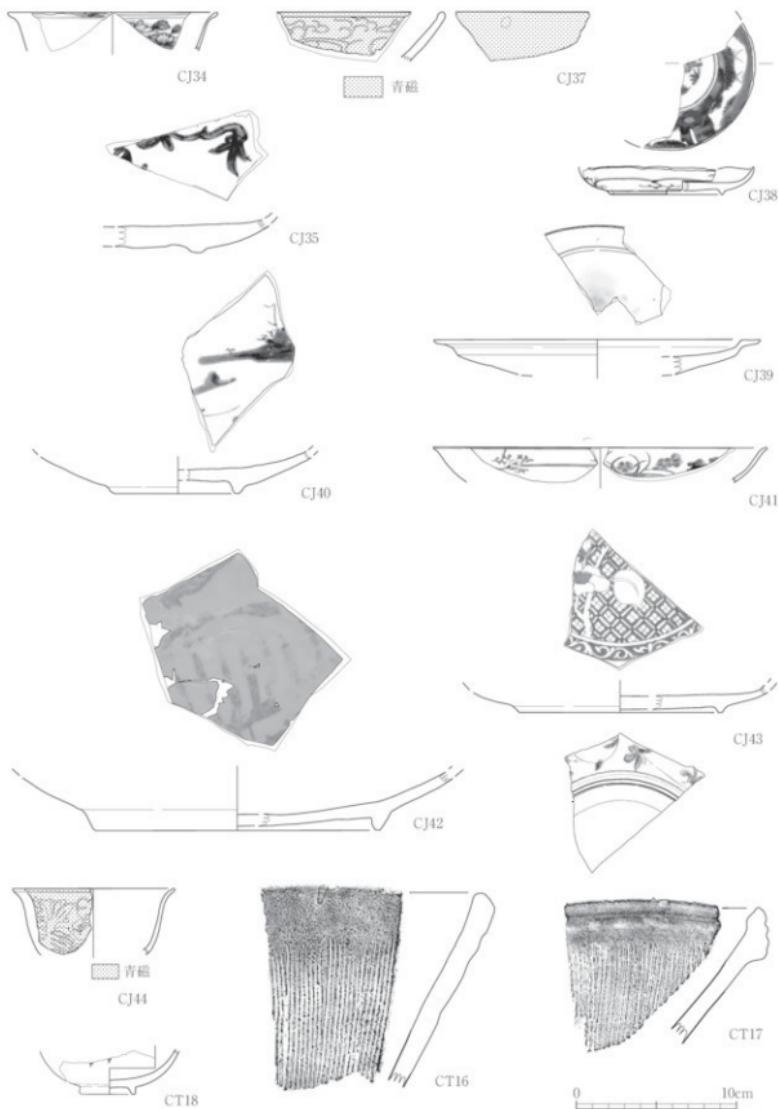


図44 二の丸第18地点(6B区)出土遺物(2)
Pl44 Various implements from NM18 (Area 6B)

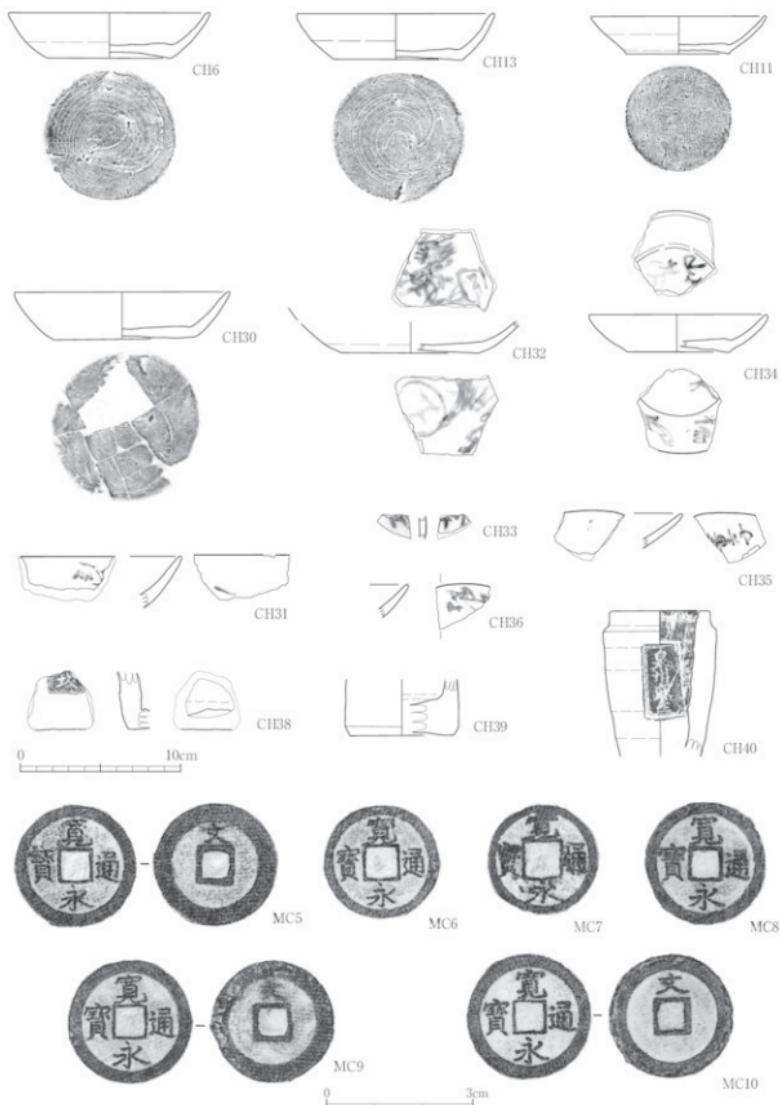


図45 二の丸第18地点(6B区)出土遺物(3)
PL45 Various implements from NM18 (Area 6B)

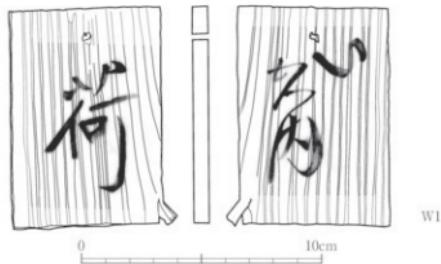
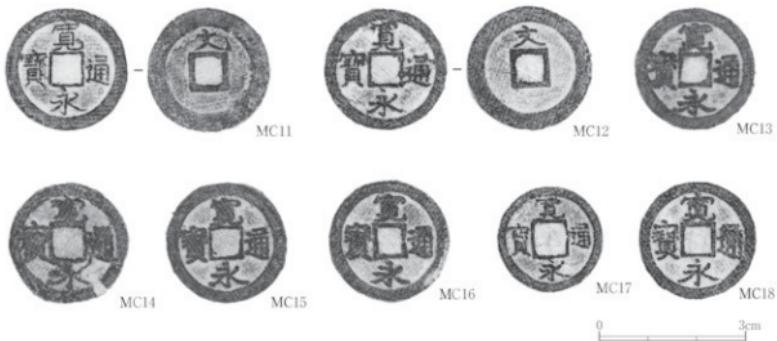


図46 二の丸第18地点（6B区）出土遺物（4）
Pl.46 Various implements from NM18 (Area 6B)

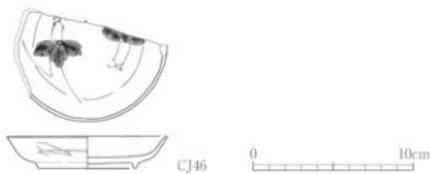


図47 二の丸第18地点（7B区）出土遺物
Pl.47 Various implements from NM18 (Area 7B)

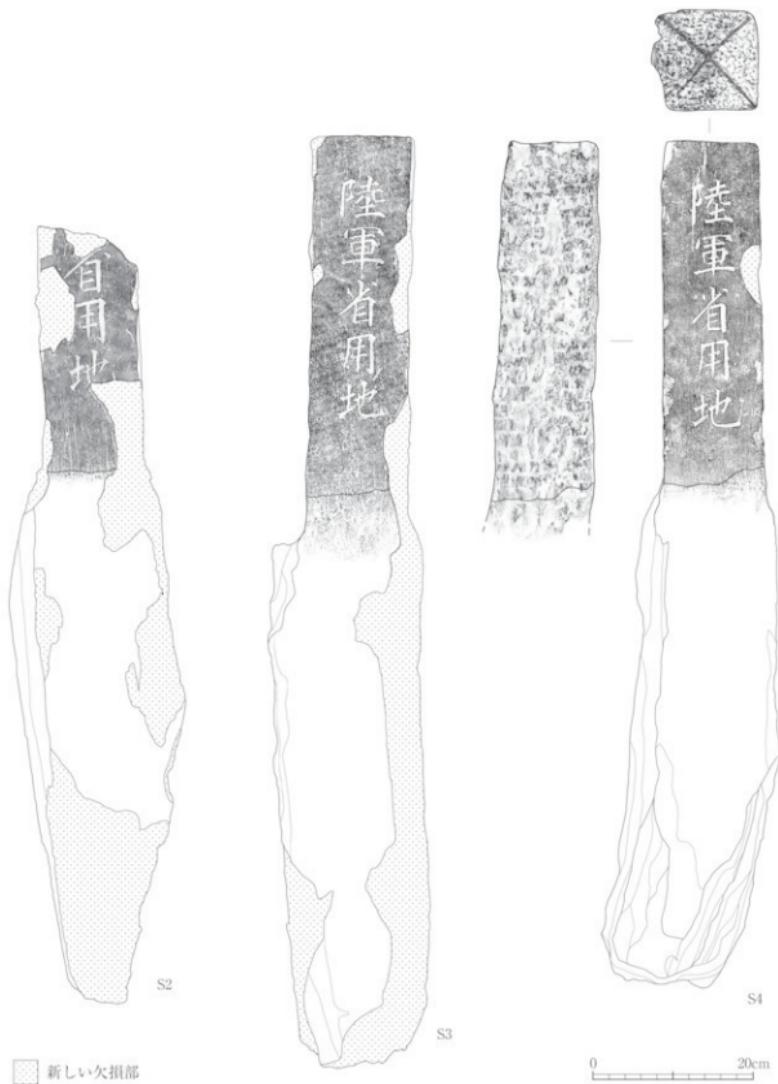


図48 二の丸第18地点(7B区)出土遺物
PL48 Various implements from NM18 (Area 7B)

表11 二の丸第18地点出土磁器集計表（1・1B区 近世）
Tab.11 Distribution of porcelains belong to Edo period from NM18 (Area 1・1B)

1・ 1B区 近世	出土場所	中碗				小碗				碗 不明	皿			鉢			碗 鉢 皿 不明	瓶 類	袋物 不明	その他	不明	合計			
		丸	端 反	筒	蓋	不明	小 碗	端 反	不 明		大	小 中	小 中	その 他											
幕末以前	盛土等	1									1	1											4		
	1層	1										3											4		
幕末～ 明治初頭	盛土等	3	28	5	5	1	9 白4	4	118	4	m10 120	片口 鉢1	18	3	3								23	367	
	1層	3	8	1	1	16	1	1	132		型6 m3 128		1	3	7								182	506	
	1層下部										2	4											5	12	
	暗渠掘方埋土	1									1 8	2											1	13	
	抜取跡1										1												1	2	
	抜取跡6										1													1	
	抜取跡8										1													1	
	抜取跡12										1													4	
	抜取跡13										1													3	
	抜取跡14										1	型1												3	
	抜取跡15	1																						1	2
	抜取跡16										1	3												4	8
	抜取跡17																							1	1
	抜取跡30																							1	1
	合計	8	38	1	6	21	2	13	6	266	5	285		1	20	7	10						2222	933	

表12 二の丸第18地点出土磁器集計表（1・1B区 近現代）
Tab.12 Distribution of porcelains belong to the modern era from NM18 (Area 1・1B)

1・ 1B区 近現代	種類	中 碗	小 碗	碗 不明	皿				鉢			碗 鉢 皿 不明	瓶 類	袋物 不明	広口瓶			小 杯	その他	不明	合計	
					大	小 中	小 中	その 他							A	B	不明					
盛土等	手書き		3	15	2				1	1	1				3			急須蓋1		13	39	
	白磁			2								5	1	1	1						5	15
	クロム青磁	1																				1
	摺繪		2																			3
1層	手書き		1	1	2				片口1		2								蓋物1		1	9
	摺繪		1		1														蓋物1		3	
	色繪		2																			2
	銅板転写		1								1											3
	型打ち					5																6
	白磁		2	2						4	6	1										23
	合計	1	5	27	1	10			1	1	8	11	2	1	4				3		47	122

表13 二の丸第18地点出土磁器集計表（2・2B区 近世）
Tab.13 Distribution of porcelains belong to Edo period from NM18 (Area 2・2B)

2・ 2B区 近世	出土場所	中碗				小碗				碗 不明	皿			鉢			碗 鉢 皿 不明	瓶 類	袋物 不明	その他	不明	合計	
		丸	端 反	筒	蓋	不明	小 碗	端 反	不 明		大	小 中	小 中	その 他	A	B	不明						
幕末以前	9号遺構埋土								1													1	
幕末～ 明治初頭	盛土等	1	6				6	4		30	型1 m6 23				8				猪11		25	111	
	1層		1							41	型1 m18 7				9				蓋物1		19	97	
	1層下部		11				7			59	18 m16				11	1			合子1、水滴1、 合子蓋1、猪12、 蓋物、蓋1		35	165	
	3層検出面									3												4	
	1号遺構方 検出面								1													1	
	2号遺構方 検出面								1													2	
	合計	1	18				13	5	1	134		90				28	1			8		82	381

表14 二の丸第18地点出土磁器集計表 (2・2B区 近現代)
Tab.14 Distribution of porcelains belong to the morden era from NM18 (Area 2・2B)

2・2B区 近現代	種類	中 碗	中 碗 蓋	小 碗	碗 不明	皿		鉢		碗 鉢 不明	瓶 瓶類	袋 袋物 不明	広口瓶			小 环	その 他の 不明	合 計
						大	小	中	小				A	B	不明			
盛土等	手書き	5			15	7	2	9		1			5	4	3	11	蓋物・蓋1 合子1, 瓢子3, 合子1	11 40
	白磁				6	1		1									1	9
	押絵				3												3	
	型打ち				1											1	3	
	銅板転写																1	
1層	白磁	1											2	2	9			14
	手書き	11	5			1		1								ガト4, 金頭1, 金頭1	2 23	
	クロム青磁	1			2												1 2	
	型打ち	1			2		1										4	
	銅板転写	1	9	2		1										4 17		
1層下部	押絵	1														蓋物1		
	手書き	7		31	1												5 39	
	1号清漆出面 手書き	13	1	78	21	5	13	1	6	6	5	20	1			2 10		
合計		13	1	78	21	5	13	1	6	6	5	20	1			34 214		

表15 二の丸第18地点出土磁器集計表 (3区 近世)
Tab.15 Distribution of porcelains belong to Edo period from NM18 (Area 3)

3区 近世	出土場所	中 碗		小 碗		皿		鉢		瓶 瓶類	袋 袋物 不明	広口瓶			小 环	その 他の 不明	合 計
		丸	逆 反	筒	蓋	不明	小 碗	端 不明	大	中	小 中	小 中	A	B	不明		
幕末～ 明治初頭	盛土等	4					1			m1							8 14
	1層									1							3 5
	1層下部	1							3								7 11
合計		5					1	3	2							1	18 30

表16 二の丸第18地点出土磁器集計表 (3区 近現代)
Tab.13 Distribution of porcelains belong to the morden era from NM18 (Area 3)

3区 近現代	種類	中 碗	中 碗 蓋	小 碗	碗 不明	皿		鉢		瓶 瓶類	袋 袋物 不明	広口瓶			小 环	その 他の 不明	合 計
						丸	逆 反	筒	蓋			A	B	不明			
盛土等	手書き				1												1 2
	白磁																9
	銅板転写								1								1
	型打			1													1
1層下部	手書き		2						蓋1								8 11
	銅板転写	1			3												5
	白磁																111
	押絵	5	1														1
																	7
合計		1	8	3	4	1				1	18	33	17	44			2 15 147

表17 二の丸第18地点出土磁器集計表 (4区 近世)
Tab.17 Distribution of porcelains belong to Edo period from NM18 (Area 4)

4区 近世	出土場所	中 碗		小 碗		皿		鉢		瓶 瓶類	袋 袋物 不明	広口瓶			小 环	その 他の 不明	合 計
		丸	逆 反	筒	蓋	不明	小 碗	端 不明	大	中	小 中	小 中	A	B	不明		
幕末～ 明治初頭	盛土等	1					1		1	1							3
	合計	1					1		1	1							3

表18 二の丸第18地点出土磁器集計表 (4区 近現代)
Tab.18 Distribution of porcelains belong to the morden era from NM18 (Area 4)

4区 近現代	種類	中 碗	中 碗 蓋	小 碗	碗 不明	皿		鉢		瓶 瓶類	袋 袋物 不明	広口瓶			小 环	その 他の 不明	合 計
						丸	逆 反	筒	蓋			A	B	不明			
盛土等	手書き				1					4							1
	白磁																7
	型打				1												1
	押絵		1		1												2
	銅板転写	1	1	2	4					4							8
合計		1	1	2	4					4							2 19

表19 二の丸第18地点出土磁器集計表（5区 近世）
Tab.19 Distribution of porcelains belong to Edo period from NM18 (Area 5)

5区 近世	出土場所	中碗				小碗				皿		鉢			瓶 鉢 皿 不明		袋物 不明		その他		不明	合計	
		丸	端反	筒	蓋	不明	小碗	端反	不明	大	水 中	小 中	その他	瓶類	袋物 不明	その他	不明	その他					
幕末～ 明治初頭	盛土等					4				8	m3	5			4	1	2					27	
	1層下部									5		1									2	8	
	合計					4				13		9			4	1	2					2	35

表20 二の丸第18地点出土磁器集計表（5区 近現代）
Tab.20 Distribution of porcelains belong to the morden era from NM18 (Area 5)

5区 近現代	種類	中碗				小碗				皿		鉢			瓶 鉢 皿 不明		袋物 不明		広口瓶		不明	合計	
		丸	中 碗 蓋	筒	小 碗	碗 不明	大	小 中	小 中	その 他	大	水 中	小 中	その 他	瓶類	袋物 不明	湯 飲み	A	B	不明	小 环	その他	
盛土等	手書き	1							1													1	3
	白磁								1													2	3
	クロム青磁									1													1
	摺繪	5	1																			6	
	色釉																					1	1
	銅板転写																						2
1層下部	白磁																					1	1
	摺繪	1		1																		2	
	合計	7	1	1	1	1	1	1	1													5	19

表21 二の丸第18地点出土磁器集計表（6A区 近世）
Tab.21 Distribution of porcelains belong to Edo period from NM18 (Area 6A)

6A区 近世	出土場所	中碗				小碗				皿		鉢			瓶 鉢 皿 不明		袋物 不明		その他		不明	合計		
		丸	端反	筒	蓋	不明	小碗	端反	不明	碗 不明	大	水 中	小 中	小 中	その他	瓶類	袋物 不明	湯 飲み	A	B	不明	小 环	その他	
幕末以前	盛土等	1		6						2	15												24	
	1層																					1	1	
	1層下部 (2層)									1												1		
幕末～ 明治初頭	盛土等	27		45	2	40	5	229		m33 m33 59			11	3	5	猪口2						464		
	1層	3	12		14	4	8	5	58		m1 m5 8		4	1	1							33	157	
	1層下部 (2層)			96	1	45	1	31	7	210		m66 94		105	13	1	猪口11、 蓋1						93	784
	石組講 (U11)(K) 埋土1	1	1			2	1	3	6		m1 5											1	22	
	石組講 (U11)(K) 埋土2		15		廣東2	6	6	3	16		m6 16			3		水滴1						15	90	
	石組講 (U11)(K) 埋土4層										m1												1	
	石組講 (U11)(K) 埋土11層					2		3	1	m1												7		
	石組講 (T13)(K) 埋土6									2												2		
	石組講 (T13)(K) 埋土7								2	m1 5												8		
	石組講 (T13)(K) 埋土8							1														1		
	東西土刷界面 2b層								1													1		
	石組講掘方 検出面								1													1		
	木桶理土					1		2	3		3					1						1	11	
	合計	4	152	1	119	9	90	24	529	3	343			120	20	8		5			148	1575		

表22 二の丸第18地点出土磁器集計表 (6A区 近現代)
Tab.22 Distribution of porcelains belong to the modern era from NM18 (Area 6A)

6A区 近現代	種類	中 碗		小 碗		皿		鉢		碗 鉢 盤 不明		瓶 類		袋 物 不明		広口瓶			小 壺		その 他		不 明		合 計
		中 碗	中 碗 蓋	小 碗	小 碗 蓋	皿 大	皿 小	鉢 大	鉢 中	鉢 小	鉢 中	碗 鉢 盤 不明	瓶 類	袋 物 不明	湯 飲み	A	B	不 明	小 壺	その 他	不 明	不 明	不 明		
盛土等	手書き	2		1	5			6	1		13	1	1						4		合子1、火入1、 委物1		12	49	
	白磁			1				1				3		30	5		9				合子7、戸車1、 長持2、合子1	7	67		
	クロム青磁				1								1	1							香炉1	5	9		
	捲絵				3	4								1						合子1、蓋物1	2	11			
	色釉				1									1						署留1	7	10			
	型打							12															12		
1層	銅板転写	2		3	1			1	1														7	15	
	手書き	3		2	6			4						1	2				2	急須1、樊1、急 須蓋1、合子蓋1	1	25			
	クロム青磁										3												3		
	捲絵	4	1			1				1										猪口13、荷子6、 急須3、合子1	4	57			
	色釉				18							1		10	1								3		
	銅板転写		1					1					1										4		
1層下部(2層)	色釉							4															1		
	銅板転写							1															1		
石綿溝(T13区) 理土7	手書き				1																		1		
	クロム青磁																								
	石綿溝(U11区) 理土2																						1		
合計		11	1	9	37			32	4		17	5	4	44	6				9	6	45		50	280	

表23 二の丸第18地点出土磁器集計表 (6B区 近世)
Tab.23 Distribution of porcelains belong to the Edo period from NM18 (Area 6B)

6B区 近世	出土場所	中 碗		小 碗		皿		鉢		碗 鉢 盤 不明		瓶 類		袋 物 不明		その 他			不 明		合 計			
		丸	通 反	筒	蓋	不 明	小 碗	通 反	不 明	皿 大	皿 中	皿 小	皿 中	鉢 大	鉢 中	鉢 小	鉢 中	碗 鉢 盤 不明	瓶 類	袋 物 不明	その 他	不 明		
幕末以前	盛土等	6	14		13		2			3	5	162						2		猪口17、蓋物1、 委物1	1	217		
	1層		3						2	1	56									水滴1		63		
	1層下部 (2~31層)								5														5	
	1層下部 (20層)				1																		1	
	ピット1棱出面	3		10			3	1	36								1						54	
	ピット18棱出面									3													3	
幕末~ 明治初頭	ピット14面上								2														2	
	8号遺構土1								2											猪口11		3		
	1号溝理土3								1											猪口12		3		
	1号溝理土1								1											猪口11		2		
	盛土等	28	112	1	1	36	7	16	6	144	型6 m79 203				1	7	2			蓋物4 合子蓋1 委物1 紅皿1	172	828		
	1層	7	28					8		74	型1 m5 61				5	1	1			合子1 猪口11 委物蓋1	85	279		
幕末~ 明治初頭	1層下部 (2~31層)	2		12		2		5	1							15	1						1	9
	ピット18																						23	61
	ピット14溝土1																						1	1
	1号溝理土1								1							1				小坪1		3		
	木製樹	4						1		3	m10 1						1					2	22	
合計		41	167	1	2	71	7	30	6	240	7	637				22	12	4		25		285	1557	

表24 二の丸第18地点出土磁器集計表 (6B区 近現代)
Tab.24 Distribution of porcelains belong to the morden era from NM18 (Area 6B)

6B区 近現代	種類	中碗		小碗		皿		鉢		御鉢皿不明		瓶		袋物不明		湯飲み		広口瓶		小壺		その他		合計		
		中 碗	蓋	小 碗	無 明	大	小 碗	中 小	鉢	大	小 中	中 小	鉢	無 明	瓶	類	袋 物	不 明	A	B	不 明	4	その 他	21	47	
盛土等	手書き	8		11		3													17	1	4	1	鶴子1	1	32	
	白磁			3		3																		2	14	
	銅板転写			4		7																		1	3	
1層	手書き			2																				1	1	
不明	手書き																							1	1	
	合計	8		20		13													1	17	1	4	5	1	26	97

表25 二の丸第18地点出土磁器集計表 (7A区 近世)
Tab.25 Distribution of porcelains belong to the Edo period from NM18 (Area 7A)

7A区 近世	出土場所	中碗				小碗				皿		鉢		御鉢皿不明		瓶		袋物不明		湯飲み		その他の		不明		合計		
		丸	通 反	筒	蓋	不明	小 碗	通 反	不明	皿	大	小 中	小 中	鉢	無 明	瓶	類	袋 物	不 明	A	B	不 明	3	その 他	21	47		
幕末以前	盛土等	7	2							腰折 12				3	1	5								3	腰口1、蓋物5	39		
幕末～明治初頭	盛土等	1	3				2	1			20		5						1	1				1	蓋物1	35		
	合計	8	5				14	1			23	1	10											4	1	7	74	

表26 二の丸第18地点出土磁器集計表 (7A区 近現代)
Tab.26 Distribution of porcelains belong to the morden era from NM18 (Area 7A)

7A区 近現代	種類	中碗				小碗				皿		鉢		御鉢皿不明		瓶		袋物不明		湯飲み		その他の		不明		合計	
		中 碗	中 碗 蓋	小 碗	無 明	大	小 碗	中 小	鉢	大	小 中	小 中	鉢	無 明	瓶	類	袋 物	不 明	A	B	不 明	3	その 他	21	47		
1層	手書き	1		7	4		9																		22	43	
	白磁			2																					4		
	摺松	1		1	4		3																		9		
	銅板転写			1																					1		
	合計	2		10	9		12																	2	22	57	

表27 二の丸第18地点出土磁器集計表 (7B区 近世)
Tab.27 Distribution of porcelains belong to the Edo period from NM18 (Area 7B)

7B区 近世	出土場所	中碗				小碗				皿		鉢		御鉢皿不明		瓶		袋物不明		湯飲み		その他の		不明		合計	
		中 碗	中 碗 蓋	小 碗	無 明	大	小 碗	中 小	鉢	大	小 中	小 中	鉢	無 明	瓶	類	袋 物	不 明	A	B	不 明	2	その 他	21	47		
幕末以前	盛土等・1層	28		1	1	広東 1				13	1	10											水注1 蓋物1 火入・香炉1 御神酒德利2 猪口1	63			
	3号造機埋土	2																						2			
	3a・3b樹根出面									1														1			
幕末～明治初頭	盛土等・1層	1	9		4		7	10	1	33	15												合子蓋1 段束1 蓋物4 猪口17 瓶類1 蓋物1	11	108		
	盛土等																								2		
	3号造機埋土	1																							3		
	合計	31	10	1	5	1	7	10	1	46	2	30											2	1	21	11	179

表28 二の丸第18地点出土磁器集計表（7B区 近現代）
 Tab.28 Distribution of porcelains belong to the morden era from NM18 (Area 7B)

7B区 近現代	種類	中輪	中輪 蓋	小輪	小輪 蓋	頭		鉢		頭鉢蓋不明		頭鉢蓋不明		袋物不明		湯飲み		広口瓶			小壺	その他の 小壺	不明	合計
						大	中	小	中	小	中	その他の 小壺	A	B	不明			A	B	不明				
盛土等・1層	手書き	2		2	5	4					1	2									19	35		
	白磁						1														5			
	招贴		1				1														2			
	クロム青磁		1																		1			
	鋼板転写	1		1	1																1	4		
	合計	3	1	4	6	6					1	2	2								2	20	47	

表29 二の丸第18地点出土磁器集計表（立会工事区 近世）
 Tab.29 Distribution of porcelains belong to Edo period from NM18

立会 工事	出土場所	中範				小範		圓	鉢	範 模	範 模 藍 不 明	瓶 類	袋 物 不 明	その 他の 遺 物	不明	合 計	
		丸	縦 反	簡	蓋	不明	小 範										
幕末～ 明治初頭	盛土等	1					1	2	1	2						7	
	合計	1					1	2	1	2						7	

表30 二の丸第18地点出土陶器集計表 (1)
 Tab.30 Distribution of glazed ceramics from NMI8 (1)

表31 二の丸第18地点出土陶器集計表 (2)
Tab.31 Distribution of glazed ceramics from NM18 (2)

出土場所	中綱			里			鉢			筒			土瓶			壺			袋物			土鍋			その他の			不明			合計							
	丸	その他	不明	小綱	綱不明	その他	小中	その他	小中	指鉢	鉢不明	身	蓋	壺	不明	身	蓋	袋物不明	身	蓋	土鍋	その他の	不明	合計														
41区	盛土等						1		1					1	壺1	1														5								
	合計						1		1					1	1	1													5									
5区	盛土等	1		4	2					2	1	2										3	4				3	22										
	1層下部																												3	6								
	2層検出面			1																									1									
	合計	1		5	2					2	1	5										3	4				6	29										
6A区	盛土等	7	縦折1	12		29	40	大皿2 水鉢1	2	大皿6 水鉢2 水鉢1	6	8	207	16	壺7 瓶類5	7	30	15	金鑄2 火入・香炉1 行平鍋1	80	488																	
	1層	1				1	15		1			4	63	10	壺1 瓶類9	2	13	1	行平鍋1 火入・灰吹2	25	149																	
	1層下部 (2層)	3	端反2			25	32		2	基本銅 大皿1	2	18	489	50	瓶類17 壺22	3	180	20	行平鍋5 火入・香爐2 カシテラ1 行平鍋1 水注1	43	921																	
	右頸溝(U11区) 理土1					2	1	2						26	2							1					1	35										
	右頸溝(U11区) 理土2	1				3	4							85	2	瓶類6		4	4								4	113										
	右頸溝(U11区) 理土3					1																						1										
	右頸溝(U11区) 理土9														1													1	2									
	右頸溝(U11区) 理土11													8														8										
	右頸溝(T13区) 理土6					1																						1										
	右頸溝(T13区) 理土7	端反1		1	1									2	1													6										
	右頸溝搬出面																					1						1										
	木桶(T13区) 理土8													1														1	2									
	木桶理土													2	4	壺1											4	11										
	東西北斜面2b面			1										1														1										
	盛土等													1														1										
	右頸溝理土	1																											1									
	合計	13	4	12		63	94	3	7	11	10	30	887	81	68	12	227	42	18	159	1741																	
6B区	盛土等	16	端反6 縦折1			2	73	大皿7	11	大皿3 水鉢1	39	22	146	21	壺5 瓶類1	10		24	私花瓶1 火入1 行平鍋1	31	422																	
	1層	2	端反3 縦折1			13	大皿3	1	片口鉢1	14		38	8		2		6		本注1 焰格1	13	107																	
	1層下部 (2~31層)													3	1													5										
	1層下部 (38層)														1													1										
	木製桶	1				2								2									1					2	8									
	ピット1検出面													1									1					2										
	ピット18検出面													1									1					1										
	合計	19	11			2	88	11	12	5	59	22	188	29	6	12		31	5	46	546																	
7A区	盛土等	3				8	2		6	水鉢1	2	8	14	4	瓶類1	3	2				21	75																
	1号溝検出面	2												2									2					2										
	合計	5				8	2		6	1	2	8	14	4	1		3	2			21	77																
7B区	盛土等	18	筒1 端反1 移形1 大皿1	9	2	33	10	大皿3	4		7	11	39	4	壺4 瓶類4	5	5	4			24	198																
	3号遺構理土	13				1		大皿1						4	1						2	素壺1									23							
	合計	31	4	9	2	34	10	4	4		7	11	43	5	8	5	5	6	9		24	221																
立会工事	盛土等					1								1								1					2	6										
	合計					1								1								1					2	6										

表32 二の丸第18地点出土瓦集計表
Tab.32 Distribution of roof tiles from NM18 (1)

出土場所	軒瓦	利瓦	利瓦瓦筋	利瓦瓦筋 (併存) 1	利瓦瓦筋 (併存) 2	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	その他	不明	合計
盛土層	個数 重量	1 200	個数 重量	75 80	個数 重量	6 100	個数 重量	1 70	個数 重量	2 165	個数 重量	1 30	個数 重量	1	7	11
1層	個数 重量														35	480
1層下部	個数 重量														20	26
階架掘り方開土	個数 重量														325	1335
抜瓦跡3	個数 重量														3	
抜瓦跡4	個数 重量														215	
抜瓦跡7	個数 重量														4	
抜瓦跡9	個数 重量														305	
1番	個数 重量														7	9
1B区	個数 重量														120	235
抜瓦跡11	個数 重量														6	10
抜瓦跡12	個数 重量														75	480
抜瓦跡13	個数 重量														1	1
抜瓦跡14	個数 重量														5	5
抜瓦跡20	個数 重量														1	
抜瓦跡25	個数 重量														95	475
抜瓦跡26	個数 重量														2	
抜瓦跡30	個数 重量														10	10
抜瓦跡31	個数 重量														1	
合計	個数 重量	1 200		1 75				24 2845	3 575			6 520			47 4885	82
															610	4885

表33 ～の丸第18地点出土瓦集計表
Tab.33 Distribution of roof tiles from NM18 (2)

出土場所	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	平瓦1面	平瓦2面	丸瓦	丸瓦	丸瓦	丸瓦	板瓦	板瓦	その他	不明	合計
盛土斜	個数				5				2						10
	重量g				700				80						115
1層	個数				4				2						11
	重量g				320				85						18
1層下部	個数	(三巴瓦) 1 60			70	14		4							157
	重量g				1160	1005		300							692
3層突出面	個数				18				4						63
	重量g				305	225		70							164
2* 2B8 10層	個数				6	1			3						6
	重量g				595	70		280							29
明渠掘方検出面	個数				2										2
	重量g				490										4
1号干渠検出面	個数				1				3						5
	重量g				100				1800						3710
1号溝掘方検出面	個数				12	2		1							12
	重量g				210	195		175							25
2号干渠検出面	個数				10										4
	重量g				1700										55
合計	個数	1 60			134	20		17							545
盛土斜	個数				20790	1625		2880							1905
	重量g					1									30623
3区	個数				140										1
1層	個数							1							140
合計	個数							250							253
-4区 盛土斜	個数				140										3
	重量g					1									390
合計	個数				4										4
5区	個数														5
2層突出面	個数														5
合計	個数				2			1							6
	重量g				280			265							1080

表34 ～の丸第18地点出土瓦集計表(3)
Tab.34 Distribution of roof tiles from NM18 (3)

出土場所	軒瓦	軒瓦類	軒瓦類	軒瓦類	平瓦	平瓦類	平瓦類	瓦瓦	瓦瓦	板瓦	板瓦	その他	不明	合計
盛土等	個数 (左欄) 〔三引〕 1	〔左欄〕 1	〔右欄〕 1	〔右欄〕 1 (右引) 4	〔左欄〕 1 (右引) 1	〔左欄〕 1 (右引) 1	〔左欄〕 1 (右引) 1	〔左欄〕 1 (右引) 1	〔左欄〕 1 (右引) 1	〔左欄〕 1 (右引) 1	〔左欄〕 1 (右引) 1	2	31B 種類	17
重量kg	825	150	936	205	220	430	430	220	220	290	290	50	6986	
1層	個数 (左欄) 1	〔左欄〕 1	〔右欄〕 1 (無文) 1	250									3	
1層下部 (2号)	個数 重量kg	〔左欄〕 1 75	〔左欄〕 1 150	5 120 140	2000	430	430	220	220	290	290	50	940	
石組織方 板瓦面	個数 重量kg			1									1	3
石組織方 東側面	個数 重量kg			30				62	62				5	97
石組織 (T11K)	個数 重量kg			1	2			1	1				2	7
尾土1	個数 重量kg			60	150			53	53	305	305		100	668
石組織 (T11K)	個数 重量kg	〔左欄〕 1 150	〔左欄〕 1 100	100	26			3	3	7	38		37	213
尾土2	個数 重量kg			2605	280			300	300	1033	1033		1258	50296
6AK	石組織 (T11K)	個数 重量kg		5	2000					2	2		7	
尾土4	個数 重量kg			2000						1140	1140		340	
石組織 (T11K)	個数 重量kg			2	120					1	1		3	
尾土5	個数 重量kg			120						162	162		1482	
石組織 (T11K)	個数 重量kg			1									1	
尾土9	個数 重量kg			85									85	
石組織 (T13K)	個数 重量kg									1	1		1	2
尾土2	個数 重量kg									1315	1315		50	1365
石組織 (T13K)	個数 重量kg									2	2		3	
尾土6	個数 重量kg							132	132	805	805		957	
石組織 (T13K)	個数 重量kg			2									1	3
尾土7	個数 重量kg			195									40	235
石組織 (T13K)	個数 重量kg			1									2	
尾土8	個数 重量kg	5 1740	150 100	1 6 186 3125 2845	2000	635	430	1 6 190 31 190	1 2 1 1 1	10	10	45	1	71
合計	個数 重量kg									1630	1630	50	1663	70396
盛土等	個数 重量kg	〔三引左〕 1 200	〔三引左〕 1 840	〔三引左〕 1 498	130	50	50	5 5	5	20	20	36	1238	434
6BK	1層	個数 重量kg	〔左欄〕 1 780	〔三引左〕 1 300	2 45							7	12	
1層下部 (2 - 3階)	個数 重量kg												28	1153
												1	1	
												10	10	

表35 二の丸第18地点出土瓦集計表 (4)
Tab.35 Distribution of roof tiles from NM18 (4)

出土場所	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	その他	不明	合計
木製桟	個数	(三引) 1	(清草1b) 1	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	軽瓦	丸止瓦	3	15
6BK	重量g	120	2950	360	10	1								230	420	4080
ビット1極出面	個数				2									2	4	
秉量g					150									40	140	
ビット14壁上	個数					4									5	
8号造営里上1	秉量g						100								1125	
8号造営里上1	個数						6							6		
合計	個数	2	3	10	3	5	1							2	33	1429
秉量g	780	630	3790	858	2795	50	85							1658	932	11968
1解	個数	(通1(三引)) 1 (通1(三引)) 1	(万十) 1	2		1									10	17
秉量g	191		60	42		40								75	408	
7AK	1号造営裏出面	個数			1									1		
秉量g					45									45		
瓦根盤裏側焼出面	個数					1									1	
合計	個数	3	1	4		2								11	21	
秉量g	191		60	177		285								76	789	
盛土・1解	個数	(1引(圓) 2)	1											4	7	
秉量g	1090				150									50	2590	
7BK	3号造営裏土	個数		39	2	1	6							7	56	
秉量g			1135	270	95	950								120	13485	
合計	個数	2	40	2	1	6								11	63	
秉量g	1090		1285	270	95	950								170	16675	
7CK	石造裏上	個数			7		1							8		
秉量g					1145		190							1335		
合計	個数				7		1							8		
秉量g					1145		190							1335		

表36 二の丸第18地点出土土器・その他の遺物集計表(1)
 Tab.36 Distribution of unglazed ceramics, various implements from NM18 (1)

出土場所	土師質土器			瓦質土器			その他の遺物						合計						
	燒 壺 甕	その他 鉢	不明	合 計	火 鉢	その他 鉢	合 計	土人 形土 製品	石器 石製品	軟質 施釉 陶器	硬質 陶器	ガラス	瓶器	その他					
盛土等	184	1	火鉢6 焼鉢7 鉢類6	305	509	播鉢1 さな1 十能1	2	8	幕石1 砥石1 火打石1	培塔8	小中皿1 碗皿 不明2 不明1 不明1	ボタン2 ボタン 瓶類1 袋物不明1	レンガ8	34					
1層	109		火鉢10 焼鉢12 鉢類12	169	312	8 炭櫃1	37	46	サイコロ1	不明9 培塔1	レンガ2			13					
1層下部	21			48	69							袋物不明2	レンガ1	3					
暗渠掘方 埋土	10			22	32		3	3											
拔取跡1											不明1			1					
拔取跡2																			
1・ 1B区																			
拔取跡3																			
拔取跡4																			
拔取跡5																			
拔取跡6	1			1	2		1	1											
拔取跡7					1	1													
拔取跡8																			
拔取跡9																			
拔取跡10																			
拔取跡11																			
拔取跡12																			
拔取跡13																			
拔取跡14																			
拔取跡15																			
拔取跡16																			
拔取跡17	1			1	2														
拔取跡18																			
拔取跡19																			
拔取跡20																			
拔取跡21																			
拔取跡22																			
拔取跡23																			
拔取跡24																			
拔取跡25																			
拔取跡26																			
拔取跡27																			
合計	326	1	53	556	936	12	5	46	63	0	4	19	3	12	4	9	51		
盛土等	177			95	272					火鉢1	6	7	温石1	培塔5	ラムネ瓶2	板ガラス3	レンガ13	24	
1層	11			7	18					十能1	1	2	幕石1	培塔22	ボタン2	瓶類18	板ガラス7	50	
1層下部	261			火鉢1	鉢類3	81	347	1		5	6	幕石3	不明3	培塔8	ボタン4	ボタン1	板ガラス21	60	
2・ 2B区				播鉢1		1	7												
3層検出面	5			播鉢1		1	7											2	
10層	1						1											2	
1号溝掘方 検出面	5						2	7											
2号溝検出面	8						8						不明1					1	
1号土坑 検出面	12						12	24					1	1					
暗渠掘方 検出面	2						2												
合計	482			6	198	686	1	2	13	16	4	5	44	4	69	0	13	139	
盛土等	4																		
3区																			
1層	4						2	6							ボタン1	ボタン15	インク瓶1	48	
1層下部	11	1					9	21							温石4	不明4	インク瓶2	インク栓1	23
合計	19	1					11	31								71	1	71	
4区	盛土等	6											不明1			石器瓶類1			
合計	6						1	16					1			1			
5区	盛土等	2					7	9					不明1			6		7	
1層下部	3						2	5							鉢類1			1	
合計	5						9	14							1	1	6	8	
6A区	盛土等	553														115	瓶類4	衛ブラン1	190
1層	47														おはしき1	ボタン2	不明7	78	

表37 二の丸第18地点出土土器・その他の遺物集計表（2）
Tab.37 Distribution of unglazed ceramics, various implements from NM18 (2)

出土場所	土師質土器			瓦質土器			その他の遺物						合計		
	直 縫 縫 壺	焼 壺	その他 不明	合 計	火 鉢	その他 不明	合 計	土人 形土 製品	石器 石製品	軟質 施釉 陶器	硬質 陶器	ガラス	角器		
1層下部（2層）	45	1	鉢類3 火鉢5 蓋2 耳皿1 十能1 さな1	179	242	6	敷造6 灰板14	57	83	碁石2 鏡3	焰塔76 不明2	ボタン1 不明8	瓶類6	101	
本埴埋土	50			31	81	1		2	3						
石頬溝（U11区） 埋土1	25			44	69	1		2	3	碁石1	不明1			2	
石頬溝（U11区） 埋土2	30			29	59		灰板2 敷造2	4	碁石1	不明1	焰塔5		2	瓶類4	
6A区 石頬溝（U11区） 埋土5						1		1							
石頬溝（U11区） 埋土11	2				2					焰塔1				1	
石頬溝（T13区） 埋土6	5				5										
石頬溝（T13区） 埋土7					13	13				焰塔1				1	
本埴（T13区） 埋土8	5				5					不明1				1	
石頬溝掘方検出面	17	福鉢2	4	23						不明1				1	
5層	1			1											
7層	6			6											
合計	786	1	30 435 1252 23 30 73 126 4 8 137 17 197 23 2	388											
盛土等	1695	18	火鉢6 鉢類2	246	1967	17		5	22	不明1 鏡4	不明1 焰塔5	不明11 ペン先1	19 ボタン2 瓶類1	レンガ21 タイル13	79
1層	796	9	火鉢1	317	1123	2	灰板2	8	12	碁石2 鏡1	不明1 焰塔1		1		6
1層下部（2層～31層）	46	3	1	18	68			1	1						
1層下部（28層）	7				7										
1層下部（30層）	1				1										
6B区 1号溝埋土					4	4									
1号溝埋土3	46				46										
8号道構埋土1	6				6										
木製桶	2	輪羽口1	2	5											
ピット1検出面	44		1	45											
ピット2検出面	5			5											
ピット4埋土	5			5											
ピット15埋土1	1		1	2											
ピット15埋土2	1			1											
ピット18検出面	2			2											
合計	2656	31	11 589 3287 19 2 14 35					8	8	11	23	1	34	85	
盛土等	58	さな1	21	80	1	蓋1	2	4		不明石製品2 焰塔蓋1	焰塔8 焰塔蓋1	不明1	7		19
7A区 1号道構検出面	1			1											
近世整地層 検出面	1			1										タイル3 レンガ1	4
合計	60	0	1 21 82 1 1 2 4 0					2	9	1	7	0	4	23	
盛土等	304	耳皿3	109	416	7	5な1 敷造1 灰板1	11	21	猿1 不明1	調片1	焰塔8 不明2	不明6	不明5		24
7B区 3号道構埋土	61	耳皿1	31	93	1		1	2			焰塔1 不明2				3
3a・3b層検出面	2		3	5											
合計	367		4 143 514 8 3 12 23 2						1	13	6	5		27	
7C区 盛土等	2			2	1		1								0
合計	2			2	1		1								0

表38 二の丸第18地点出土金属製品集計表
Tab.38 Distribution of various implements made of metal from NM18

出土地所	銅製品							鉄製品							銅 合計			
	寛永通宝 古	寛永通宝 文	寛永通宝 新	その他 古銭	傳管 雁首吸口	不明	妻 美	その他	合 計	和洋 組	洋 組	針金	その他	不明				
1・ 1B区	盛土等							1	洋釘1	2	2	4	1	板状1	1	円形1 9・不明1 銃弾1		
	1層	1			1				帶金状1 1ボタン1 針金状1	6	11	17		円管状1	5	34		
	1層下部									3						3		
	抜取跡14						1		1									
2・ 2B区	暗渠掘方埋土								1				バッケル1		2			
	合計	1		1	2	1	4	9	17	21	1		3	6	48	3		
	盛土等				1		ゼンマイ1	2	11	16				2	29			
	1層						一錢 (昭和十三年) 五銭 (昭和十五年)		板状1 洋釘2 ネジ1 ゼンマイ3 鉛1 リング状1	11	16	129	3	U字金具1 板状1 南車1 不明品1	4	156		
2・ 2C区	1層下部	1					2	洋釘16	19	83	933		1	火薬1	34	1052		
	3層横出面	1							1							1		
	暗渠掘方横出面									1								
	合計	1	1	2	1	2		26	33	111	1078	3	5	5	36	1238		
3区	1層								丸目1 ボタン1 ネジ1 洋釘7 リング1 針金1	12	7	18		バッケル1		26		
	1層下部						1		洋釘20 股釘1 リング状2 フック2	26	3	8		鉄洋1 棒状1	5	21	不明1 リング状1	
	合計						1		37	38	10	26	3	3	5	47	2	
4区	盛土等												1			1		
5区	合計												1			1		
	盛土等												2	1	1	4		
	1層下部												2	1	1	4		
	合計												2	1	1	4		
6A区	盛土等		1		2	1			針金2 新1戸車1 巻き錐1 針金1	10	24	47	1	ナット1 不明品1		76	円形1	
	1層				1	2			針金2 帯板状1 耳搔き1	7	22	24	1	2	火薬1	10	60	
	1層下部 (2層)					2	2	丸目2 荷物1	8	47	4				22	73		
	石組溝 (U111C) 埋土1												4			4		
6B区	石組溝 (U111C) 埋土2						2		2		1				2	3		
	合計		1		1	2	7	2	14	27	97	76	2	4	3	34	216	
	盛土等	4	5	2		1	1		柄1	14	14	10	1	2	鉄銭(古 宽度)1 リンク状1	1	31	不明1
	1層	1	1	1						2	13			板状1		14		
7A区	1層下部 (2~31層)				1	1				2	1					1		
	1層下部 (28層)										1				1			
	木製桶										5				8	13		
	合計	5	5	3		2	2			1	18	34	10	1	2	4	9	60
7B区	1層							1		1	1	1				2		
	合計							1		1	1	1				2		
	盛土等・1層									6	1			火薬1		8		
	3号道構埋土				1					1	2					2		
	合計						1		8	1				1		10		

表39 二の丸第18地点出土磁器観察表
Tab.39 Notes on porcelains from NM18

登録番号	区	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ1 2・ 2B	1層下部	中型端反碗	11.4	4.0	5.7	雲に雪文 口縁内部四方棱文	密	瀬戸	19c後葉以降		-	28	
CJ2 2・ 2B	1層下部	中碗不明	-	4.0	-	よろけ繪文	密	瀬戸	19c後葉以降		-	28	
CJ3 2・ 2B	9号造構埋土	小型端反碗	9.5	-	-	青花内外面網目文	密	中国	17c前半	明末清初 虫喰いあり	40	28	
CJ4 2・ 2B	2号構検出面	小型丸碗	8.6	-	-	丸散らし文	密	瀬戸	19c		40	28	
CJ5 3	1層	広口瓶B	6.6	6.7	5.1	白絵、外面無 内面釉あり	密	不明	第二師团期		-	29	
CJ6 3	1層	広口瓶A	6.6	6.5	5.3	白絵、外面「口縁部内面釉あり」	密	不明	第二師团期	内面底部無釉	-	29	
CJ47 6A	1層	湯飲み	6.6	3.8	7.2	白磁 文字「池田」	密	不明	第二師团期		-	30	
CJ7 6A	石畳溝 (U11区) 理土2	小中皿	-	7.7	3.4	見込み山形に武田菱 蛇口目円形高台	密	平清水?	19c中～後		-	30	
CJ8 6A	石畳溝 (U11区) 理土2	中型端反碗	10.2	4.2	5.4	よろけ繪に青花文 見込み千鳥文	普通	不明	19c中～後		-	30	
CJ9 6A	石畳溝 (U11区) 理土11	小型端反碗	8.5	-	-	龍文	密	平清水?	19c中～後	白濁	-	30	
CJ10 6A	石畳溝 (U11区) 理土11	小中皿	14.1	-	-	唐草文	密	瀬戸	19c後葉以降		-	30	
CJ11 6A	1層下部 (2層)	小型端反碗	8.3	2.9	4.2	口紅 椿束文 見込み文様あり	密	瀬戸	19c中～後		-	30	
CJ12 6A	1層下部 (2層)	小型端反碗	9.2	3.5	5.0	青花雪文 雪胎 見込み雪文	やや粗 切込?	19c中～後			-	30	
CJ13 6A	1層下部 (2層)	小型端反碗	8.1	3.3	3.8	真面 切脚に松葉文 見込み蠍文	普通	切込	19c中～後		-	30	
CJ44 6A	1層下部 (2層)	極小盤	8.0	3.5	-	盤打青海波見込み駒文	密	平清水?	19c中～後		-	30	
CJ45 6A	1層下部 (2層)	極小盤	8.0	3.5	-	盤打青海波見込み駒文	密	平清水?	19c中～後		-	30	
CJ46 6A	1層下部 (2層)	小中皿	13.4	6.8	3.5	唐草文 蛇口目圓形高台	密	瀬戸	19c後葉以降		-	30	
CJ16 6A	1層下部 (2層)	中型端反碗	10.5	4.1	5.9	蝶に源氏名文 見込み駒文	普通	平清水?	19c中～後	日跡4	-	30	
CJ17 6A	1層下部 (2層)	中型端反碗	10.6	4.2	5.8	山形に武田菱 見込み山形	普通	平清水?	19c中～後	日跡4	-	30	
CJ18 6A	1層下部 (2層)	中型端反碗	11.1	4.0	6.2	唐草文 見込み千鳥文 宝珠に文字「文政宝珠文」	粗 密	不明 不明	19c中～後	貢入	-	30	
CJ19 6A	1層下部 (2層)	中型端反碗	9.2	4.1	5.0	文様あり不明	普通	肥前	17c前～中		43	32	
CJ20 6B	盛土等	小中皿	-	-	-	青花草花文	普通	中国	17c前半	明末清初	43	32	
CJ21 6B	盛土等	小中皿	25.4	-	-	青花草花文	密	中国	17c前半	明末清初	43	32	
CJ22 6B	盛土等	小中皿	-	8.8	-	青花水紋 高台内蔵「年」	密	肥前	17c		43	32	
CJ23 6B	盛土等	小中皿	-	7.8	-	見込み文	普通	肥前	17c		43	32	
CJ24 6B	盛土等	小中皿	15.4	9.4	3.0	輪花彫 口紅 見込み梅枝ら し文、七宝文、青海波文 外面 木の葉文 高台内蔵「福」?	密	肥前	17c後半		43	32	
CJ25 6B	盛土等	小中皿	-	7.8	-	青花孔雀文	普通	中国	17c前半	明末清初 高台・ 高台内に砂付着	43	32	
CJ26 6B	盛土等	小中皿	-	8.2	-	見込み色紙垂取文	密	肥前	17c後半		43	32	
CJ27 6B	盛土等	大皿	-	7.4	-	見込み山水文	普通	肥前	17c前葉?		43	32	
CJ28 6B	盛土等	大皿	-	18.2	-	青磁 龍形文あり	やや粗	中国	不明	高台内に粗い砂 付着 貢入	43	32	
CJ29 6B	盛土等	小中皿	-	4.0	-	青花船上唐人文 高台内蔵「大明成化年製」	密	中国	17c前半	明末清初 虫歎い あり 高台内に鉄削 状跡り削痕あり	43	32	
CJ30 6B	盛土等	小中皿	14.8	-	-	芙蓉手 内面梅花唐草文	普通	肥前	17c後葉		-	32	
CJ31 6B	盛土等	小中皿	-	-	-	里彌	普通	肥前	不明		-	32	
CJ32 6B	盛土等	大皿	-	-	-	青磁、圓形波状文	密	17c			43	32	
CJ33 6B	1層	小中皿	-	4.2	-	吹墨梅枝文	密	肥前	17c中葉		43	32	
CJ34 6B	1層	小中皿	12.9	-	-	青花菊花文	密	中国	17c前半	明末清初 口唇 部虫歎いあり	44	32	
CJ35 6B	1層	小中皿	-	-	-	青花唐草文	普通	中国	17c前半	明末清初 潤州系 高台に粗い砂 付着 貢入	44	32	
CJ36 6B	1層	大皿	-	-	-	芙蓉手	普通	肥前?	17c		-	32	
CJ37 6B	1層	小中皿	-	-	-	青磁、觀音牡丹文?	普通	中国?	17c?		44	33	
CJ38 6B	1層	小中皿	10.7	6.8	1.7	見込み松竹梅文	密	肥前	18c		44	33	
CJ39 6B	1層	小中皿	20.2	-	-	吹墨	普通	肥前	17c前～中	貢入	44	33	
CJ40 6B	1層	小中皿	-	7.6	-	見込み山水文	普通	肥前	17c後葉?	貢入	44	33	
CJ41 6B	ピット1檢出面	小中皿	20.5	-	-	撫子文 外面梅花唐草文	密	肥前	17c後葉		44	33	
CJ42 6B	ピット1檢出面	大皿	-	17.4	-	色絵(赤・緑) 印文・ 龍?	やや粗	中国	17c前半	明末清初 印判手 柄油付器系 高台内 に砂付着 年輪・ 年輪印に類似	44	33	
CJ43 6B	ピット18檢出面	小中皿	-	12.4	-	見込み柿四方棱文 唐草文	密	肥前	17c中葉		44	33	
CJ44 6B	ピット14理土	中型端反碗	10.0	-	-	外面青磁 手彌刻唐草文	密	不明	不明		44	33	
CJ45 6B	1層下部 (30件)	中碗不明	-	-	-	青花梅文 口紅	密	中国	17c前半	明末清初	-	33	
CJ46 7B	3a・3b檢出面	小中皿	10.0	6.0	2.0	見込み柏文?	普通	肥前	17c後半～ 18c前葉		47	36	

表40 二の丸第18地点出土陶器観察表
Tab.40 Notes on glazedceramics from NM18

登録番号	区	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	国	国版
CT1 1・1B	抜取跡16	小中皿	13.2	—	—	—	灰釉(淡緑灰白色)	普通	大綱相馬	19c中～後	貢入 半失透釉	39	27	
CT2 2・2B	1層下部	土瓶蓋	7.5	—	1.9	—	鉢縁(暗褐色) 巴文	透明釉	密	大綱相馬	19c前～後	貢入	—	28
CT3 2・2B	1層下部	土瓶身	9.9	9.4	—	—	青釉鉢縁(茶色) 山水文	灰釉(淡黄灰白色)	密	大綱相馬	19c中～後	受熱痕顯著	—	28
CT4 3	1層下部	水滴	—	—	—	—	型打木の葉形	灰釉(淡緑灰白色)	普通	繩口・ 美濃	—	—	41	29
CT5 6A	1層下部(2層)	土瓶蓋	7.5	—	1.6	—	青釉鉢縁(茶色) 横捺巴文	灰釉(灰白色)	密	大綱相馬	19c中～後	貢入	—	30
CT6 6A	1層下部(2層)	土瓶蓋	8.7	—	2.5	—	—	青釉	密	大綱相馬	19c前～後	失透釉	—	30
CT7 6A	1層下部(2層)	土瓶蓋	9.2	—	3.4	—	—	般肌釉 (暗茶褐色)	密	大綱相馬	19c後	勿来手	—	30
CT8 6A	1層下部(2層)	土瓶蓋	10.0	—	2.6	—	白土筒描文	灰釉(淡緑灰白色)	普通	大綱相馬	19c中～後	貢入	—	30
CT9 6A	1層下部(2層)	土瓶身	7.7	7.0	10.8	—	青釉鉢縁(茶色) 山水文	灰釉(淡灰白色)	密	大綱相馬	19c中～後	貢入	—	31
CT10 6A	1層下部(2層)	土瓶身	8.7	8.9	12.2	—	鉢縁竹文	透明釉	密	大綱相馬	19c中	貢入	—	31
CT11 6A	1層下部(2層)	土瓶身	7.1	7.7	9.9	—	青釉	密	大綱相馬	19c前～後	木瓜形	—	31	
CT12 6A	1層下部(2層)	小中皿	12.3	5.8	3.3	—	呉須絞唐草文?	灰釉(淡灰白色)	密	平清水	19c中	日経3貢入 半失透釉	—	31
CT13 6A	東西土層 断面2b	小中皿	—	—	4.9	—	鉢縁(黒褐色) 山水文	灰釉(淡黄灰白色)	密	肥前	17c後～ 18c前	貢入	42	31
CT14 6A	石組溝(U11区) 埋土1	土瓶身	9.6	—	—	—	青釉	密	大綱相馬	19c前～後	墨書きあり	—	31	
CT15 6A	石組溝(U11区) 埋土2	土瓶身	—	—	—	—	青釉	密	大綱相馬	19c前～後	墨書きあり「用」 「分」か	42	31	
CT16 6B	盛土等	擂鉢	34.8	—	—	—	無釉	粗	不明	不明	—	44	33	
CT17 6B	ビット15埋土	擂鉢	41.2	—	—	—	無釉	粗	埋?	18c?	—	44	33	
CT18 6B	盛土等	中型丸碗	—	3.4	—	—	色釉(緑)	灰釉(淡灰白色)	普通	京・信楽	18c	貢入	44	33
CT19 7A	1層	小中皿	—	—	—	—	長石釉	やや粗 美濃	—	鼠志野菊皿	—	36	—	36
CT20 7A	1号遺構検出面	中型丸碗	—	—	—	—	青釉流し掛け	灰釉(淡緑灰白色)	密	大綱相馬	19c前～中	失透釉	—	36

表41 二の丸第18地点出土土器質土器(焼壺) 観察表
Tab.41 Notes on unglazed ceramics (used for salt-making and taking) from NM18

登録番号	区	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	国	国版
CH37 3	1層下部	—	5.9	4.9	—	ロクロ成形 内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、ヘラケゼリ	底部回転系無調整 a 技法右回転 器厚は薄手	41	29
CH38 6B	盛土等	—	—	—	—	板作り 内面調整不明	内系後壺壺 刻印「坂」	45	34
CH39 6B	ビット15埋土1	—	—	6.4	—	ロクロ成形	底部が厚手 底部調整不明	45	34
CH40 6B	1層	—	—	—	—	板作り 内面布目直張 外面上半ロクロナデ	内系後壺壺 刻印「泉州麻生」	45	34

表42 二の丸第18地点出土墨書きの土器質土器(皿) 観察表
Tab.42 Notes on ink-inscribed unglazed ceramics from NM18

登録番号	区	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内面調整	外面調整	底部系 切技法	墨書き(内面)	墨書き(外画)	国	国版
CH31 6B	盛土等	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	徳もしくは箇か	—	45	34
CH32 6B	盛土等	—	4.4	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ+ 軽いミガキ	軽い ミガキ 不明	間の習書か 馬へんの習書か	寺もしくは守のつくりの 一部か 日のつくりの一部か	45	34
CH33 6B	盛土等	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	墨書き不明	墨書き不明	45	34
CH34 6B	盛土等	11.0	6.3	2.3	—	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	山 くさかんむりか	壇 岐もししくは設か	45	34
CH35 6B	1層	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	童子	45	34
CH36 6B	1層	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	寿の一部か	45	34

表43 二の丸第18地点出土土師質土器(Ⅲ)観察表
Tab.43 Notes on unglazed ceramic plates from NM18

登録番号	区	出土場所	UH6 底径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 調整	体部外面 調整	底部 角切法	回転 方向	英化物 付着部	その他特徴	団	図版
CH1	6B	盛土等	11.4	6.2	26	ナデ	ミガキ	ミガキ	不明	口縁～底部 内面底部	内面はやや白っぽい 口縁部はタール状に厚く付着 物が付く	-	-
CH2	6B	盛土等	11.4	7.2	25	ナデ	ナデ	a	左	左	内面はやや白っぽい 未使用か	-	-
CH3	6B	盛土等	12.1	7.0	28	ナデ	ナデ	b	左	左	未使用か 未使用か	-	-
CH4	6B	盛土等	11.5	-	25	ナデ	ナデ	不明	不明	左	未使用か 未使用か	-	-
CH5	6B	盛土等	11.2	6.0	26	ナデ+	ミガキ	ミガキ	不明	左	外縁と底部の一部が黒色化	-	-
CH6	6B	盛土等	12.4	8.0	28	ナデ	ナデ	b	左	左	内面の手半程度と外縁の大部 分が黒色化	45	33
CH7	6B	盛土等	15.4	9.2	33	ナデ	ナデ	a	左	左	未使用か	-	-
CH8	6B	盛土等	15.4	8.3	29	ナデ	ナデ	a	左	左	未使用か	-	-
CH9	6B	盛土等	11.5	6.9	25	ナデ	ナデ	a	不明	左	未使用か	-	-
CH10	6B	盛土等	14.1	7.8	23	ナデ	ナデ	a	不明	左	未使用か	-	-
CH11	6B	盛土等	11.0	6.5	24	ナデ	ナデ	a	右	右	表面にざらつきが残る	45	33
CH12	6B	盛土等	15.3	3.8	31	ナデ	ナデ	不明	不明	左	未使用か	-	-
CH13	6B	盛土等	12.3	7.9	28	ナデ	ナデ	b	左	左	未使用か	45	33
CH14	6B	盛土等	13.6	7.1	26	ナデ	ナデ	a	左	左	未使用か	-	-
CH15	6B	盛土等	-	7.6	28	ナデ	ナデ	b	不明	左	未使用か	-	-
CH16	6B	盛土等	13.3	7.5	26	ナデ	ナデ	b	左	左	未使用か	-	-
CH17	6B	盛土等	-	5.7	25	ナデ	ナデ	a	左	左	未使用か	-	-
CH18	6B	盛土等	10.1	5.1	24	ナデ	ナデ	b	左	左	口縁～底部 タール状に厚く口縁部に付着	-	-
CH19	6B	盛土等	13.4	7.3	29	ナデ	ナデ	a	左	左	未使用か	-	-
CH20	6B	盛土等	12.2	6.9	26	ナデ	ナデ	a	不明	左	未使用か	-	-
CH21	6B	盛土等	13.8	9.0	29	ナデ	軽いミガキ	軽いミガキ	不明	左	未使用か	-	-
CH22	6B	盛土等	-	7.7	31	ナデ	ナデ	b	左	左	未使用か	-	-
CH23	6B	盛土等	-	6.0	24	ナデ	ナデ	b	不明	左	未使用か	-	-
CH24	6B	盛土等	13.9	9.4	31	ナデ	ナデ	b	不明	左	未使用か	-	-
CH25	6B	盛土等	12.8	7.1	23	ナデ	ナデ	不明	不明	左	未使用か	-	-
CH26	6B	ピット2	14.9	7.9	38	ナデ	ナデ	a	右	右	未使用か	-	-
CH27	6B	1層	13.4	7.6	26	ナデ	ナデ	不明	不明	左	未使用か	-	-
CH28	6B	1層	13.7	7.6	27	ナデ	ミガキ	軽いミガキ	不明	左	未使用か	-	-
CH29	6B	1層	10.8	8.3	32	ナデ	ナデ	不明	不明	左	未使用か	-	-
CH30	6B	1層	13.6	8.7	30	ナデ	ナデ	b	右	右	未使用か	45	33

表44 二の丸第18地点出土古錢観察表
Tab.44 Notes on coins from NM18

登録番号	区	遺構・層位	銘名	外径mm	穿孔径mm	重量g	備考	団	図版
MC1	1・IB	1層	寛永通宝(新)	23	6	2.4	完形	39	27
MC2	2・2B	1層下部	寛永通宝(新)	23	6	2.2	完形	40	28
MC3	2・2B	3層被出面	寛永通宝(古)	25	6	2.6	完形 鉄鑄	40	28
MC4	6A	盛土等	寛永通宝(新)	24	6	2.4	完形	42	31
MC5	6B	盛土等	寛永通宝(文)	25	6	4	完形	45	34
MC6	6B	盛土等	寛永通宝(新)	24	6	2.5	一部欠損	45	34
MC7	6B	盛土等	寛永通宝(古)	22	7	1.5	完形 鉄鑄	45	34
MC8	6B	盛土等	寛永通宝(新)	25	6	2.9	完形	45	35
MC9	6B	盛土等	寛永通宝(文)	25	6	3.5	完形	45	35
MC10	6B	盛土等	寛永通宝(文)	25	6	3.9	完形	45	35
MC11	6B	盛土等	寛永通宝(文)	25	6	3.5	完形	46	35
MC12	6B	盛土等	寛永通宝(文)	25	6	2.5	完形	46	35
MC13	6B	盛土等	寛永通宝(古)	25	6	2.9	完形	46	35
MC14	6B	盛土等	寛永通宝(文)	24	6	3.3	一部欠損 青化顯著	46	35
MC15	6B	盛土等	寛永通宝(古)	24	5	3.6	完形	46	35
MC16	6B	盛土等	寛永通宝(古)	24	5	2.4	一部欠損	46	35
MC17	6B	1層	寛永通宝(新)	22	6	1.8	完形	46	35
MC18	6B	1層	寛永通宝(古)	24	5	3.6	完形 青化顯著	46	35

表45 二の丸第18地点出土その他の遺物観察表
Tab.45 Notes on various implements from NM18

登録番号	種類	区	出土場所	法量	調査・特徴	団	図版
CG1	瓦質土器 火鉢	6A	石組溝(U11区) 涝上7	UHf25.0cm 底径16.8cm	口縁部ミガキ 内面クロナデヘラケズリ	42	31
S1	石製品 食子	1B	1層	8mm×7mm×不明	2日は残存 1日、3日、4日の一部残存	39	27
W1	木簡	6B	盛土等	長さ9.0cm 厚さ0.7cm	木簡022型式 ・「右内」 ・「荷」	46	35

表46 二の丸第18地点出土軒丸瓦観察表
Tab.46 Notes on round eaves tiles from NM18

登録番号	区	出土場所	瓦当文様	瓦当直徑 cm	瓦当内径 cm	周縁幅 cm	釘穴	図	図版
T2	6A	盛土等	九曜文	—	—	1.9	—	—	—
T3	6A	盛土等	三引両文	—	—	1.4	—	—	—
T4	6A	石組溝 (U11区) 理土2	三巴文 (左巻)	—	—	2.2	—	—	—
T5	6B	1層	三巴文 (右巻)	173	125	2.3	—	—	—
T6	6B	1層	九曜文	170	124	2.3	—	—	—
T7	7B	盛土等・1層	三引両文	146	123	1.5	—	—	—
T8	7B	盛土等・1層	三引両文	154	129	1.5	—	—	—

表47 二の丸第18地点出土軒平瓦類觀察表
Tab.47 Notes on a kind of flat eaves tiles from NM18

登録番号	区	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当垂長 cm	頭幅	備考	図	図版
T17	1	盛土等	唐草1a類	不明	—	—	—	—	—
T18	6A	石組溝 (U11区) 理土2	不明 (唐草?)	不明	—	—	—	—	—
T19	6B	盛土等	唐草5類+三枝葉	中刺	48	—	赤焼け	—	—
T20	6B	盛土等	唐草1a類	太刺	52	—	—	—	—
T21	6B	木製柵	三枚花2a類+唐草1a類	中刺	48	—	—	—	—
T22	6B	木製柵	三枚花2a類+唐草1a類	太刺	55	—	—	—	—
T23	6B	木製柵	唐草1a類	太刺	57	—	—	—	—
T24	6B	木製柵	三枚花2a類+唐草1a類	太刺	54	—	—	—	—
T25	6B	木製柵	唐草1b類	中刺	48	—	—	—	—
T26	6B	木製柵	三枚花2a類+唐草1a類	太刺	57	—	—	—	—
T27	6B	木製柵	唐草1a類	—	—	—	—	—	—
T28	6B	木製柵	唐草1a類	太刺	54	—	—	—	—

表48 二の丸第18地点出土軒棟瓦観察表
Tab.48 Notes on eaves-pan tile from NM18

登録番号	区	出土場所	全長 cm	全幅 cm	きき幅 cm	きき足 cm	尻切込長 cm	瓦当小巴 部分文様	小巴径 cm	瓦当垂れ 部分文様	瓦当垂れ 形状	瓦当垂長 cm	釘穴	図	図版
T38	7A	1層	—	—	—	—	—	万十	7.6	無文	臺刷	4.5	—	—	—

表49 二の丸第18地点出土その他の瓦観察表
Tab.49 Notes on various roof tiles from NM18

登録番号	区	出土場所	瓦の種類	法量	釘穴	図	図版
T39	6A	盛土等	棟瓦	全長28.7cm 尻切込長10.4cm A2.6cm 頭切込幅3.7cm	—	—	—
T40	6A	盛土等	袖瓦 (右)	全長27.9cm きき幅27.8cm 袖垂7.7cm 袖きき21.3cm 尻切込長4.3cm	2カ所	—	—
T41	6A	1層下部 (2層)	丸瓦	胴長26.0cm 玉桟長3.3cm 尻幅16.1cm 頭幅14.9cm 高さ8.5cm	—	—	—
T43	6A	石組溝 (U11区) 理土2	平瓦2類	舞面に刻印	—	—	—
T42	6B	盛土等	契斗瓦	長さ24.6cm 幅12.8cm 厚さ2.1cm	—	—	—
T44	7B	盛土等・1層	平瓦1類	側面に刻印	—	—	—



第VI章 考察—各区からみた二の丸地区の変遷—

1. 各区の層序 (図49)

今回の調査では、平面的に掘り下げていないため、遺構の時期ごとの変遷を把握することは難しい。ただし、各区の土層断面図で確認された特徴から、この場の使い方がある程度推察できる。本章では、各区の層序関係から、できるかぎりの時期的な変遷について考察したい。ただし、3・7A~7C区に関しては様相がかなり異なるので、別にしてまとめる。

(1) 1・2・4~6区の層形成の段階

各区の整地層の状況は様々であるが、ある程度の共通性が認められる。地山面あるいは地表面化した地山面を掘込面とする遺構がある。確實なところでは1・1B区2号溝、2・2B区5号遺構、5区遺構、6B区8号遺構がある。これらの遺構埋土は、おおむね砂が混じるような水性堆積層と考えられる遺構であり、排水溝や水が貯まるような池状の機能を有する施設があったものと推察される。

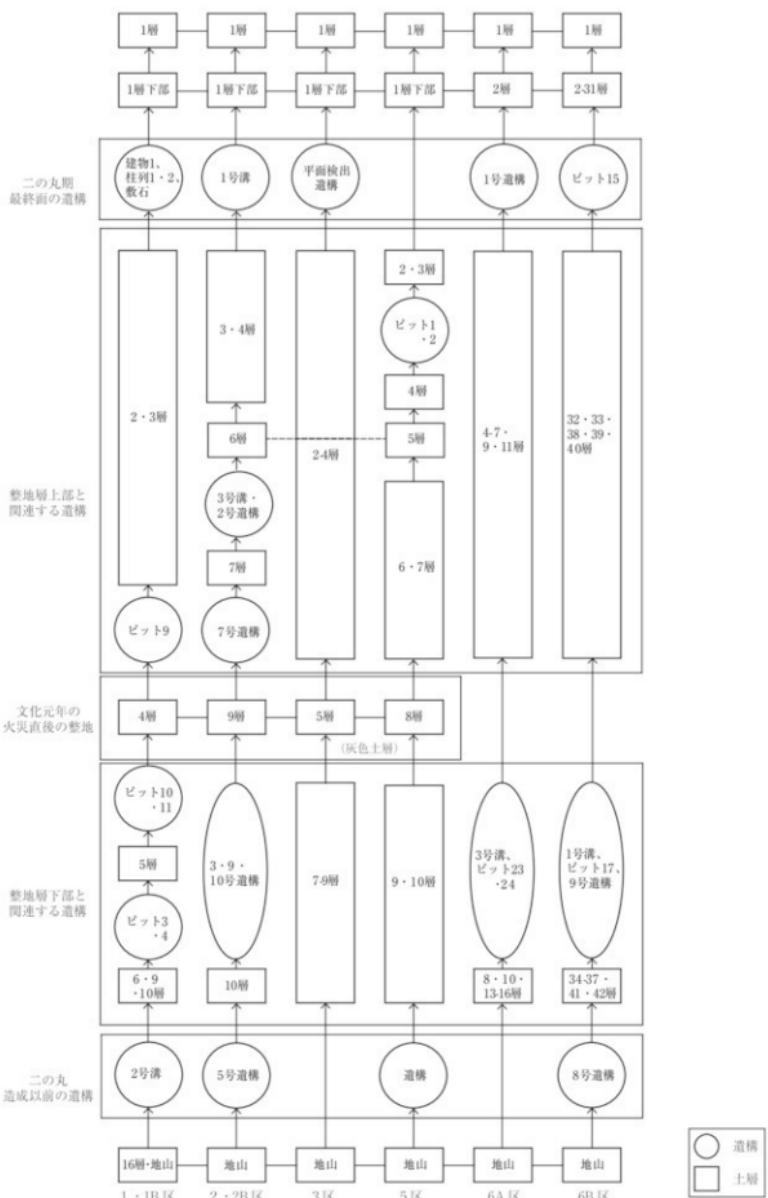
その後に各区共に地山の砂礫層を用いた大規模な整地が行われる。これらの層を、6A・6B区で用いた用語を使用して整地層下部と命名する。その他の区では、この整地層の上に、灰色を呈する夾雜物が少ない土層（灰色土層と略す、1・1B区4層、2・2B区9層、4区5層、5区8層）により整地がなされる。6A・6B区以外の区では、この層より下層を整地層下部として捉える。

整地層下部による整地が完了した段階で、再び施設が構築される。1・1B区では建物が建てられており、礎石がある規模の大きな建物から掘立柱への変遷が考えられる。6B区では、最初に1号溝を構築するが、それを埋め戻してピット17あるいはピット14の礎石建物が建てられる。一方、2・2B区では3・9・10号遺構があり、前時期と同じように水と関連するような施設や機能不明のやや大型の遺構を構築していたと考えられる。6A区では、3号溝のほかはピット23・24があるのみであり、それらの遺構の具体的な様相は不明である。3・5区では、遺構が確認されていない。

1~4区では、これらの遺構群の上を、灰色土層で整地されている。その面を掘込面とする遺構としては、1・1B区ではピット9のみであり、先の建物の柱は全て埋められている。2・2B区では7・8号遺構がある。7号遺構は10号遺構上部にあり、その後に3号溝が形成されることから、前時期と同じ機能を有していた可能性が考えられる。3・5区でも灰色土層が存在するが、この層を掘込面とする遺構は確認されていない。各区とも、土層断面からの観察のみではあるが、遺構が非常に少数である。また、6A・6B区では、理由は不明であるが、この灰色土層は認められない。

この後に再び整地がなされる。その際の整地層は、おおむねシルト質土や粘土を用いた土層となる。この整地層を、6A・6B区を基準として整地層上部と命名する。1・1B区では2・3層が整地層上部に該当するが、断面では遺構が観察されていない。平面で検出した遺構群が、この時期に該当するものと考えられる。その場合、小規模な礎石建物のほか、機能不明の敷石遺構がある。これらの遺構には、時期的な前後関係があるものと考えられるが、詳細は不明である。3区は平面で遺構のプランは確認しているが、その詳細は不明である。

一方で、2・2B区では7層より上層が整地層上部に該当するが、第IV章でまとめたように複数段階が想定される。7層で厚い整地がなされ、その後に徐々に整地されたものと考えられる。この7層は、瓦や大ぶりの川原石を多数含む土壤を用いて整地しており、他の区の整地層上部とは異なっている。この層を掘込面とする遺構は、3号溝、2・6号遺構等があるが、これまでの遺構とほぼ同じ位置に配置されている。このことから、この場は継続的に同じような機能を有する遺構が配置されていた可能性が考えられる。そして、1号溝を最後に構築し、2号溝を掘り直しながら、この場の機能を更新していた様子が窺える。なお、建物跡も東側に認められるが、1・1B区の建物と対応するかどうか不明である。



6A区では、整地層上部を掘込面とする1号遺構が、土層断面で観察できている。ほかには、調査区中央を通る石組溝や建物、柱列等が平面で検出されている。これらの多種多様な遺構には重複関係があり、石組溝を主体とした遺構群が展開していたものと推定される。第IV章で触れた通り、この1号溝は19世紀後葉以降に埋められていることを考えると、2・2B区の1号溝と同様の時期に廃絶されたものと考えられる。5区では、礎石が抜かれたピットの痕跡があり、この6A区と同様に建物があったものと推察できる。また、6B区では、ピット15の存在から規模の大きな礎石建物が存在していた可能性がある。また、平面で確認している建物1や建物2などはこの時期であり、重複関係があるのは確かであるが、その詳細は不明である。

以上の検討から、複数認められる整地層の段階は、下記のようにまとめられる。遺構はその各段階において形成される。

第I段階 地表面を埋める地山土を主体とする土壤で大規模な整地（整地層下部）。

第II段階 灰色に見える夾雜物のない土壤による整地（灰色土層）。

第III段階 粘土・シルト質土を主体とする新たな整地（整地層上部）。

第IV段階 明治15（1882）年の火災に伴う整地（1層下部）。

第V段階 昭和15（1930）年以降の整地（1層）。

本調査区における、寛永15（1638）年の二の丸造営以後の大きな改変は数回あることが知られている（藤澤敦2006）。最初は、元禄年間（1688～1704年）を中心とし四代藩主綱村によって大規模な改修が行われる。文化元（1804）年には火災が起り、ほぼ二の丸の家屋は全焼する。その後に火災前とはほぼ同じように再建され、明治15（1882）年の火災まで続く。

第I段階は、二の丸造成期の整地層と考えられるが、以後の段階は各調査区によって様々な様相が見受けられる。本稿では、各区の事例に基づいてこの段階の時期について検討する。1・1B区では、第I段階の整地の後に認められるピット3・4は、二の丸初期の礎石建物と考えられる。そして、その後にこの柱は廃され、掘立柱となる。上部構造にどのような変化があったのか、そもそも同一の建物なのか不明であるが、この掘立柱へと変化する時期が、元禄年間の大規模な改修と推定する。

第II段階の整地は、根掘は弱いが、文化元（1804）年の火災後の整地層と捉える。文化元（1804）年の火災の痕跡は全く認められていない。おそらくは火災後に片付けを行い、きれいな土壤で整地したものと推測する。6A区・6B区ではこの整地層は認められないが、その理由は不明である。この頃の地表面の標高は、各区で60.8～60.9m程度であり、多少の凹凸はあるが、平滑に面を整えている様相が見受けられる。遺構はあまり検出されていない。

第III段階の整地は、再建工事に伴う整地層と推定する。1・1B区では遺構は認められない。2・2B区では複数の生活面が認められる。この区における再建工事に伴う整地層は、層厚がある7層であり、それ以後の3～6層は、小規模な改修作業に伴うものと想定する。

（2）3・7区の変遷

前項で検討した層序は、3・7A～7C区では当てはまらない。7C区は、遺構検出面まで擾乱を受けており、整地層の様相は不明である。4・7B区では整地層は検出できたが、整地層の下方については不明である。これらの区で、層序の様相がよく分かるのは7A区である。

第IV章で触れたように7A区の整地層はかなり厚く、地山面は確認されていない。その整地層は地山由来の土層が9層まで続く。そして黒色の8層が堆積する。さらに、8層形成以前に遺構が存在することから一時的な中断を想定した。この8層が黒色であることを考えると、7層上面に腐食土壤が堆積するような環境であったことも想定できる。ほかの可能性としては、全ての整地が一度に実施され、黒色土は整地土の中にたまたま入ってい

たということも考えられる。しかしながら、均質に薄く広範囲に層を形成するように黒色土を整地するということとも考えづらく、その様な場合、むしろブロック状に黒色土が混ざることが想定される。あるいは、文化元年の火災により形成されたものと考えることもできるが、材の様な炭化物の存在が明確ではないため判断し難い。これらの可能性も想定されるが、遺構が形成される時間幅があるということを踏まえ、本稿では、8層はある一時期の表土層であると解釈する。そう考えると、しばらくの間、北東方向に斜面あるいは凹みがあったこととなる。

2. 絵図との対比（図50）

前項でまとめた解釈は、主に土層断面図の観察のみから検討したものである。そのため、これ以上の解釈をすることは難しい。当室におけるこれまでの川内南地区の調査成果から、絵図との対比が進められてきた（『年報』9など）。図50にて、『年報』9所収の文化元（1804）年の火災のあとに作られた「文化元年御造営御絵図写」（以下、「文化元年図」と略する）と現代の東北大学キャンパス地形図との重ね合わせ図を参照し、今回の調査区を重ねた。この図を用いて、これまでの検討の結果と合わせ、その位置について検討する。また、ほかの比較資料としては、享和二（1802）年の『享和二年之御家作御絵図写』（図51②：『享和二年図』と略する）、元禄年間の改造以前を示すとされる『御二之丸御指図』（図51①：『二之丸図』と略する）を用いる（図51）。

1・1B区は、「文化元年図」では「下大所」近辺にあたり、その中でも北西隅付近にあたる。断面で認められた整地層下部の礎石跡は、「二之丸図」や「享和二年図」の「大台所」・「下大所」の建物と対応しそうであるが、多少北側にずれる。それから、ピット1の礎石を含む柱列2やピット5・6の柱等は、「文化元年図」では「下大所」の一部に対応するものと思われる。新しい時期と推定される敷石遺構については、「文化元年図」では「御香之物置所」と表記されている場所に該当する。ほかの柱列2等の礎石などの存在を考えると、やはりこれらの建物が無くなった新しい時期の遺構と考えられる。そのほか、1号溝もその「御香之物置所」の位置となる。1号溝の時期は不明であるが、古いと考えるならば、「文化元年図」以前の時期のものと推定される。建物1、柱列1とした遺構は、「御廄所」の床下にあたる。規模からすると東柱の礎石とも考えられる。

2・2B区西部には、「文化元年図」では「御草履取」があり、柱列1がその建物の基礎に該当するか。建物1は北に伸びることもあり、不明である。この建物の北側には暗渠、西側に1号溝が走る。建物がない場所に2・3号溝がある。また、この区の西側に位置する3区では、建物が描かれていない。土層断面で遺構が確認されていないこと合う。

4・7A区は、「文化元年図」では中奥に比定される地点になる。ちょうど土手を上がった一段高い所になり、建物などは見られない。「享和二年図」でも同様であり、建物などはない。このことは、この調査区が他の区とは異なる整地状況であった理由となる。ただし、「二之丸図」では、中奥は描かれていないため不明である。7B区は土手の下にあたるが、建物などは無い場所である。7C区は、土手近辺にあたる。調査では土手の様な盛土は認められず、近現代に擾乱を受けている。文化6（1809）年の二の丸再建後に描かれた『仙台城二の丸家作水抜絵図』（菅野正道ほか2016：以下、「水抜絵図」と略す）によると、この土手の下に溝が描かれており、この区で検出した石組溝がそれに該当すると考えられる。

南西側の5区は、「御物置メ役下部屋」と表記された建物の内部にあたる。ピット1・2はそれに該当するものと考えられるが、調査範囲が狭いため判然としない。

南側の6A区では、石組溝が北から走り西側に曲がる。ちょうど建物の間を走る様子となる。「水抜絵図」でもこの部分に溝が描かれており、それに該当するものと考えられる。調査では、石組溝が南・東方向に曲がることが不明瞭ではあるが確認されている。「水抜絵図」では、南東方向に分岐し、建物下に入る様な描写となっている。それに該当する可能性もあるが、ちょうど合うわけではない。なお、この溝の南北で認められる建物やピットは、南北の建物に該当するものと考えられるが、どのように組み合うか不明である。

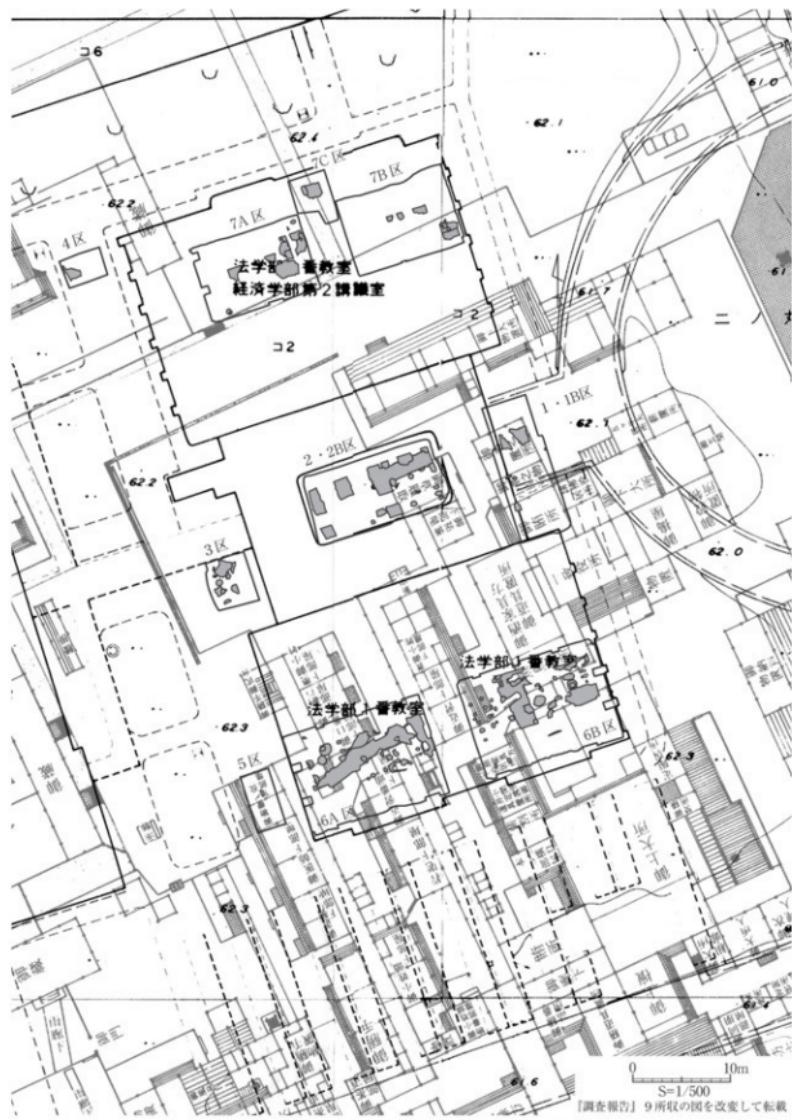


図 50 仙台城跡二の丸第 18 地点調査区と絵図の関係

Fig.50 Relationship between excavation area and picture map at NM18

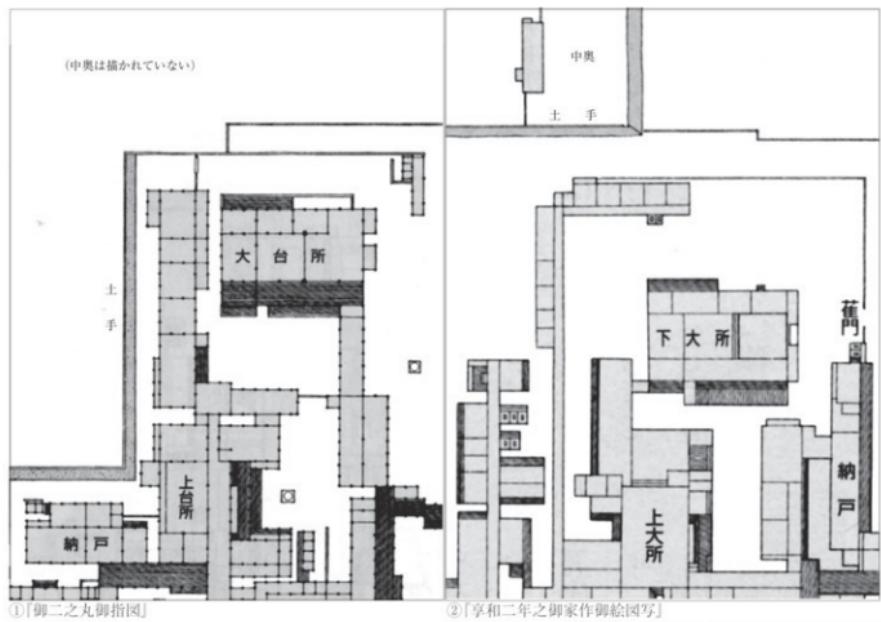


図51 仙台城跡二の丸第18地点周辺の絵図

(仙台市史編さん委員会編 2006) 所収の図を改変して転載

Fig51 Picture map around NM18

その東側の6B区では、建物1とした建物は、「文化元年図」では、北と南の建物に分かれる可能性がある。しかし、それより古い『享和二年図』では連続した一連の建物になるので、この時期に相当する可能性もある。建物1の位置する場所は整地層上部が無いため、時期を限定することが難しい。

南北に走る1号溝は、「下大所」西端に接するような位置となる。そして、1号溝南端部は「文化元年図」と「享和二年図」でも建物に接してしまう。「水抜絵図」にも描かれていない。一方で、『二之丸絵図』において該当する場所である「大台所」南側には空間があり、1号溝が展開する余地がある。このようなことを考えると、1号溝が機能していた段階は古い段階であり、整地層下部を掘込面とする造構として解釈することは矛盾しない。

以上のような本報告での調査成果と絵図の対比は、ほとんどが可能性を指摘する程度にとどまっている。これは、今回の調査が確認調査であるため、造構の精査などは行っておらず、時期なども不明であることによるものである。

第VII章　まとめ

本調査では、近世以前の遺構等の遺存状況の確認を目的としていた。今回の調査の結果、現在存在している大学建物の下部であっても、そのような近世以前の面が良好に残っていることが判明した。過去の開発では、対象範囲を大規模に掘り上げてから建物を建てるのではなく、基礎の周囲部分のみを掘っていることがわかった。第二師団期や米軍期の搅乱についても、土管や共同溝などは深く掘削されているが、それ以外の部分では、それほど深くは掘削されていない。これらの現段階での所見からすると、川内南地区における仙台城二の丸は良好に残されているものと言える。

また、今回の調査は確認調査という目的上、遺構の精査や整地層の掘り下げ等は行っていない。そのため、遺構や出土遺物の情報が極めて少ない。そのようなことを前提としつつ、本報告では、観察できた土層断面から最大限の情報を利用し、矛盾が無いように遺構・整地層形成の関係を整理した上で、下記のような整地層の段階を設定した。

第Ⅰ段階 地山面を埋める地山土を主体とする土壤で大規模な整地（整地層下部）。二の丸造成期の整地層と考えられる。この整地層の中でも遺構の変遷が認められる。本報告では、その変遷する時期を、元禄年間の二の丸改造の時期と想定した。

第Ⅱ段階 灰色に見える杂质のない土壤による整地（灰色土層）。文化元年の火災によって被害を受けた後の整地層と想定した。4・6・7区以外で広範囲に認められるが、この整地層を掘込面とする遺構は多くはない。

第Ⅲ段階 粘土・シルト質土を主体とする新たな整地（整地層上部）。火災以降の再建工事に伴う整地層と考えられる。やはり、その中でも数段階が認められる。

第Ⅳ段階 明治15年の火災に伴う整地（1層下部）。

第Ⅴ段階 昭和15（1930）年以降の整地（1層）。

このような段階を踏ました上で、これまでに知られている絵図との対比を行った。調査した成果と絵図の記載が整合的に理解できる場合もあれば、そうとは限らない場合も多数認められた。これには、今回の発掘調査が限られていること、それから一時期の様子を示した絵図の限界性の両方の要因があるものと考えられる。

今後、これまでの当室の調査成果をまとめると共に、このような絵図・絵図などの関連する資料を含めた基礎資料を作成し、その中で本調査の成果について改めて再検討していきたい。

引用・参考文献

東北大学埋蔵文化財調査室・仙台市教育委員会の報告書に関しては、直接引用したもの以外は省略した。

【東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書関連】

- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 1
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 3
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 4・5
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 6
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 7
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 8
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 9
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 10
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 11
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 12
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2000 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 13
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 15
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2005 「東北大学埋蔵文化財調査年報」 18
東北大学埋蔵文化財調査室 2011 「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点」

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告1

- 東北大学埋蔵文化財調査室 2013 「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点」

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告2

- 東北大学埋蔵文化財調査室 2016 「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点」

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告5

【仙台市教育委員会刊行報告書関連】

- 仙台市教育委員会 2005 「仙台城跡整備基本計画」
佐藤 淳ほか 2008 「若林城跡－第5次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書323
佐藤洋ほか 1985 「仙台城三の丸跡」仙台市文化財調査報告書第76集
金森安孝・渡部 紀 2009 「仙台城跡第1次調査 第1分冊本文編」仙台市文化財調査報告書349
佐藤 淳ほか 2010 「若林城跡－第8次、第9次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書377
主浜光朗ほか 2011 「桜ヶ岡公園遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書IV－」仙台市文化財調査報告書第384集

【その他の報告書・論文等（50音順）】

- 青山礼志 1982 「新訂貨幣手帳」ボナンザ
アグスティン・サイス 村上和久訳 「日本軍装備大図鑑 制服・兵器から日用品まで」原書房
阿刀田令造 1976（初出1936）「仙台城下絵図の研究」斎藤報恩会博物館図書部研究報告4 東洋書院
安藤貞男 2012 「日中・第二次世界大戦における陶磁器代用品について」『瑞浪市陶磁資料館研究紀要』第14号 瑞浪市陶磁資料館 pp.55-68
稲垣森太 2011 「東北地方の陸軍境界石」「施権林の考古学 大竹憲治先生還暦記念論文集」 pp.605-618
江戸遺跡研究会編 2001 「国説江戸考古学研究事典」柏書房
大橋康二 1994 「古伊万里の文様 初期肥前陶磁器を中心に」
小川啓司 1974 「そば猪口続柄事典」
加藤 宏 2011 「旧第二師団軍事施設配置に関する歴史的研究」（自費出版）
菅野正道ほか 2016 「斎藤報恩会寄贈資料」仙台市博物館収蔵資料図録8 仙台市博物館
九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」

- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』 考古学ライブラリー48 ニューサイエンス社
- 小林清春監修 1994 『絵図・地図で見る仙台』 今野印刷
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1990 『柴田コレクション展Ⅰ－初期伊万里から柿右衛門へ－』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1991 『柴田コレクション展Ⅱ』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1993 『柴田コレクション展Ⅲ』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1995 『柴田コレクションⅣ－古伊万里様式の成立と展開－』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1997 『柴田コレクションV－延宝様式の成立と展開－』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 『柴田コレクションVI－江戸の技術と装飾技法－』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2016 『特別企画展 日本磁器の源流』
- 坂田 啓編 1995 『私本 仙台藩士事典』 創栄社
- 佐藤広史ほか 1990 『切込窯跡－近世磁器窯跡の調査－』 宮崎町文化財調査報告書第3集
- 鈴田由紀夫 1995 『17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様』 『柴田コレクションⅣ－古伊万里様式の成立と展開』 pp.272-279
- 鈴田由紀夫監修 2015 『明治有田 超絶の美』
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史 陶磁史篇六』
- 瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの－生産と流通－』 記念講演会・シンポジウム資料集
- 瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2007 『窯跡出土の“近代陶磁”－瀬戸・美濃窯の近代1－』 平成19年度財团法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター企画展図録
- 瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2008 『東京・小田原出土の“近代陶磁”－瀬戸・美濃窯の近代2－』 平成20年度財团法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター企画展図録
- 瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2012 『瀬戸・美濃窯の近代－生産と流通－』
- 平成23年度財团法人瀬戸市文化振興財團シンポジウム資料集
- せとものフェスタ'98実行委員会・瀬戸市歴史民俗資料館 1998 『瀬戸染付の黎明』
- 仙台市科学館編 1985 『仙台市地形区分図』 仙台市科学館
- 仙台市史編さん委員会編 2006 『仙台市史 特別編7 城館』 仙台市
- 仙台市歴史民俗資料館 2001 『戦争と庶民のくらし』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報1』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2016 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟A地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13
- 東北歴史資料館 1995 『仙台・堤のやきもの』
- 土岐市美濃陶磁歴史館 1996 『特別展堺衆のやきもの 堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁』
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2005 『第17回織部の日特別展 織部様式の成立と展開』
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2006 『第18回織部の日特別展 天下人とやきもの』
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2007 『第19回織部の日特別展 ポスト織部の時代 元和寛永の茶陶』
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2008 『第20回織部の日特別展 桃山時代の茶陶生産』
- 土岐市美濃藤原歴史館 2008 『幕末から明治にかけての瀬戸・美濃窯』
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2010 『第22回織部の日特別展 公と武 京と江戸のやきものの文化』
- 西田公子・出川哲朗 1997 『明末清初の民窯』 中国の陶磁10 平凡社
- 藤澤 敦 2006 『三 元和・寛永前期の様相』 『仙台市史 特別編7』 仙台市 pp.253-259
- 藤田昌雄 2009 『写真で見る日本陸軍兵営の食事』 光人社
- 藤田昌雄 2011 『写真で見る日本陸軍兵営の生活』 潤書房光人社
- 桃井勝、萩谷茂行、舟橋健 2010 『伝世品にみる戦時中の美濃焼～産地と製品傾向～』 瑞浪市陶磁器資料館研究紀要 第13号 瑞浪市陶磁資料館 pp.135-186
- 吉岡一男編 2005 『絵図・地図で見る仙台 第二輯』 今野印刷

東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報1	1985	昭和58年度(1983年度)事業概要 仙台城跡二の丸第1地点 (NM1) 仙台城跡二の丸第2地点 (NM2) 仙台城跡二の丸第3地点 (NM3)	東北大学 埋蔵文化財調査委員会
東北大学埋蔵文化財調査年報2	1986	昭和59年度(1984年度)事業概要 青葉山E道路第1次調査 (AOB1) 青葉山E道路第2次調査 (AOB2・旧称AOF) 青葉山E道路第1次調査 (AOE1)	東北大学 埋蔵文化財調査委員会
東北大学埋蔵文化財調査年報3	1990	昭和60年度(1985年度)事業概要 仙台城跡二の丸第6地点 (NM6) 芦ノ口E道路第1次調査 (TM1) 芦ノ口道路1976年考古学研究室による調査 (TK) 研究編 - 東北地方における近世営業と陶磁器をめぐる問題ほか	東北大学 埋蔵文化財調査委員会
東北大学埋蔵文化財調査年報4・5	1992	昭和61年度(1986年度)事業概要 昭和62年度(1987年度)事業概要 仙台城跡二の丸第4地点 (NM4) 仙台城跡二の丸第7地点 (NM7) 仙台城跡二の丸第8地点 (NM8)	東北大学 埋蔵文化財調査委員会
東北大学埋蔵文化財調査年報6	1993	昭和63年度(1988年度)事業概要 仙台城跡二の丸第5地点 (NM5)	東北大学 埋蔵文化財調査委員会
東北大学埋蔵文化財調査年報7	1994	平成1年度(1989年度)事業概要 仙台城跡二の丸第5地点 (NM5) 付帯施設部分 仙台城跡二の丸第5地点 (NM5) 調査成果の検討 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地第5地点 (BK5) 川波農場町西道路第1地点 (KW1)	東北大学 埋蔵文化財調査委員会
東北大学埋蔵文化財調査年報8	1997	平成2年度(1990年度)事業概要 仙台城跡二の丸第9地点 (NM9)	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報9	1998	平成3年度(1991年度)事業概要 仙台城跡二の丸第10地点 (NM10) 芦ノ口E道路第2次・3次調査 (TM2・TM3) 考察編 - 仙台城二の丸跡の考古学的調査 -	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	平成4年度(1992年度)事業概要 仙台城跡二の丸第13地点 (NM13) 青葉山E地区分布調査 研究編 - 相馬藩における近世営業生産の展開	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成5年度(1993年度)事業概要 仙台城跡二の丸第12地点 (NM12) 仙台城跡二の丸第14地点 (NM14) 青葉山E道路第2次調査 (AOE2)	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	平成6年度(1994年度)事業概要 仙台城跡二の丸第15地点 (NM15) 青葉山E道路第3次調査 (AOE3)	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	平成7年度(1995年度)事業概要 仙台城跡二の丸第11地点 (NM11) 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地第4地点 (BK4) 青葉山E道路第4次調査 (AOE4) 研究編 - 東北大文学構内(仙台城二の丸跡)道路出土漆器資料の材質と製作技法	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	平成8年度(1996年度)事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地第6地点 (BK6) 青葉山E道路第5次調査 (AOE5) 芦ノ口道路第4次調査 (TM4)	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成9年度(1997年度)事業概要 仙台城跡二の丸第16地点 (NM16) 青葉山E道路第6次調査 (AOE6)	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度(1998年度)事業概要 研究編 - 糠アルコール含浸法における予備実験	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度(1999年度)事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成12年度(2000年度)事業概要 仙台城跡二の丸第17地点 (NM17)	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大理蔵文化財調査年報19 第1分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要 芦ノ口道路第5次調査（TM5） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）遺構	東北大理蔵文化財調査研究センター
東北大理蔵文化財調査年報19 第2分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査年報19 第3分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 木簡・墨書きある木製品	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査年報19 第4分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） その他の遺物	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査年報19 第5分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 分析・考察	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第8地点（BK8） 青葉山E道路第7次調査（AOE7） 青葉山E道路第8次調査（AOE8）	東北大理蔵文化財調査研究センター
東北大理蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9） 芦ノ口道路第6次調査（TM6）	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10） 青葉山新キャンパス地区試掘調査	東北大理蔵文化財調査室

〈東北大理蔵文化財調査室調査報告〉

シリーズ名	書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大理蔵文化財調査室 調査報告1	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償開 発調査報告書－	2011	東西線補償開発調査の概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12） 川内地区の绘図記載人の検討 川内地区における江戸時代の道路の復元	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査室 調査報告2	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査室 調査報告3	芦ノ口道路第7次調査・第8次調査	2014	芦ノ口道路第7次調査（TM7）・第8次調査（TM8）	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査室 調査報告4	芦ノ口道路第9次調査・青葉山E道路第9次調査－東日本大震災復旧事業 開発調査報告書－	2015	芦ノ口道路第9次調査（TM9）・青葉山E道路第9次 調査（AOE9）	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査室 調査報告5	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点	2016	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）	東北大理蔵文化財調査室
東北大理蔵文化財調査室 調査報告6	仙台城跡二の丸地区第18地点	2017	仙台城跡二の丸地区第18地点（NM18） 本報告	東北大理蔵文化財調査室

*これらの刊行物は、東北大機関リポジトリTOURおよび全国道路報告叢書で全て公開している。

東北大機関リポジトリTOUR <http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>

全国道路報告叢書 <http://siteresports.nabunkengo.jp/ja>

RESEARCH REPORTS
IN ARCHAEOLOGY ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
No.6 MARCH 2017

The Archaeological Research Office
On the Campus, Tohoku University
1-1, Katahira 2-chome, Aoba-ku, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

There are many archeological sites on the campus of Tohoku University. Among them, Sendai Castle is the largest and most famous. Almost all of the southern part of Kawauchi campus is located on the secondary citadel area. The northern part of Kawauchi campus is located on the sites of *samurai* residences.

In Japan, excavation research on buried cultural properties must be carried out if existing circumstances need to be changed at a recognized site area. Tohoku University's Archaeological Research Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report discusses the research results of salvage excavations of NM18 (Loc.18 of Ninomaru, i.e. the Secondary Citadel of Sendai Castle), located on the Kawauchi campus, conducted by the Archaeological Research Office in 2013 and 2014.

The purpose of this excavation was to identify the archaeological features and the stratification belonging to the phase of the Secondary Citadel of Sendai Castle still remaining in the area. Therefore, the excavation was halted once the features were recognized. As the result of the excavation, it was found that the majorities of the archaeological features of the Edo period have not been destroyed, and remain in good condition. Careful analysis indicated that there are some layers of leveled ground. These layers have been classified into temporal phases I ~ V based on the evidence of these layers and some archaeological features.

Phase I is the stage in which the Secondary Citadel of Sendai Castle was constructed.

Phase II is the stage just after the conflagration during the first year of Bun-ka(1804).

Phase III is the stage in which the Secondary Citadel of Sendai Castle was reconstructed following the conflagration.

Phase IV is the stage just after the conflagration during the 15th year of Meiji (1882).

Phase V is the stage since the 15th year of Showa (1940).

When comparing the data with Edo period map, the archaeological features from NM18, for example a number of structures, a few ditches and some pillars, partly matched the features indicated on the old map. However, since this excavation was halted when the features were recognized, there is scant evidence. It is therefore necessary to further compare and investigates these archaeological features, old maps, and documentary records.

写 真 図 版



1. 1区全景（東から）



2. 1区南壁断面（北から）

図版1 二の丸第18地点 1区全景・土層断面
PL1 View and cross section of area 1 at NM18



1. 1B・2B区調査区遠景（北西から）



2. 1B・2B区全景（上が北）

図版2 二の丸第18地点1B・2B区全景
PL2 View of area 1B and 2B at NM18



1. 1B区全景（右が北）



2. 1B区全景（北から）



3. 1B区南側断面北壁（西から①）（南から）



4. 1B区南側断面北壁（西から②）（南から）

図版3 二の丸第18地点1B区全景・土層断面
PL3 View and cross section of area 1B at NM18



1. 1B区南側断面北壁（西から③）（南から）



2. 1B区南側断面北壁（西から④）（南から）



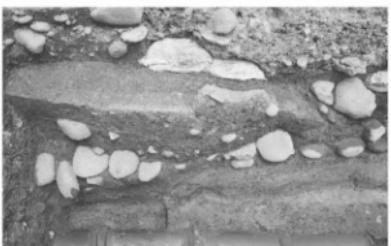
3. 1B区南側断面南壁（東側）（北から）



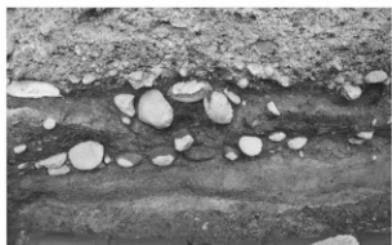
4. 1B区南側断面南壁（東側）（北から）



5. 1B区南側断面南壁（西側）（北から）



6. 1B区北側断面北壁（西側）（南から）

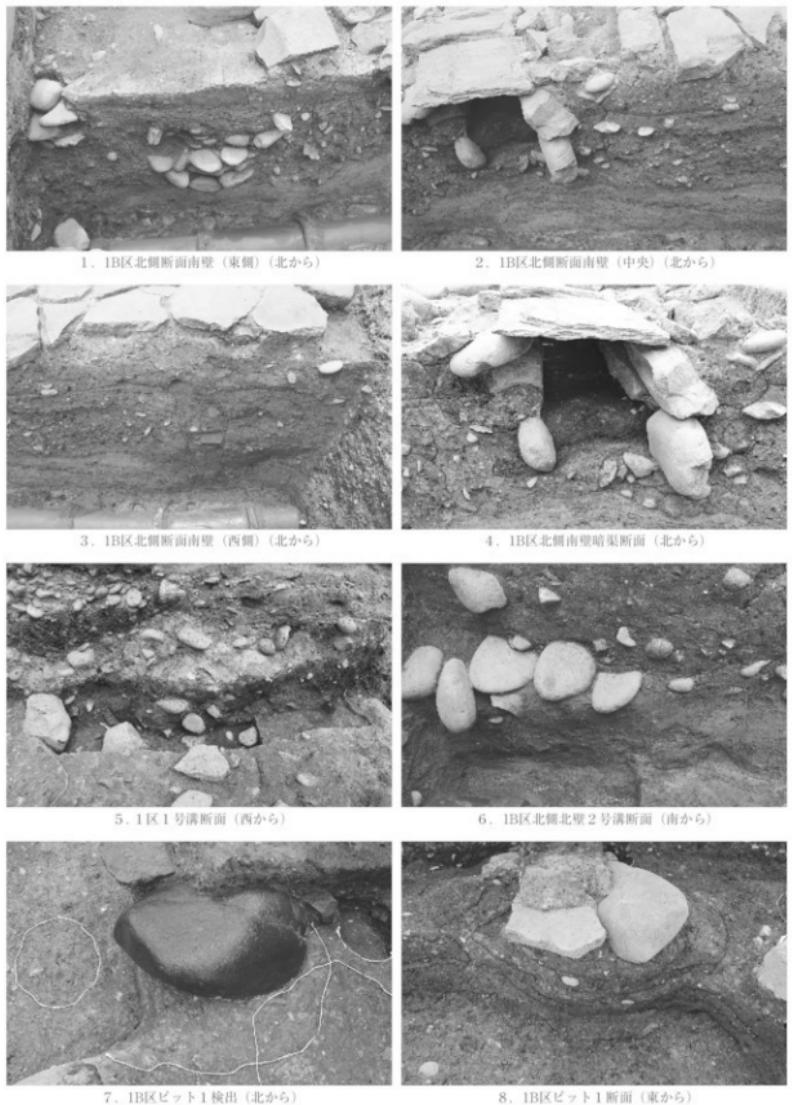


7. 1B区北側断面北壁（中央）（南から）



8. 1B区北側断面北壁（東側）（南から）

図版4 二の丸第18地点1B区土層断面
Pl.4 Cross section of area 1B at NM18



図版5 二の丸第18地点1B区遺構・土層断面
Pl.5 Features and cross section of area 1B at NM18



1. 1B区ピット2検出（西から）



2. 1B区ピット3断面（北から）



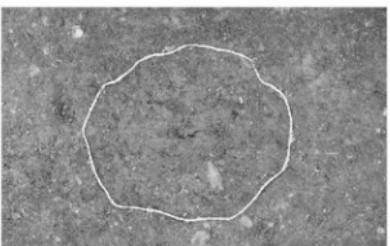
3. 1B区ピット4断面（北から）



4. 1B区ピット5断面（南から）



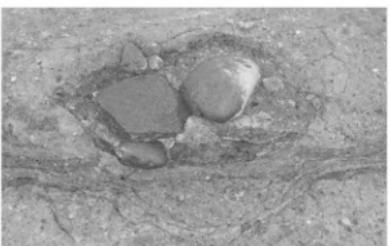
5. 1B区ピット6検出（東から）



6. 1B区ピット8検出（東から）



7. 1B区抜取跡24検出（北から）



8. 1B区抜取跡24断面（北から）

図版6 二の丸第18地点1B区遺構
Pl.6 Features of area 1B at NM18



1. 2B区全景（上が北）



2. 2B区全景（東から）



3. 2B区全景（西から）

図版7 二の丸第18地点2B区全景

Pl.7 View of area 2B at NM18



1. 2B区南壁断面（東から①）（北から）



2. 2B区南壁断面（東から②）（北から）



3. 2B区南壁断面（東から③）（北から）



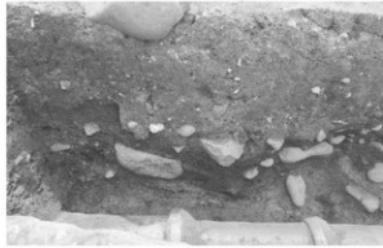
4. 2B区南壁断面（東から④）（北から）



5. 2B区南壁断面（東から⑤）（北から）



6. 2B区南壁断面（東から⑥）（北から）



7. 2B区中央南壁断面（東から①）（北から）



8. 2B区中央南壁断面（東から②）（北から）

図版8 二の丸第18地点2B区土層断面（1）

PL8 Cross section of area 2B at NM18 (1)



1. 2B区中央南壁断面（東から③）（北から）



2. 2B区中央南壁断面（東から④）（北から）



3. 2B区中央南壁断面（東から⑤）（北から）



4. 2B区中央南壁断面（東から⑥）（北から）



5. 2B区中央南壁断面（東から⑦）（北から）



6. 2B区中央南壁断面（東から⑧）（北から）



7. 2B区中央南壁断面（東から⑨）（北から）



8. 2B区中央南壁断面（東から⑩）（北から）

図版9 二の丸第18地点2B区土層断面（2）

Pl.9 Cross section of area 2B at NM18 (2)



1. 2B区1号溝検出（南から）



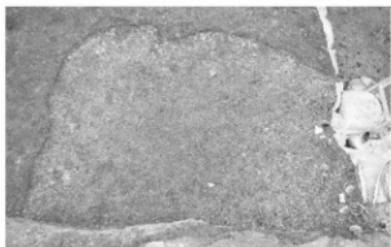
2. 2B区2号溝検出（南から）



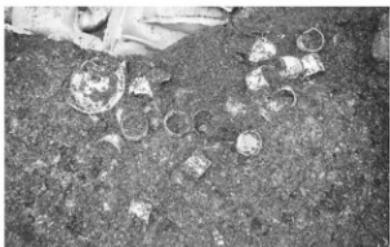
3. 2B区ピット1検出（北から）



4. 2B区ピット2検出（南から）



5. 3区廃棄土坑検出（南から）



6. 3区廃棄土坑遺物出土状況（西から）

図版10 二の丸第18地点2B・3区遺構
PL10 Features of area 2B and 3 at NM18



1. 3区全景（東から）



2. 3区搅乱西壁断面（東から）

図版11 二の丸第18地点3区全景・土層断面
Pl.11 View and cross section of area 3 at NM18



1. 4区全景（南から）



2. 4区西壁断面（東から）

図版12 二の丸第18地点 4区全景・土層断面
PL12 View and cross section of area 4 at NM18



1. 5区全景（西から）



2. 5区搅乱東壁断面（北から①）（西から）



3. 5区搅乱東壁断面（北から②）（西から）



4. 5区搅乱東壁断面（北から③）（西から）



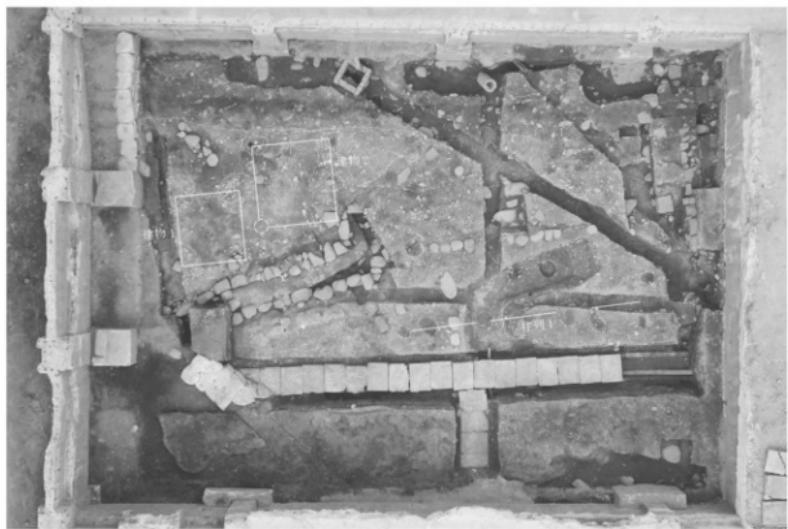
5. 5区搅乱東壁断面（北から④）（西から）

図版13 二の丸第18地点5区全景・土層断面

Pl.13 View and cross section of area 5 at NM18



1. 6A・6B区全景（上が北）



2. 6A区全景（上が北）

図版14 二の丸第18地点6A・6B区全景
Pl.14 View of area 6A and 6B at NM18



1. 6A区東西断面全景（北東から）



2. 6A区東西断面（東から①）（北から）



3. 6A区東西断面（東から②）（北から）



4. 6A区東西断面（東から③）（北から）



5. 6A区東西断面（東から④）（北東から）

図版15 二の丸第18地点6A区土層断面
PL15 Cross section of area 6A at NM18



1. 6A区東西断面（東から⑤）（北から）



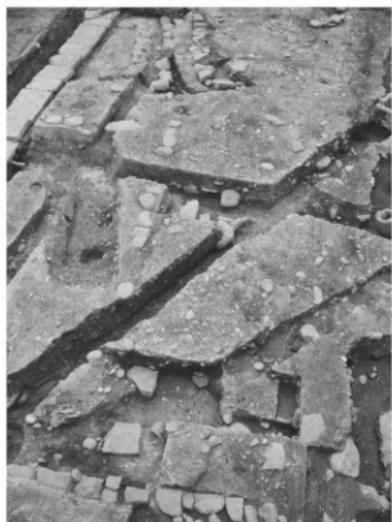
2. 6A区南北断面（南側）（西から）



3. 6A区南北断面（中央）（西から）



4. 6A区西側断面（南側）（西から）



5. 6A区東西方向石組溝（東から）



6. 6A区南北方向石組溝（北から）

図版16 二の丸第18地点6A区土層断面・遺構
Pl.16 Features and cross section of area 6A at NM18

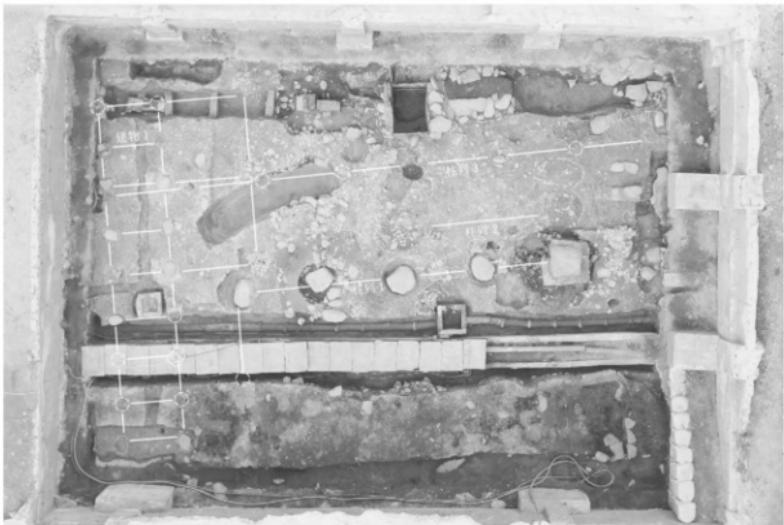


1. 6A区石組溝・木柵東側断面（西から）



2. 6A区石組溝中央断面（西から）

図版17 二の丸第18地点6A区遺構
PL17 Features of area 6A at NM18



1. 6B区全景（上が北）



2. 6B区西側造構配置（北から）

図版18 二の丸第18地点6B区全景
PL18 View of area 6B at NM18



1. 6B区東西断面（東から①）（北から）



2. 6B区東西断面（東から②）（北から）



3. 6B区東西断面（東から③）（北から）



4. 6B区東西断面（東から④）（北から）



5. 6B区東西断面（東から⑤）（北から）



6. 6B区東西断面（東から⑥）（北から）



7. 6B区東西断面（東から⑦）（北から）



8. 6B区東西断面（東から⑧）（北から）

図版19 二の丸第18地点6B区土層断面
PL19 Cross section of area 6B at NM18



1. 6B区東西断面（東から⑨）（北から）



2. 6B区東西断面（東から⑩）（北から）

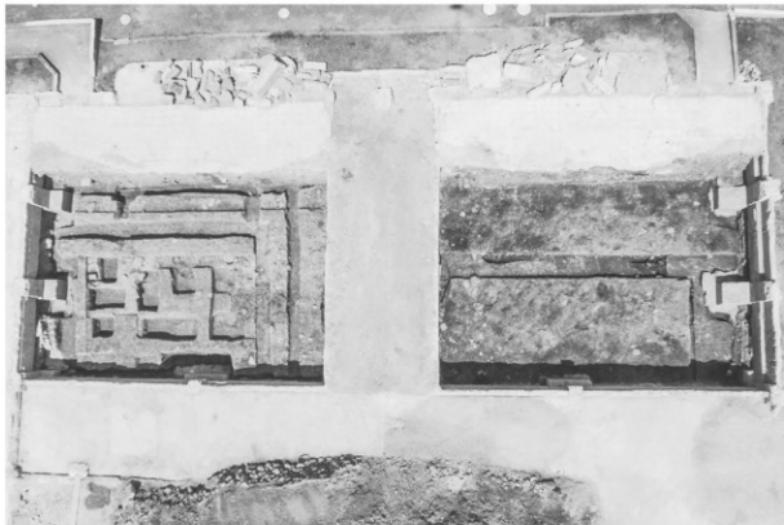


3. 6B区1号溝検出（北から）

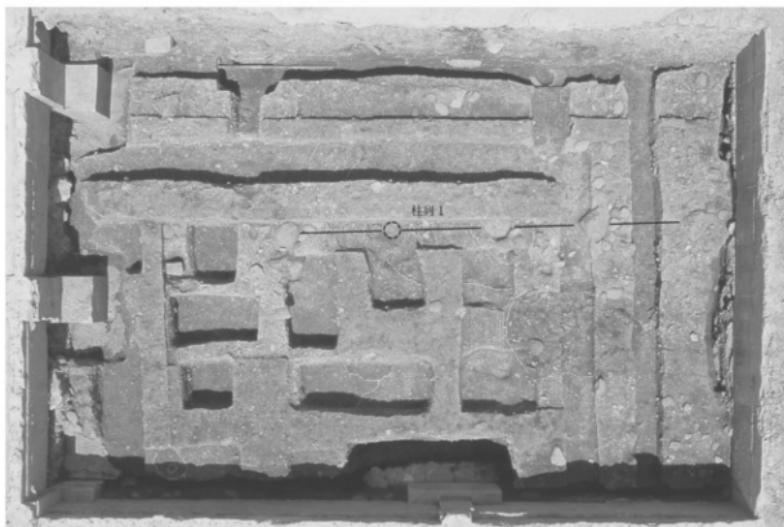


4. 7A・7B区遠景（北西から）

図版20 二の丸第18地点6B区遺構・土層断面、7A・7B区全景
Pl.20 Features, cross section, and view of area 6B, 7A, and 7B at NMI8



1. 7A・7B区全景（上が北）



2. 7A区全景（上が北）

図版21 二の丸第18地点7A・7B区全景
Pl.21 View of area 7A and 7B at NM18



1. 7A区東西断面全景（南から）



2. 7A区東西断面（西から①）（南から）



3. 7A区東西断面（西から②）（南から）



4. 7A区東西断面（西から③）（南から）



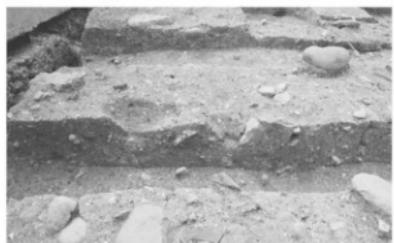
5. 7A区東西断面（西から④）（南から）

図版22 二の丸第18地点7A区土層断面（1）

Pl.22 Cross section of area 7A at NM18 (1)



1. 7A区南北断面全景（東から）



2. 7A区南北断面（南から①）（東から）



3. 7A区南北断面（南から②）（東から）



4. 7A区南北断面（南から③）（東から）



5. 7A区南北断面（南から④）（東から）

図版23 二の丸第18地点7A区土層断面（2）
Pl.23 Cross section of area 7A at NM18 (2)



1. 7A区南端東西断面（西側）(南から)



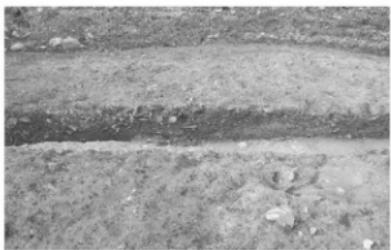
2. 7A区南端東西断面（東側）(南から)



3. 7B区全景（上が北）



4. 7B区東西断面（西から①）(南から)



5. 7B区東西断面（西から②）(南から)

図版24 二の丸第18地点7A区土層断面、7B区全景・土層断面
Pl.24 Cross section and view of area 7A and 7B at NM18



1. 7B区東西断面（西から③）（南から）



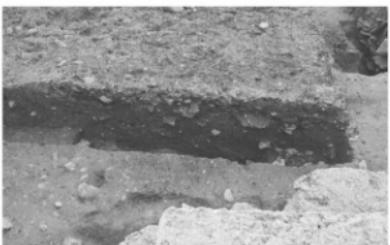
2. 7B区東西断面（西から④）（南から）



3. 7B区東西断面全景（南から）



4. 7B区南北断面（南側）（東から）



5. 7B区南北断面（北側）（東から）

図版25 二の丸第18地点7B区土層断面
Pl.25 Cross section of area 7B at NM18



1. 7B区南北断面全景（東から）

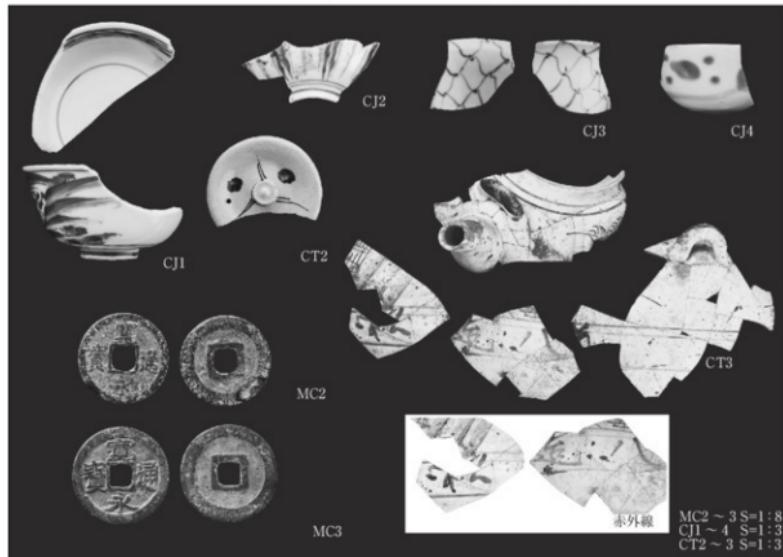


2. 7C区全景（北から）

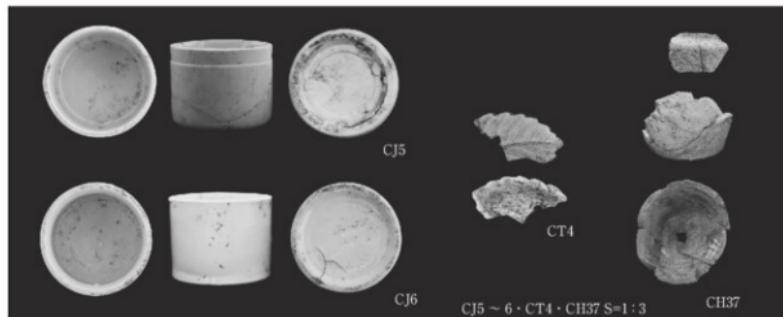
図版26 二の丸第18地点7B区土層断面、7C区全景
Pl.26 Cross section and view of area 7B and 7C at NM18



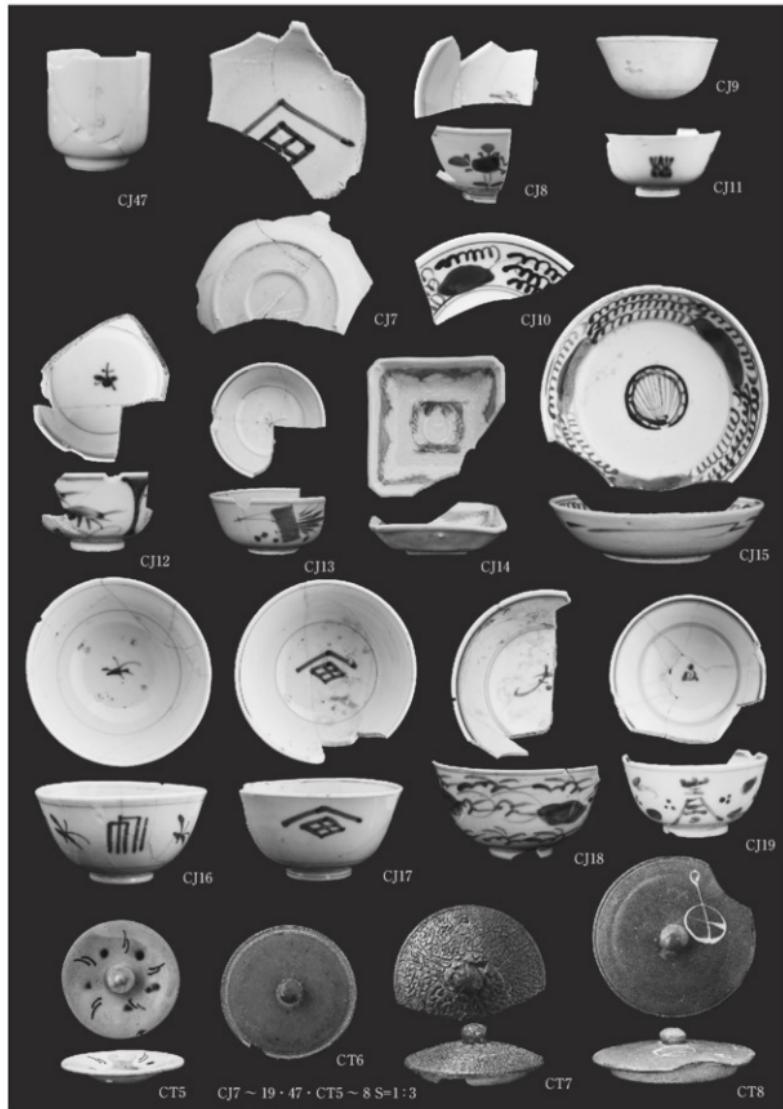
図版27 二の丸第18地点（1・1B区）出土遺物
Pl.27 Various implements from NM18 (Area 1・1B)



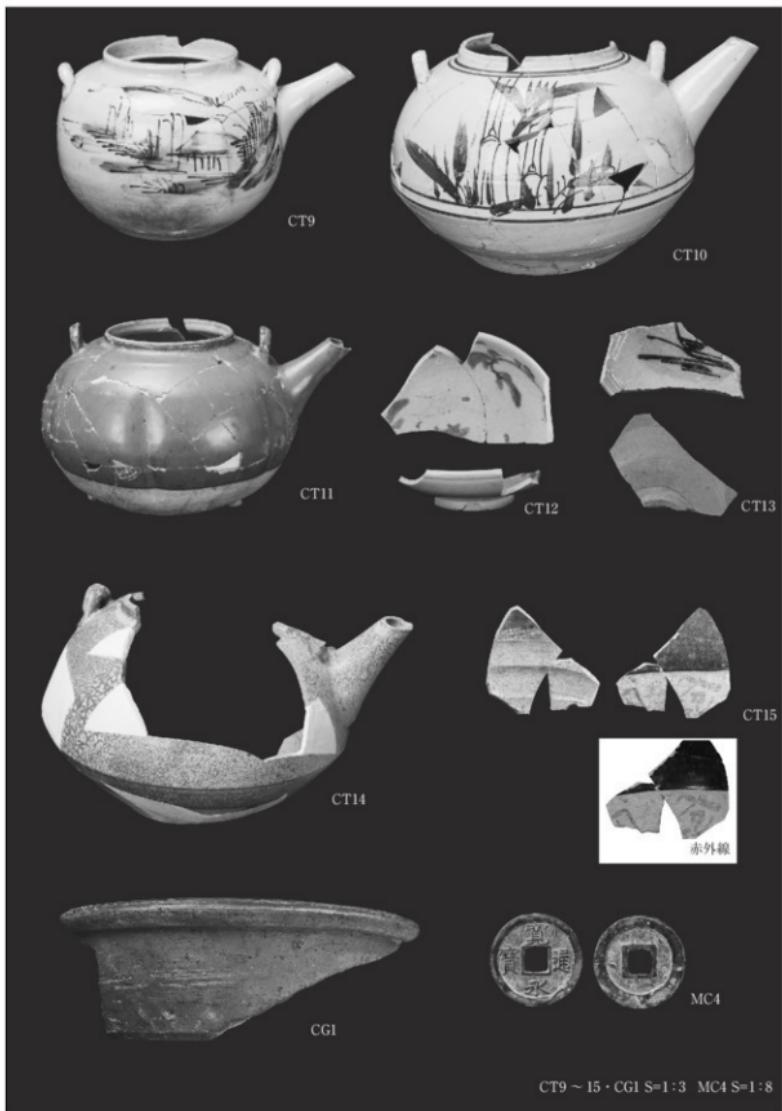
図版28 二の丸第18地点（2・2B区）出土遺物
Pl.28 Various implements from NM18 (Area 2・2B)



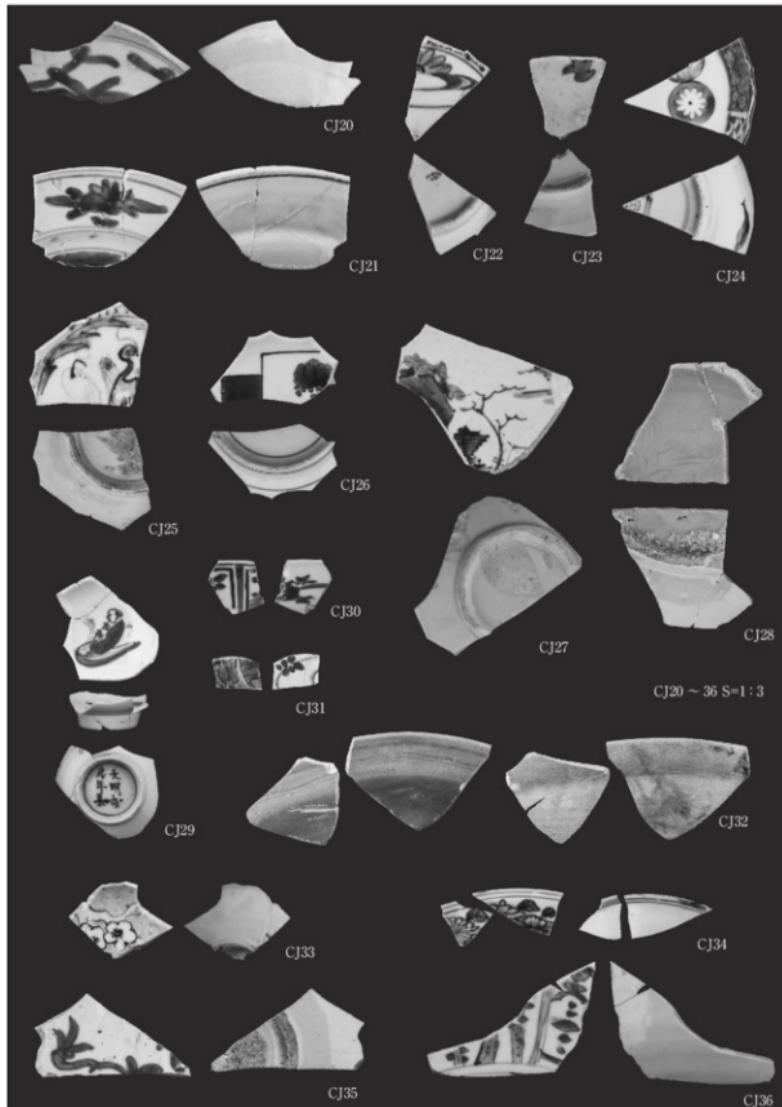
図版29 二の丸第18地点（3区）出土遺物
Pl.29 Various implements from NM18 (Area 3)



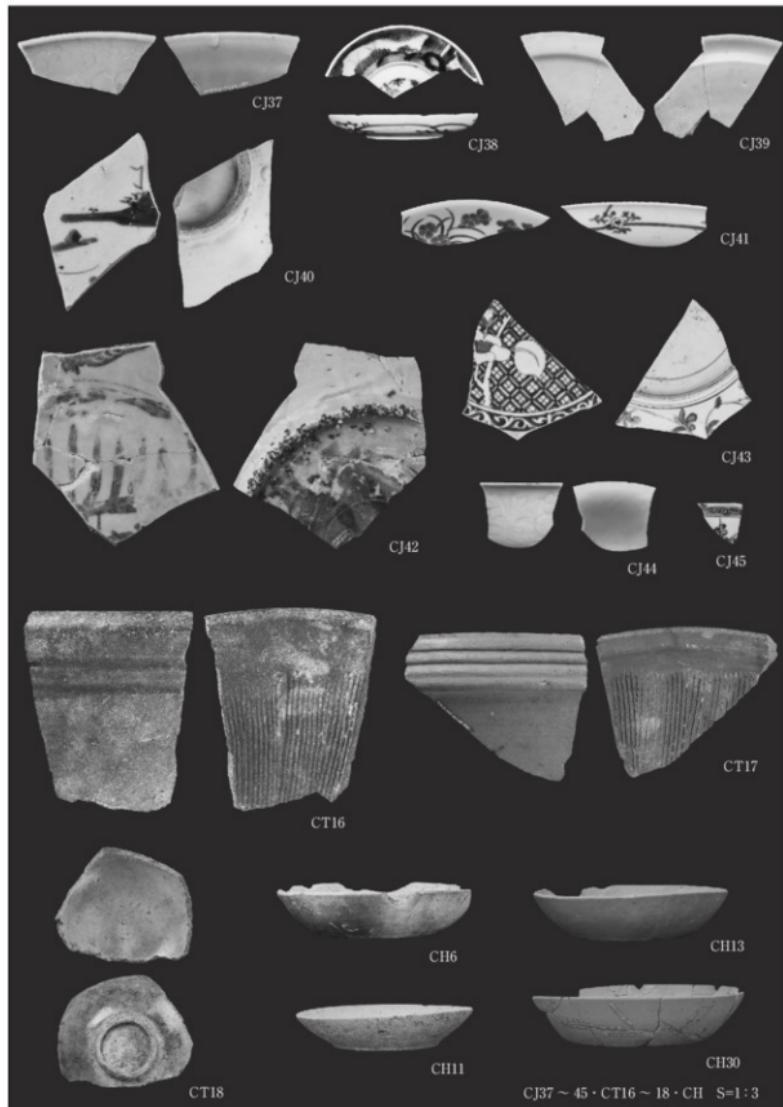
図版30 二の丸第18地点（6A区）出土遺物（1）
Pl.30 Various implements from NM18 (Area 6A) (1)



図版31 二の丸第18地点出土遺物（6A区）(2)
Pl.31 Various implements from NM18 (Area 6A) (2)

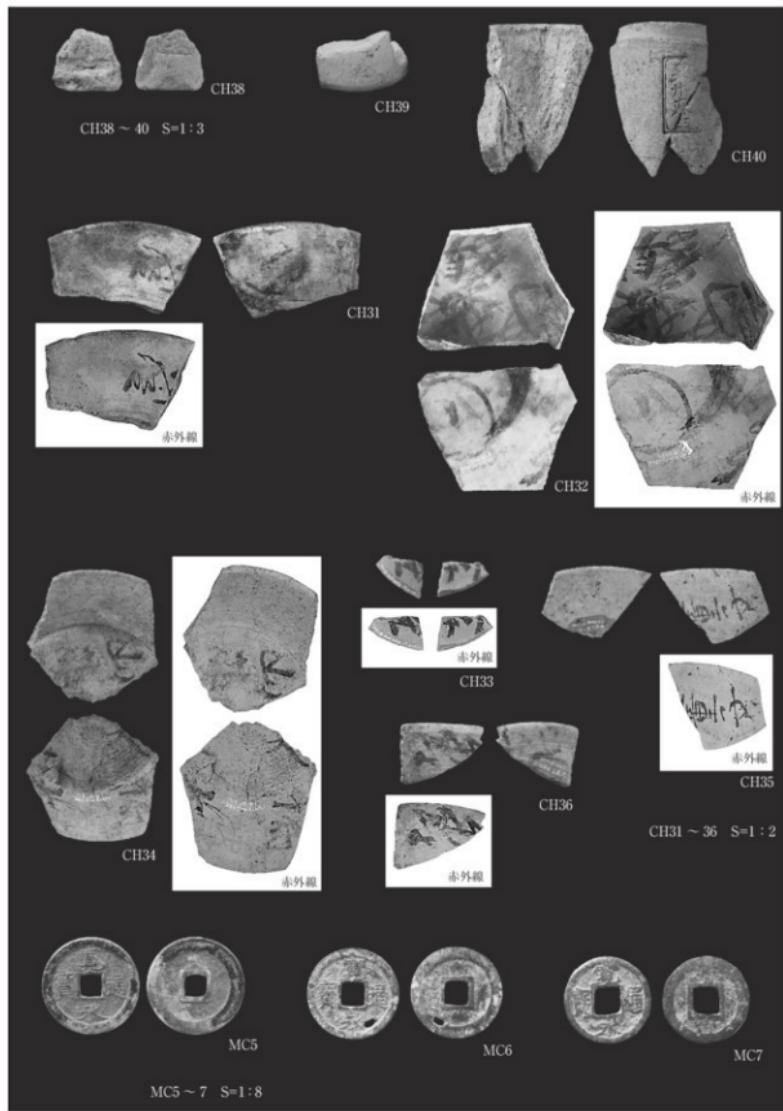


図版32 ニの丸第18地点(6B区)出土遺物(1)
Pl.32 Various implements from NM18 (Area 6B) (1)

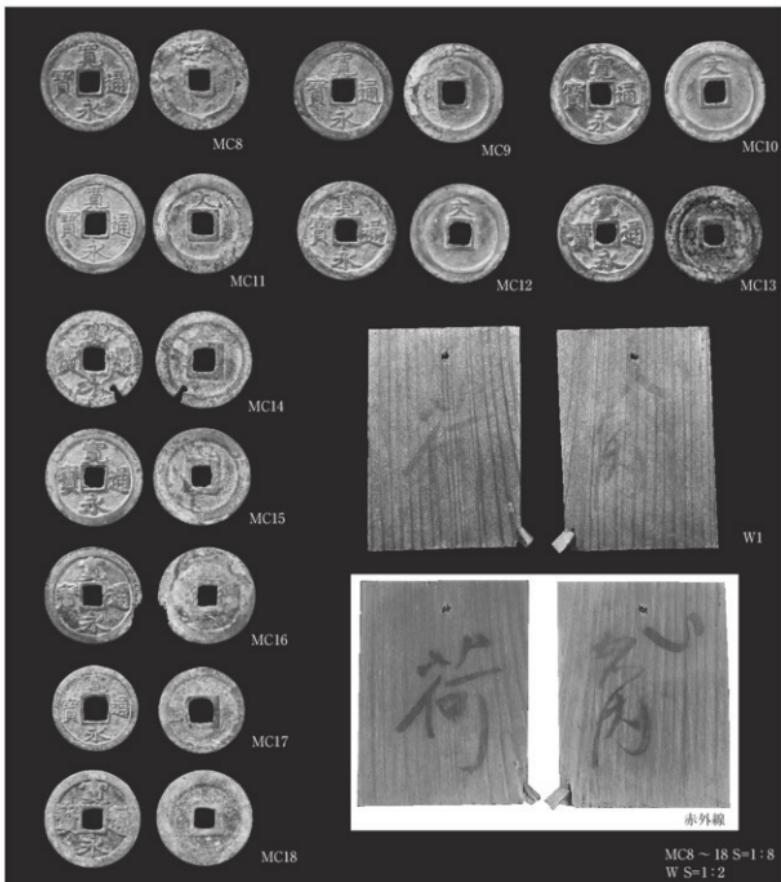


図版33 二の丸第18地点（6B区）出土遺物（2）

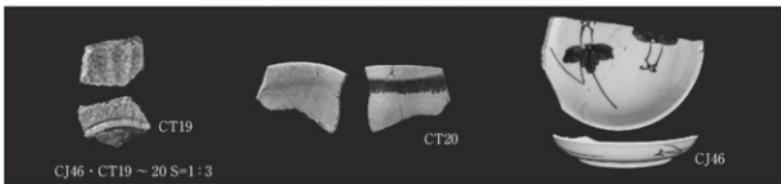
Pl.33 Various implements from NM18 (Area 6B) (2)



図版34 二の丸第18地点（6B区）出土遺物（3）
Pl.34 Various implements from NM18 (Area 6B) (3)



図版35 二の丸第18地点（6B区）出土遺物（4）
Pl.35 Various implements from NM18 (Area 6B) (4)



図版36 二の丸第18地点（7A・7B区）出土遺物
Pl.36 Various implements from NM18 (Area 7A・7B)



図版37 二の丸第18地点（7B区）出土遺物
PL37 Various implements from NM18 (Area 7B)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せんだいじょうあとにのまるだい18ちてん							
書名	仙台城跡二の丸第18地点							
副書名								
卷次								
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告							
シリーズ番号	6							
編著者名	菅野智則・柴田恵子・石橋 宏							
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因		
せんだいじょうあと 仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区川内 27-1	市町村 04100	遺跡番号 01033	北緯 38度 15分 27秒	東経 140度 51分 10秒	2013.3.13~5.17 2014.4.1~6.30	117.4m ² 671m ²	総合研究棟(国 際文科学系) 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
仙台城跡 二の丸 第18地点	城館	近世	ピット、溝、礎石、性格 不明遺構	陶磁器・土器・瓦・ 金属製品	複数の整地層を 確認した。			
要約	本調査は、仙台城跡二の丸期の遺構やそれ以前の土層等の遺存状況を確認するための調査である。調査の結果、近現代の搅乱はそれほど広がらず、各調査区において二の丸期以前の土層が良好に残っていることが判明した。また、搅乱部における土層断面の観察から、複数時期の整地層や遺構を確認した。							

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 6

仙台城跡二の丸第18地点

平成29年3月31日

発行 東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1 TEL 022 (217) 4995

印刷 株式会社 東北プリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24 TEL 022 (263) 1166
